

申しちや何たか人を殺すことにかけては、當時、道庵の右に出でる者は無え……道庵が長者町へ
 薬を食つて以來、道庵の匙にかつて命を落した者が二千人からある」

「困つちまうな先生、そんな事を云つてゐる場合じやありませんせ」

折角の親切を無にして道庵先生は、フラリ／＼と第六天の前へ差しかゝりました。

さうするに第六天の鳥居の蔭に一團になつて息を殺してゐる人影が、通りかゝる道庵を認めて、
 聲を立てないで、手を上げて頻りに招くのが道庵の眼に留つたから、道庵もひよい／＼其方を向き
 ました。その時に一團の中から、いきなり飛び出して来た一人の男が、いきなり道庵の手首を取
 ち、無言つて鳥居の方へ引ずつて行かうとします。道庵は其の手を振り切らうとしたが、何分、
 腰が据わらないので、思ふやうにならない處を、男はまた一生懸命で、道庵を引張込もうとしま
 す。さうなるに道庵は面白半分に、駄々を捏ねる氣になつて、足をバタ／＼させながら、行かじ
 とします。けれども、道庵を引張りに来た男は、たしかに一生懸命で、これも矢張り地廻りの一
 人でありませう。道庵をそれと知つたもんだから、自分も怖い中から飛び出して来て、何も知ら
 ない道庵の爲に行手の危険を防いでやらうとする親切であります。

それも口を利くさあぶないから黙つて遮二無二、道庵を引張り込もうとするが、道庵は今云ふ通
 り、ワザと足をバタ／＼させて駄々を捏ねるのだから始末におへません。親切に引張り込もうと
 した男はいよく焦つて力の限り引張ると、道庵はまた、いよく面白がつて、

なにがしは平家の侍、悪七兵衛景清と、名のりかけ、名のりかけ手取にせんさ追うて行く……
 三保谷が着たりける、兜の鍔を取りはづし取りはづし、三三度逃げのびたれども、思ふ敵なれ
 は遁さじと、飛びかゝり兜をおつさり、えいやと引くほごに……

面白がつて道庵は「景清」の語をおつはじめました。

「先生、諸處じやありません、やつてますせ、やつてますせ、斬合が初まつてるんだから早く此
 方へ逃けてお出でなさいまし」

漸く小さな聲で、これだけの事を云つて、最後の力で引張り込まうとしたが、この場合に於て三
 保谷の方が、役者が一枚上であつたから始末に行きません。腕から江つて羽織の裾に取りつき鍔
 引が、草摺引になつたけれども、この度の朝比奈も亦餘りに意氣地のない朝比奈で、五郎時致は、
 またあんまりふざけ過ぎた五郎時致でありました。

「先生、怪我があつても知りませんせ、しつかりしなくつちや可けません」

折角、飛び出した男が持て餘してゐる時に、柳橋の角から、星明りの闇夜に現れた人影が一つ、
 踏々跟々として此方に向いて歩いて來ます。その手にしてゐる秋の尾花のやうな白刃が、星明り
 の闇にもきらめいて、足許のあぶないのは、たしかに重い手傷を負うてゐるものと見られます。
 それと見た男は道庵を突き飛ばして、あわて、第六天の社内へ逃込みました。突き飛ばされた道
 庵は危くそれを残して踏み直り、これも千鳥足、向ふから歩いて來る千鳥足と、此方から歩いて

行く千鳥足さは、同じ足許があぶないながら、たしかに性質が違ひます。その邊に一向御夢中な道庵先生の危ない事。

暗い處で、よく判らないが、右の手に刀をブラ下けたまゝで、左の手を以て、右の肩の上を、しっかりと押へて眞蒼な面にしてフラリ／＼と歩いて来るのは、年の頃はまた若い袴を着けたさうひであります。

出合頭に、それを打着かつた道庵は、

「やア、危ねえ！」

この時一堪りもなく、後へ引くり返つてしまひました。けれども、それは、一刀の下に切り伏せられたのでありません。鉢合せをして打倒れたまでの事で、道庵が痛い腰を擦つて起き直らうとした時に先方のさむらひも同じく後に打ち倒れてゐることを認めました。然も、酔つぱらつてゐる道庵は兎も角も起き直る餘裕があるのに、向ふへ打ち倒れたさむらひは、起き上る氣力がありません。

「氣をつけて貰ひたいね」

道庵は斯う云つて起き上がり、倒れた先方の人の處へ行つて見る。その人は蟲の息です。道庵は、よくそんな處へ出會せる男で、いつぞやも伊勢参りをした時に、やはり、こんなやうな鉢合せから初まつて、宇治山田の米友といふ珍物を掘出したのは、この先生の手柄であります。

「そーら見る、悪いいたづらをするこ洞が當るぞよ、世界の立て直したぞよ」

と云ひながら、蟲の息で倒れてゐる人の傍へ寄つて見て、

「やア、殺られたな、右の肩先をバラリズンと行られたな、手傷を押へて、フラリ／＼と此處まで、やつて来た處を拙者と鉢合せをした爲に手傷が裂けて、斯うなつたのは誠に氣の毒だ、まあ待ち給へ、拙者がお手のもので一つ手當をして進めるから」

道庵は手負を抱き起して、一方には自分の羽織を脱いで、その肩先の創口を確乎と捲き、血留をして置いて、さて應急の手當を試みようとしたけれど、遺憾ながら、それはもう手後れでありました。

打倒れた途端に、斬られた右の肩先から、ほごんご全身の血を土に飲ませてしまひ、道庵先生の羽織一枚は、グチャ／＼になつてしまひ、見る／＼、そのさむらひの面は蠟のやうに變じて、道庵に抱えられながら、蟲の息が、ついに斷末魔の息となり、やがて眠るが如く粹切れてしまひました。

こゝで道庵が人を呼ぶか、さうかすれば宜かつたのだが、この時分は、酔眼、いよ／＼朦朧として、意地にも我慢にも眠くなつて堪まらないやうでした。斬られたさむらひの屍骸を抱え込んで、さう始末しようといふ當があるでもなく、朦朧たる酔眼を幾度も／＼見張つて、

「屍骸の云ひひらく、よく死すべきものを活かすにあら、よく活くべきものを活かしむるなり」

こんな事を云ひながらも、多少は正氣があるさ見えて、有らん限りの力を入れて、その死骸をせめて往來の片端へでも運んでやらうと努力を試みてゐるものやうです。併し乍ら、それは蟻が一生懸命で生殺しの、蛇に取りついてゐるやうに、ズルズルと引張つては、また離してしまひ、また引張つては離れ、離れては引張り、引張つてゐるうちに自分の腰が砕け、砕けた腰がまた箱まるさ、揉手をして取りつき、右が入つて抱き込んだかと思ふと、勝手が悪いさ見えて携き直して見たり、諸差になつたから、もう此方のものさ思つてゐる途端に、また自分の腰がグタ／＼と砕けて、力負けをしてしまつたり、本人は一生懸命のつもりたらうが外目で見れば、屍骸を玩具にして四十八手の裏おもてを稽古してゐるやうで見られたものではありません。けれども、此の獨り角力も、もうヘト／＼に疲れきつて道庵は屍骸の腋の下へ頭を突込んだかと思ふと、やがてグウ／＼と顛を立て、寢込んで了ひました。

四

一方、駒井甚三郎は、船宿の表の戸に突き當つた物音を聞くさ沈着な人に似合はず、立ち上つて、それを諫止しようとする寅吉に提灯を點けさせ、二階の梯子を下りて表口の戸を開けて外へ出ました。戸を開けて一歩外へ出るさ、紛として血の香が鼻を撲ちます。

甚三郎が提灯を突きつけて見るさ、つい土臺石の下にのめつてゐる一つの血腥さい死骸がありま

す。

長い刀は一間ばかり前へ投げ出してゐるのに、左の手では手拭を當て、額をしつかりと押へて、その押へた手拭の下から血が滲み出して面を染てゐるから、その人相をさへ、しかと認めることは出来ないが、正しく相當のさむらひであります。

駒井甚三郎は、傍へ差し寄つて檢べて見るさ、すゝと額から眉間まで一太刀に引かれて、あつと云ひながら、それを片手で押へて夢中になつて、こゝまで、よろめいて来たものさ見えます。

よろめいて来て、人の家の戸口さ知つて、刀を抛り出して、その手で戸を二つ三つ叩いたのが最後で、こゝに打ち倒れて、そのまゝになつたものに相違ないさ思はれます。

最早、さうしようにも手當の餘地は無いさ見た駒井甚三郎は、關はり合ひを怖れて、そのまゝ戸を閉ちて引込むかと思ふと、さうでなく、提灯を持つて、スタ／＼と柳橋の方へ進んで行きました。

寅吉も、駒井が出て行くのに自分も隠れて居られないから、甚三郎の後を追はうとするさ。

「寅吉、お前は危ないから出て来るな」

「殿様こそお危なうございますよ」

「出て来ては可かん、關より出てはならぬさ云ふに」

甚三郎は寅吉を抑へて表へは出さないやうにして、自分だけは提灯を提けて橋の方へ出直しまし

た。関の中にあつて、戸の間から面だけを出した寅吉は、安からぬ色をして駒井甚三郎の後姿を見送つてゐるが、その心配のうちにも、また安んずる處があるのは、それは此の殿様が、もごより武藝にかけて何一つおろそかは無いが、殊に、鐵砲にかけては海内無雙であるといふことを知つてゐるからであります。さうして、懷中には、いつもその時代最新式の、外國から渡つた短銃を離したこのないのも知つてゐるからであります。

駒井甚三郎は、向うへ歩んで行きながら提灯の光で地面を照して、氣をつけて見るに血汐のあまが、ぼたり／＼と筋を引いてゐるのであります。斬合は、櫓に柳橋の上で起つてゐる、何方が如何ともわからないが、その人数は一人ではなく、こゝかに三人以上の斬合になつてゐる。もし三人とすれば、必ずや一方は一人、一方は二人であるに相違ない。自分のゐる處の門口へ來て倒れたのは、そのうちの何方か知らないが、また二人は櫓に橋の上に残つてゐる筈である。負傷して橋の上に残つてゐなければ何方へか逃げて行つたものであらう。逃げて行つたとすれば、その二人で、この一人を討つて立ち退いたものであらうが、それにしても卑怯である。喧嘩か意趣か辻斬か知らないが二人で一人を斬つて、その最後も見届けずに逃げてしまふのは腰抜けである。それには有るべからざる事だから、多分、その二人も傷ついて、そこらに斃れてゐるたらう。駒井甚三郎は、さう思つたから、現場を見届ける爲に橋の上まで來て、提灯を差出すと、果せる哉、橋の欄干にしがみついてゐる一個の人影を認める事が出來ました。

駒井甚三郎は、その橋の欄干にしがみついてゐる人影に提灯を差つけて見ると、それも然るべき、若いさむらひでありました。

前のは、兎も角も向う傷であつたが、これは斬られて後に欄干にしがみついたのか、逃げ場を失うて欄干にしがみついた處をやられたのか、後袈裟に、ザツクリと思ふ盡に浴びせられて、二言ともなく息が絶えてゐる形であります。その死者狂で欄干へ取りついたので木の枝にかじりついた蟬のぬけ殻と同じやうな形であります。

駒井は篤き提灯の光で、それを見届けた上に、なほ餘に橋の上を進んで行くのであります。その進んで行く橋板の上はベツトリと血だらけですから、やゝもすればそれになつて足を浚はれようとする間を選んで徐々に歩きました。

左には兩國橋が長蛇の如く蜿蜒としてゐる。右手は平右衛門町と淺草御門までの間の淋しい河岸で、天地は深々として、神田川も大川も水音さへ眠るの時でありました。

「駒井の殿様」

堪り兼ねたさ見えて寅吉が、あまを慕うて來ました。

「お危なうございますよ」

駒井甚三郎は提灯を、さし上げて、寅吉の方を照しましたけれど、その時は、もう來るなご云つて止めはしません。

「あッ」
と云つて、寅吉は、その橋板に流されてゐる血汐に沁りました。お危なうございませうといふ口の下から、自分が危なく打倒れようとして橋の欄干に取り縋つた、ついその隣りは、例のしがみついた屍骸でしたから、慄え上つて飛び退きました。

「駒井の殿様、あんまり進み過ぎてお怪我のないやうに」
寅吉は橋を渡りきることが出来ないでゐたが、駒井甚三郎は頓着なく橋の向ふの板留まで歩いて行きました。

そこで、ゆくりなく拾ひ上げたのは一口の刀であります。それを駒井が提灯の光りで見えてゐる時、今まで眠れるものゝやうに静かであつた大川の水音が、急にザワついて來ました。汐が上げて來たものでもなく、雨が降り出したわけでもなく、水の瀬が開ける音がしたのは一隻の端舟が、櫓の音も、忍びやかに兩國橋の下を潜つて、神田川へ乗り込み、この邊の河岸に舟を着けようとしたら、拾ひ上げた刀を見てゐた駒井は、早くも其の舟を認めました。刀を照した提灯の光りで、今時分、河岸へつけようとした怪しの舟の何者であつて、何處から來たものであるかを確かめようと思つました。

それを怪しいと見たのはお互の事で、こゝまで乗りつけて來た小舟の船夫は、また櫓を押すことを休めて橋上を吃と見上げました。

この深夜に、長い抜刀を片手にかざしながら、橋上にたゞ一人で突つ立つてゐる光景は、舟の下から見ても穩かな振る舞とは見えません。——それで、手を休めて、橋上の人のなさん様を眼も離さず見てゐたが、この小舟の中には、この船夫一人ではありません。他に一人の客があつて、その客人も亦、船夫と同じやうな怪しみと熱心さを以て橋上の人を見つめて居るのであります。それが爲に、折角、河岸へ着けようとした舟は河岸へ着かず、神田川を出で、大川に合せんとする處の波に揉まれて漂つてゐます。この怪しい舟の船夫といふのは小柄な男で、一人の乗客といふのは頭巾を被つた女のやうな姿の人、申すまでもなく、船夫は即ち宇治山田の米友で、お客は取も直さずお銀様でありました。

斯うして橋の上と下とでは無言のまゝに睨み合ひをしてゐました。駒井甚三郎は提灯の光で、その怪しの舟と乗組の何者であるやを見極めようとしたけれども、提灯の光は充分に其處まで届きません。舟の中なる米友は、同じ提灯の光をたよりに橋上の人を見つめてゐるけれど、提灯の光は朦朧として、思ふやうに其人の面影をうつして呉れません。

その時に駒井甚三郎は、ふと己の後で人の足音を聞き咎めたから、橋下をのぞんでゐた提灯を振り向けました。つい、自分の後十間とは隔たらない處に、またしても一個の人影があります。それは船大工の寅吉ではありません。寅吉は全く違つた兩國廣小路方面から歩いて來たもので、それも駒井の此處にゐることを認めて、成るべく忍び足で近づいて來たものと見えました。

「誰じゃ」

この時は駒井甚三郎が猶豫なく言葉をかけました。

「其許は誰じゃ」

その返事は、また少年の聲であるらしい。

「何用あつて、この夜更に」

駒井は再び咎め立てすると、

「其許こそ何御用あつて此の夜更けに」

少年は甚三郎に反問して來ました。

「橋の上が騒がしい故に、出て見た處であるわい」

「橋の上を騒がしたのは貴殿ではござらぬか」

少年はズリ／＼と二三歩進み寄ります。

「拙者ではない……見受ける處、そなたはまた少年のやうじや、橋の上が騒がしいと知つて一人

で此處まで來られたか、それとも件があつて來られたか」

駒井甚三郎は提灯を高くして、その少年の姿を見ようとしたけれどやはり充分に光が届かないのが残念です。

「如何にも、私には三人の連の者がありました、途中に於てその者の姿を見失ひたるが故に心許

なく、これまで追ひかけて參りました」

「お、その三人は……ここに斬られてゐる、多分、これ等の人達がそれではないか」

「え、」

離れてゐる少年は、その時に、つゝと橋板の方まで馳せ寄つて來ました。併し乍ら、刀の鯉口は切つて、寧ろ、駒井甚三郎を斬らんとして飛びかゝつて來るものゝやうです。駒井は提灯を楯に、その鋭鋒を避けんとするものであるかの如く見えます。

「その斬られた人々はいづれにござります」

「此れへお出であれ」

甚三郎は自身橋の上へ引き返して案内をしようとする。それと並び寄るかのやうな少年は刀の柄に手をかけて、

「貴殿は、抑何れの御方でござる」

斯う云つて詰問の體であります。返答の出やうによつては、立處に斬つてかゝらうとする事の體でありました。駒井甚三郎は提灯をかざして、矢張り、その少年の鋭鋒を避けるやうにしながら、

「拙者は此の附近に住居致す者でござるが、さういふ御身は、何れよりお出でなされた」

そこで、提灯の間に、二人の面が合ひました。いづれも覆面はして居りません。微かながら提灯の光は、二人の面差を映し出すに充分でありました。

「お、其許様は駒井能登守殿ではござりませぬか」
少年は驚き呆れた音聲です。

「宇津木君ではないか」

駒井甚三郎も亦呆れ面です。この少年は宇津木兵馬でありました。駒井甚三郎と宇津木兵馬との
會見は瀧の川の西洋火薬製造所以來の事でありました。

二人はまた意外の處で、意外の奇遇を喜びました。兵馬の語る處によれば、兵馬は、つい此の川
向ふの相生町の老女の家にあて、今夜は同宿の三人のさむらひを尋ねて此の處まで来たといふこ
とであります。

その三人の同宿といふのは某藩の士分の者であるが、近頃老女の家に寄寓して、番町の齋藤の道
場へ通つて居りました。然るに此の三人が、さうも辻斬がしたくて堪まらない容子が見える。近
頃頻りに兩國橋あたりに辻斬があるとの噂を聞いて、さうも腕が鳴つて堪まらないらしい。三人
が相談して此の二三日、夜な／＼出歩きをする事が兵馬の眼にもよくわかりました。

兵馬の眼から見れば、彼等はまた／＼辻斬をして歩く腕ではない——別段に辻斬をして歩く腕さ
いふのが有るべき筈のものではないけれど、さうも險呑に思はれて堪まらなかつた。併し、兵馬
は自分も夜な／＼出歩くことが多いことによつて、彼等の相談に乗る隙もなかつたし、それを忠
告する餘裕もありませんでした。

今夜、夜更けて染井方面から歸るまで、兩國橋の上で、兵馬は、ふと彼等三人と摺れ違ひになり
ました。彼等は兵馬を見るに逃げるやうにして通り抜けるから、それを見送つて兵馬はやり過し
はしたけれど、また好奇心にも驅られ、心配にもなつて、わざと引返して彼等のあとをつけて見
ようさ、廣小路まで来たけれど、遂に其處で三人の姿を見失つてしまつたといふことでした。

一旦、郡代屋敷の方面へ行つて見た後に、また引返して、柳橋の方へ出て見ると、その橋上に
立つてゐる人がある、提灯こそ提げてゐるが、手に抜刀を携へてゐる事の體が尋常でない。そこ
で誰何して見た其の人は元の駒井能登守であつた。

さういふ話を聞いて駒井甚三郎が、成程と思ひ、

「橋の上に一人、船宿の前に一人、都合二人だけ斬られてゐる、若しや、そなたの尋ねる人も
知れぬ、檢分なさるが宜い」

甚三郎が先に立つて、提灯を照らして兵馬を導いた處は、先づ橋の欄干に蟬のぬけ殻のやうにな
つて、しがみついてゐる一人のさむらひです。

「あ、これだ、これに相違ござりませぬ、これは田村左四郎と申す某藩の士でござりまする、あ
あ、無慘なことを致しました」

兵馬は眉をひそめて、後ろ袈裟に斬られた田村の無慘な殺され方をながめてゐましたが、
「さて、もう一人は此方に、眞甲を割られてゐる」

駒井は橋を渡り返して彼の船宿の前へ来て見ると、前に云ふ通り、眞甲の傷を手拭で押へたまゝ、刀を投出して仰向けに倒れてゐます。

「あ、これは多賀六郎と申す某藩の者、以前は鯛河岸の桃井の道場みづのりで相當の腕利でござりましたのに」

兵馬は、やはり無慘極まる思ひ入れて、その斬られぶりを、よく見て居りましたが、

「して、もう一人、餘語と申すやはり某藩の者が居りました筈その者の姿は見えませぬか」

と云つて四邊を見廻しました。

「また一人あつたさすれば、それは、やはり斬られてゐるか、逃げたか」

と駒井も不審がつて、そこで三人が一緒になつて、もう一人の行方を探さうとして、橋の方へ小戻りして來ました。

それからまた橋上へ取つて返した時分に氣がつくと、さい前、橋の下まで、やつて來た怪しの舟は、もう見ることが出来ません、再び大川へ出てしまつたのか、それとも橋をくゞつて神田川を溯つたのか、いつの間にか見えなくなつたけれど、それは、この場合、強いて探究して見なければならぬほどの事ではありません。

駒井甚三郎は、その時に此んな事を云ひました。

「拙者が甲府にゐる時分、あの城下で、一しきり辻斬沙汰が多かつた、十分、百姓町人、女まで

斬られた、随分、酷たらしい殺し方をしたものが、腕は非常に冴えてゐた、百方搜索したが遂にわからなかつた、あそこで聞くにその斬り手は斯く申す駒井ではないかと疑うた者があるさうぢや、駒井を除いては、あれほどに手が利いてさうして斬り捨て、巧に姿を隠すことの出來やうものが甲府の内外に有らうとは思はれぬ、新任の駒井能登守が、新刀試しの爲に、ひそかに城を抜け出で、辻斬を試みるのたう、さも無ければ廣くもあらぬ甲府城下の事だから、大よその見當がつかねばならぬ筈……さいふわけで駒井の身邊を頻りに警戒してゐた者があつたさやう、駒井は蟲も殺せぬ男のつもりだが、甲府城下ではそれほどに險呑がられた事がある、辻斬さいふものは一度味を占めるご止められないものたさうたな、一度が二度三度なるご度胸も据わつて、毎晩、人を斬らねば眠られぬやうになるさうな」

こんな事を云ひながら、橋板の上の血痕をよくく辿つて見ると、その一筋が平右衛門町から第六天の方へ向いてゐます。それを傳つて行つて見ると、第六天の社の少し手前の處の路傍に物の影が横はつてゐるのを髓めました。さてこそ！近寄つて見ると然もその屍骸が一箇ではなく、折重なつて二つまであるらしいことが先づ三人の膽を冷しました。それでは此處まで追蒐けて來て刺違へたのか、兎も角も當の敵を仕留めたものと見える、さう思つてゐると、またも三人の度膽を抜いたことは、その死屍の中から肝の聲が起つたことでもあります。これには駒井甚三郎も宇津木兵馬も上田寅吉も一方ならず驚かされないわけには行きません。如何なる大剛の人でも、斬り

伏せられて軒をかく人は無い筈です。また人を斬つて置いて、軒をかいて寝込んでしまふ人もあるまじきものです。

さすがの三人も、これには驚き入つて、づか／＼と近寄り検べて見ると、下になつてゐる一つは正しく斬られてゐる人ですがその斬られてゐる人の腋の下に首を突込んでゐる他の一人が當に大軒をかいてゐるのであります。何の事か、さつぱり譯がわからないながら、下になつてゐる屍骸を検分するには是非共その上になつてゐる軒の主を取り退けなければなりません。

「これ／＼、お起きなさい」

兵馬は、その脊中を叩いて、身體をゆすぶると、漸くにして起き上がった其の人は、一見して兵馬も其れを知る長者町の道庵先生でしたから、開いた口が塞がりません。

五

その翌朝、練堀小路の西の湯といふのへ、見慣れない一人の客が一番に入つて來ました。

この客は差してゐた兩刀を絡めて無難作に二階番頭に渡して、着物の帯を解きはじめます。見慣れない人ではあるけれども、この邊は旗本たの御家人たのといふものゝ屋敷が多いから、こんなお客が早天に飛び込んで來たからとて、大して物珍らしいといふ譯ではないが、兩刀こそ差してゐるけれど、また身なりとてさほかに落ちたものとも見えないが、たゞ異様なのは此の客が盲目

の人であることです、盲目であるにか、はらず、何時の間によつて來たか、番臺では何とも挨拶のないうちに、早くも二階へ姿を現はして、二階番頭を驚かせた事であります。

それから、人手も借りずに衣類を脱ぎ捨て、梯子を降りて浴槽へ行く舉動がちよつと盲人は受取れないやうです。入つて來た瞬間は如何にも病み上りのやうな弱さうな人に見えたが、裸體になつた筋骨は、さほざ衰へたものではありません。

二階番頭の老爺は茶道具を整理して、爐の上に茶釜を掛けながら、ちよつと許り首をひねりました。朝湯にしても夕湯にしても、湯屋のお客は其の繩張と面觸が大抵定まつたものであります。

湯屋の主人と番頭とは大抵そのお客の面と身分柄とをわきまへてゐるから、たまに新顔の客が來る時は多少の用心をします。板間かせきは、さうしても其の新顔の客の中から出るものであるから、その用心も亦無理ではないが、今日この早朝の客は、全く新顔であつて、全く別な意味で、番頭の目を引きました。

併し乍ら、僅かの間を置いて朝湯に飛び込んで來た吉原歸りらしい二人の御定連の騒々しい階子段の上り方で、急に二階番の老爺も興をさましてしまいました。

湯屋の二階は、一種の俱樂部でしたから新聞の種になるほどの噂は先づ此の處で様々に評判されました。色里から朝歸りの若い者共は先づ此の湯屋へ立ち寄つて、家の首尾の偵察を試みて、それから歸宅する足場としてゐる。斯うして此定連の朝湯客の中には威勢よく飛び込んで直ぐにト

ン／＼と浴槽へ降りて行く者もある、湯は其方のけにして話し込んでしまふ者もある。甚たしいのは前日の将棋の遺恨忘れ離く、朝湯も其方退けにし朝飯も顧る違なく遂に午飯の時になつて、山の神に怒鳴り込まれ、あわて、飛び出すものもある。そこで二人三人、知つた面が見える、昨晩の柳橋の辻斬の話であります。前の晩、柳原で女が殺されたことは、この邊は管轄違ひか知らん、それとも、昨晩の柳橋の出来事が大きかつた爲にそれに食はれたものか、柳橋の上で侍が三人まで斬られてゐたさいふこそその場へ現はれて狼藉者を追ひ散らしたのが長者町の道庵先生であつたさいふやうな事から、辻斬に次での道庵先生の評判が呼物になりました。處が、威勢よく、その時に二階へ上り込んで来たのが、今も噂の主の道庵先生その人でありましたから、集まつてゐたものが、やんやと喝采しないわけには行きません。

「いよう、長者町の先生」

彼等は、各々席を譲つて、下へも置かぬ持てなしてあります。

「先生、昨晩はまたエライ働きをなすつたさうで、いつもながら、先生のお手並には恐れ入つたものでけす、只今も、皆んな其の噂をして居りました、何でも先生は、あゝして猫を被つておゐてなさるんだが、實は、中國の然るべき家中の御浪人で、武藝十八般、何一つ心得ておゐてなさるのではないさいふ評判でございますよ、本業のお醫者さんの方は、界限きつての名人であらつしやるし、それに西洋の方の學問までちやあんさ呑込んでお出でなすつて、それを知つてゐるさもない

ふ面をなさらない處が、お見上げ申したもんだ、いつぞやはまた上野の山下で、持て餘し者の茶袋を、ちよいと指先をつまんで締め上げてギウと參らせてしまつた處なんぞは、その位柔術の方に達しておゐてなさるんだか底が知れねえ、昨晩は昨晩で、また命知らずの浪人が何十人といふもの第六天の前から柳橋へかけて斬り結んでゐた處へ、先生が、通りかゝつて、一聲音葉をかけるご散々バラ／＼逃げ去つてしまつたさいふでございますね、何處へ行つても其の評判で持ちきりでございますよ、實際、あの先生は、あゝしてふざけておゐてなさるけれど、學問といひ武藝といひまあ昔で云へば由井正雪といつたやうなお方だが、世が世だから、あゝして酒に隠れてふざけておゐてなさるんだ、町内ではあの先生を大切にしなくつちやならねえ、あの先生こそ町内の守り神たつて皆んなで、さう云つてた處ですよ」

まんざら、おひやらかすとも見えないやうに眞顔になつて先生を讀め立てたから堪りません。

「そんなでも無えのさ」

道庵先生はニヤリ笑ひながら顔を撫で、

「まあ話半分に聞いてもらひませうよ、よく云つたものさ、藪にも、この者さ云つてね、藪は藪なりに時々功名手柄をする處がをかしいのさ、昨夜なんぞはお前さん、拙者が通り合せなくてごらうじろ、たしかに焼討たね、あの中にはお前、日本で無双の砲術の名人が隠れてゐたんだぜ、それがお前さん、舶來のカノーネルさいふやつを引張り出して柳橋の袂へ据ゑつけ、これから向

ふ岸へぶつ放さうといふ處へ、折よく拙者が通りかゝつて、憚りながら長者町の道庵だ、と名乗りを揚げて、不足であらうが十八文に免じて拙者に任せてもらひたい、斯う云つて柳橋の真中へ大手をひろけて突立つたものさ、さうすると、やはり中には相當のわかつた奴もあつて、宜しい——外の人では任せるさといふ譯には行かねえが道庵なら任せても宜しい——」

「先生、もう澤山です、その位にして置いていたゞきませう」
堪り兼ねたのが兩手をかざして先生の口を抑へようさします。そこで大笑ひになりましたが、その間に道庵は大あわてにあわて、脱いた衣裳を棚へ押し込んで鍵もかけず、浴槽へ向つて逃けるが如く驅け下りました。

あそこでは、やはり腹を抱へて笑つたものがあるけれども、それでも先生の人徳で、誰も其の法螺を悪がるものもなく、敢て輕蔑しようとする者もありません。あゝ云つて眼に見えた法螺を吹いては、しよけ返つてしまふ處が先生の身上だ、あれがエライ處ださ云つて餘計な處へ有難味をつけるものもありました。

處へ湯から上つて来た人があります。それは最前、朝湯のいの一番に入浴した見慣れない盲目の人でありました。何時の間にか上つたか、もう棚の中から着物を取り出して帯を締めて、二階番の處へ行つて預けた大小を上げ取るさ、若干の茶代を置いて、煙の如く梯子段を下りて消えてなくなりました。

二階番も最初から訝怪な面であるし、居合せた定連の者も、呆氣に取られて其れを見送つて面を見合せました。

「盲目だね」

「盲目にしては怖ろしく勘が宜い」

「梯子段から上つて来て、すーつと消えてしまつた處が、眼に残つてゐるやうな、眼に残つてゐないやうな變な心持だ」

「わたしは、また、ひよつと振返つて見た時に、幽霊！と思ひましたよあの顔色を御覽なさい、まるで生きた人ぢやありませんね、この世の人ぢやありませんよ」

「見たね、全く忌な氣持のする人だ、一目見たゞけでソツとする人だ、あんなのは、キツト戸の透間からでも入つて来る人ですぜ」

「あんなのがお前、辻斬に出るんぢやないか知ら」

「たつて、盲目ではね」

「目が明いてゐたら、きつと違ふに違ひない、劍難の相さといふのはたしかにあんなのを云ふんたらう」

「さうだね、あれこそ劍難の相さといふんたらう、疊の上ぢや死ねない人相だ、人を斬つて業が祟つたから、それで盲目になつたんたらう」

「さう云へばさうだ、ありや、確かに劍難の相さいふものだ、人相は争はれない」

「全く人相は争はれない、劍難の相は何處かに凄味がある、女難の相は鼻の下が長い」

「笑ひ事では有りませんが、皆さんが劍難の相を仰有つたのは、よく當つてゐる、わたしやね、皆さんより一番先きに、あのおさむらひが下から上つて来る處を見ました、それから斯うやつて着物を探つて引かける處を見ましたがね、右の手首の處を晒で巻いてゐましたよ、その晒の外れに血が滲んでゐる處を見てソツとしましたぜ」

「え、え」

「だから、凄いと思ひました、今時分、お前さん、眞先がけで新顔の朝湯に来てさ、お負けに腰の物を大事に抱えてやつて来てさ、手首に怪我をしてるんですからな、たゞの傷ぢやありませんぜ、よく殺氣を含んでゐると云ひますがね、わたしや、あの時に直さう思ひましたよ、この、さむらひは人を斬つて来たんだ、その汚れを落す爲に、朝湯に飛び込んだんだ、さう思つたから、わたしや忌になつて、折角裸になりかけたのを締め直して斯うして、つぐんでしまつた處ですよ」

「へえ——さうかも知れませんね」

一同が面を見合せた時に、けたましい音を立て、梯子段を駆け上つて来たのは道庵先生であります。無論、素裸です。その時、先生は、いつもの先生とは違つて、すさまじい權幕をして、

「何處へ行つた、何處へ行つた」

と云つて、衣裳棚の前で、てんでこ舞をしてゐる先生の片手には、手拭かと思ふと、さうではない。晒しの切を引すつてゐるが、その晒しの切は處々血に滲んだ細い切であります。

定連の朝湯の客は、此の物狂はしい先生の舉動を、寧ろをかしがつてゐたが、先生は大急ぎで着物を引かけて、帯を締めるさ、湯鏡も茶代も、そつちのけにして、梯子を下りて表へ飛び出してしまひました。裸で飛び出さなかつたのが見つけ物で、煙草盆を蹴飛ばさなかつたのが勿怪の幸いです。

「油断も隙もなりやしねえ、さうも可笑しいと思つたんだ、何だか横顔にチラリと見覚えがあるから、こいつ、ヲかしいなと思つたんだ——野郎、伊勢の國の事を忘れたか、船大工のうちで、拙者が目をかけてやつたのを忘れやすまい、江戸へ出て来たんなら、出て来たさ拙者の處へ、一言の挨拶があつても悪い心持はしねえ、あの目がよ、あれで静止と心がけをよく養生してゐりやあ、さうやら物になる眼なんだが、あの心がけぢや物にならねえや、いゝ氣味だ、あん畜生——いゝ氣味はいゝ氣味だが、今、何處に何をしてゐるんだ、あゝして朝湯に来るんだから、此の近所にあるんたらう、近所にあるんなら近所にあるで兎角近所に事勿れ……處が、さうだ、悪いことは出来ねえもんだなあ、この晒しの切が、ちやんと、流し許に落つこつてゐた奴を、人もあらうに此の道庵に見つけられちまつた」

何か重大な發見でもしたかのやうに、道庵は息せききつて走りつゞけてゐるけれども、一向何を

追つてゐるのたかわからない。四邊をキョロ／＼見廻したけれども、それらしいものは何者も見えませぬ。

さきに、掻き消す様に朝湯を抜け出でた盲目の怪人は、四ツ角に待たして置いた手駕籠に乗つて、何處までもなく飛ばせてしまつた其の後の事ではありません。

六

下仁田街道から國境を越えて信州の南佐久へ入つた山崎と七兵衛は、筑摩川の沿岸を渡つて南へ南へ走りつゞけます。この二人の行手は説明を加へるまでもなく南條五十嵐等の浪士のあとを追つて行くものであります。而してまた南條五十嵐等の浪士は、がんりきの百を處の案内にて甲府城を目ざして進んで行つたことも明かであります。彼等は、甲府の城を鑑査して容易ならぬ陰謀を企たてんとしてゐることも明かであります。

それを察した山崎等は、事の發せざるうちに其の巢窟を覆へしてしまはなければならぬ。——蓋し南條五十嵐は強力に身をやつして都合五人で、この山道へ分け入つたけれども、必ず何れかに根據地があつて、そこで一たび合圖をすれば、なほ幾多の同志が續々集まつて来る事にはなつてゐるだらう。また山崎こそは單身で、あとを追ひかけたやうなものだが、甲府の地へ足を踏み入れた時は、勤番の武士は一呼して皆、その味方になるべき筈である。

併し乍ら、さう間違つたものか山崎と七兵衛との二人は、遂に南條五十嵐等の一行を突き留めることが出来ないで、甲府の城下に着いてしまひました。山崎も七兵衛も、その用心にかけては優劣のない方ですから、同じ道を通つたならば、彼等に出し抜かれる筈はない、道を違へたものか、或は横道をして外らしたのものか、それは兎に角、早く甲府の城下へ到着することが先手である、と思つたから二人は無二無三に甲府の城下へ到着しました。

城下へ着いて見たが、甲府城の内外には別に變つたこともない。今や勤番支配の駒井能登守も居らないし、組頭であつた神尾主膳もゐないが、そんな事は、別段に此の二人に交渉のあることではありません。

「山崎先生」

「何だ」

「久しぶりで甲府の土地へ足を入れて、はじめて思ひ出した事がありますよ」

「そりや何事だ」

「外の事じゃございませぬ、百の野郎が此處の土地へいゝ寝かし物をして置いたことを、今私が思ひ出しました、恐らく、百の野郎も忘れてゐやがると思ひますが、そいつを一つ取出して来て且那のお目にかけてませうかね」

「何だい、その寝かし物さいふのは」

「そりや刀でございます、名刀が一振かくしてあるんでございます」

「ナニ、名刀、名刀なら有つても決して邪魔にはならねえが、名刀にも品がある、お前達のいふ名刀はあんまり大した代物ではあるまい」

「それが中々素敵で、出處が確かなものなんですよ」

「古刀か、新刀か、在銘のものか、たゞしは無名か」

「古刀のベリくで、たしかやすつなと云つてゐましたよ」

「やすつな、やすつなも色々あるからな、出羽にもあれば下坂にもあるし、薩摩にも江戸にもあるんだ、出来のいいものもあるが、其んなに大したものじゃなからう」

「そんなんじやございませぬ、因州鳥取あたりに其のやすつなといふのはございませぬかね」

「因州鳥取にやすつなといふ刀鍛冶は聞かねえが……さうさう伯耆の國に安綱があるが、こりやの別物だ」

「それく、その伯耆の安綱でございますよ」

「兵衛が斯ういふと山崎譲は、

「ふん」鼻の先であしらひ、

「伯耆の安綱といへば古刀中の古刀で、大同年間の人だ、名刀鬼丸を鍛へた刀鍛冶の神様と云はれる大名人だ、伯耆の安綱がそんなにザラにあつて堪るものかい」

七

山崎は、テンで七兵衛のいふことを受附けなかつたけれど、七兵衛は確信あるもの、如く、

「論より證據、その品を持つて来てお目にかかせう」

と云つて甲府城の大手の前で、山崎と別れました。山崎に別れた七兵衛は、あれから一直線に甲府の市中を東に走つて、間もなく、酒折村まで来る。そこで本街道を曲つて入り込んだのが酒折の宮であります。

酒折の宮の庭へ入つて見ると、松林の間に人が集まつて喋いでゐます。

日本武尊が東征の時、こゝに行宮を置いて、

新治、筑波を過ぎて幾夜か寝つる

と歌を以て尋ねた時、傍の燭を持てるものが、

かゝなへて夜には九夜、日には十日を

と答へたといふ事蹟がある。

こゝに立てる石碑のうちには本居宣長の「酒折宮壽詞」を平田篤胤の筆で書いたものと、甲州の勤王家山縣大貳の撰した漢文の碑もある。七兵衛は、左様な委しいことは知らないけれども、此の社が由緒ある社であるといふことは心得てゐる筈です。右等の碑文が、さほど好事家の間に珍

重がられてゐるといふ理由は知らないが、いづれ俳諧師か何ぞの風流人の石摺を取つてゐるのた
らうと見當をつけました。

これ等の連中からわざと遠廻りをして社の裏へ出て暫らく容子をうかがつてゐると、
「エ、寶曆十二年、壬午夏四月、山縣昌謹とあるが、寶曆十二年は、一體、今から何年の昔に
なるのじや」

「左様な、寶曆は俊明院殿の時代で、え、今から凡そ一百三年或は四年前に當る——」
こんな事を云つて風流人は、紙に巻いたものを携へ、ソロ／＼松林の中を出て行つてしまひまし
た。

そこで七兵衛は神社の表へ廻り參詣をするふりをして扉を開けて、社内へ入り込むと足場を見は
からつて、梁を傳はつて天井の上へ身を隠してしまひました。

これは申すまでもなく、さいぜん山崎讓の前で嘗つた伯耆の安綱の刀といふのを取り出しに來た
ものであらう。その伯耆の安綱の名刀といふのは、お銀様の家、藤原家に祖先以來傳はる名刀で
あつて、それをお銀様に頼んで幸内が持ち出し、幸内は其の刀の爲に、神尾の惨忍な手にかつ
て一命を落し、その刀はまた神尾の手からがんだりきの百の手にうつり、百は流鏑馬の夕を騒がし
て七兵衛と共に何處にもなく逃げ去つたそれでありました。

あの後、二人は、此の名刀を、此の神社の天井裏へ今日まで隠して置いたものと思はれる。間も

なく身中煤たらけになつて出て來た七兵衛は小脇には油紙に包んだ細長い箱を抱へてゐまし
た。伯耆の安綱はやつはり無事でこゝにゐたものらしい。

七兵衛が箱を抱えて再び社の前へ出て來ると、思ひがけなく椽にかけて煙草をバクリ／＼や
りながら澄まし返つてゐるものがあります。それが餘人ではないがんだりきの百蔵でしたから、

「がんだりき、來てゐたのかい」

七兵衛も呆れ面です。すはいつこいのは、今に初めぬことだが、斯くまで澄まし返つて脂下がつ
てゐられると癪です。

「兄貴、御苦勞、御苦勞」

七兵衛の出て來たのを見て、銀張の煙管を椽の上へ抛り出して片手を伸ばしたものです。

「巫山戯るない」

七兵衛が吐りつけるさ、がんだりきはニヤリ／＼と笑ひ、

「兄貴も思ひの外人が悪いや、弱い者を苛めつこなし、人の物を横取りは風が悪いね、何もお前
さ、おれの間だから、欲しけりやあさうと云つてお呉んなさい、随分譲つて上げねえ限りも無え
のだ、無言つて持つて行かれると心持が悪い……さうしてまた兄貴はこれを持ち出して一體どう
する氣なんだエ、失禮ながら、この中味の有難さが兄貴には、また譯るめえ」

「百、お前の云ふ通りだ、この中味の有難さは、俺の眼では睨みきれねえが、是非こいつを拜み

てえさいふ人があるんたから、些ちはかり貸して貰ひてえ」

「うむ、さう話が譯りさへすれやあ、外ならぬ兄貴に貸し借しみをするやうな、おれでは無えが、まあもう少し待つてもらひてえさいふの外はじや無え、おれの方にも此の品を一目拜まみてえさいふ人があるんた、それを先口にして、それが済んでから、兄貴の方へ廻すさしようじやねえか」

「そいつは可けねえ、先口さ云へは此方に割があるんた、これ見ねえ、この通り、蜘蛛の巣たらく煤すすだらけになつて、骨を折つて漸く取り出して来たものた、啣くはへ煙管で懷手ふところをしてゐる奴に渡せるものか」

「そりやまた可くねえ、立つてるものは親でも使へさいふことがあるじやねえか、おれたつて何も兄貴をこき使つて啣へ煙管で澄ましてゐようさいふ不了見じやねえが、一足後れたのが此方の不運さ、そんな事を云はずに貸して貰ひてえ」

「一足後れたのが手前の不運だから諦めるがい、や、今日の處は兄貴に譲らなくちやならねえ」

「處が、さう行かねえのた、約束を定めて来たんたから、持つて歸らねえと、が、んりいきの面おもてが立たねえさいふものた、さうか弱い弟を憐あはんでお呉んなさいまし」

「さう云はれるさ此方こちも同じことだ、これを持つて歸らねえと七兵衛の估券こけんが下がる、まあまあ兄貴に譲れ」

「さうなるさ兄貴、おれも意地いぢだから、腕にかけても……さ云ひてえが、兄貴は兩腕揃つてゐる

が、おれは悲しいことに一本足りねえ、さうかさ云つて、見すく兄貴に譲つて引くのも業腹わざわだから、こゝで巧く、馴れ合つちまはうじやねえか、さ云ふのは兄貴のを見せてえさいふ人も、おれが見せてやりてえさ云つた人も、大よそ筋はわかつてゐるんた、その人達は何も一本の刀を望のぞじやあねえ、大反おほれた謀叛氣のある先生方せんせいなから、長くその手先になつて働いて見た處が、馬鹿々々しい位のもんだ、だから、兄貴、こゝいらで見切をつけて、二人が馴れ合つて、こいつを坊主持ぼくしさいふことにして江戸へのしてしまはうじやねえか、江戸へ持つて行つて、こいつを旨く賣り飛ばしやあ、五百や千兩の小遣には有りつける代物た、あんな人達ひとに附いて謀叛の加勢をするよりは、此の方が、よつぼ割たぜ」

南條五十嵐等の志士は、甲府城を乗取つて大事を起さんとし、山崎讓はまた彼等の陰謀の裏を掻いて、根を覆おほへさうとしてゐる間に、各、その一方の手引をして来た七兵衛、がんりいきの兩盜りゅうたうは、その方は抛り出して伯耆の安綱を持つて、これから江戸へ飛び出さうさいふ妥協が成立してしまひました。

二人は、この名刀を坊主持にして例の甲州街道を、都合よく繕つて通ります。二人の足を以てすれば、ほさんさ瞬く間に江戸へ飛んでしまふのたが、その途中さう道を枉かげたものか、その翌朝、二人の姿を高尾山の峰の上で發見する様になりました。

二人は高尾山上の薬王院へ參詣しようさいふのでもなく、山頂に鎮座する此の山の守護神、飯綱

權現の社前へ一氣に上つて來ると、社の前に例の箱入の名刀を供へて、二人共跪まつて拍手を打ち恭しく敬禮しました。

「南無飯綱大權現」

七兵衛が斯う云つて拜禮する。

「南無甚内殿、永護靈神様」

さ、が、ん、り、き、が、續、け、ま、す。次、に、が、ん、り、き、が、

「南無飯綱大權現」

と云つて跪づく。七兵衛が、

「南無甚内殿、永護靈神様」

と云つてハタ／＼と手を拍ちます。斯うして二人が、立つたり跪まづいたりして、祈念を凝す言葉

を聞いてゐると、一方が飯綱大權現といふ時は、一方が南無甚内殿といひ、一方が南無甚内殿

と云はない時は一方が飯綱大權現といふのであります。

この二人の奴等が、殊勝な面をして、神様に拜禮することですら可なり奇怪なものであるけれど、

一體、飯綱權現は、さうかするこんな連中の信者を持ち易い神様であります。飯綱の本尊は

陀祇尼天といふことであるが、その修驗者は稻荷とも關係があつて、よく狐を遣つて法術を行

ふといふことあります。飯綱の法術は人を惑はすものであるといふ處から、變幻出沒を巧にしよ

うといふ輩は、この權現の特別な加護を蒙りたいものらしい。七兵衛と、が、ん、り、き、と、が、途、中、の

氣紛れにしろ、斯うして飯綱權現へ願をかけて見ようとする筋合は讀めないことでもないが、ち

よつと、わからないのはそれに續く、南無甚内殿、永護靈神様といふ神様の名前であります。甚

内殿といふ神様は、何處にあるのか、また飯綱權現の一名を永護靈神とは呼ばない筈です。

二人は、殊勝な面をして、飯綱權現に祈禱を凝らして置いて、神前に備へた安綱の名刀を、先づ

七兵衛が取り上げて押し戴いてから、

「さうたい、こんな名刀を甚内様に持たしたら、随分人を斬るたらうなあ」

と云ひました。

「うーん、こりや人斬庖丁にや勿體ねえんだ、伯耆の安綱なんて刀は神様に備へる刀で人を斬る

刀じやねえさよ、滅多に人を斬るには村正がいゝね、村正て奴は何さなく凄味があつていいね」

が、ん、り、き、が、斯、う、い、ふ、返、事、を、し、ま、し、た。

こんな事を云つて二人は山頂の飯綱權現の社から下りて來ました。見受ける處、二人が、わ、ざ、／＼

道を枉けたのは、單に斯うして飯綱權現の前へ安綱を見せびらかしに來たゞけであるやうです。

二人が例の刀箱を持つて高尾山を下りながら、が、ん、り、き、の、百、藏、が、七、兵、衛、に、向、つ、て、一、つ、の、動、議、を

提出致しました。

「さうたい、兄貴、斯うして坊主持も根つかから新しく無え、これから江戸へ着くまで二人で跪つ

くらべをやらうじやねえか、お互に出し抜いて、せしめた方が、此の刀を物にするさいふ事にしようじやねえか、賣り飛ばして山分けにするよりは其の方が柄に合つて面白からうぜ、若し、さつちの手にも落ちなかつた時には、こりや寧ろその事、鳥越の甚内様へ持つて行つて、さつぱりさ納めてしまふじやねえか、さの道、伯耆の安綱なんて刀は、誰が持つたつて持ち切れる刀じやねえ、持ちきれたにした處で、差料になる品じやねへんだ、二人で腕ためしをやつた上に、甚内様へ持つて行つて綺麗に納めるさ甚内様の供養にもなるし、こち等々の罪滅ぼしにもならうさいふものだ、さうしたもんだ、兄貴」

「そいつは面白からう、手前を相手に腕くらべも大人げねえ話だが、甚内様へ奉納さいふのは、いゝ處へ氣がついた」

そこで七兵衛も納得したらしい。高尾山から江戸までは、この連中に取つては、ほんの一足であるが、その一足の間に、伯耆の安綱の刀を的にして二人が腕くらべをやつて見ようさいふやうな、いたづらは、今に初まつた事ではないが、さいせんから二人の口の上る甚内様さいふのは何物か、それは今までに見えなかつた人の名であるに拘はらず、此の碌でもない二人共が、甚内様なるものには相當の敬意を拂つてゐることがわかります。山の上では、甚内様、永護靈神様さいひ、ここでは鳥越の甚内様さ云ひました。若し、二人のうちの何れにも此の伯耆の安綱の刀が落ちな

つた場合には、それを鳥越の甚内様へ持つて行つて納めるさいふことには二人共異議がないのであります。よつて此處に、鳥越の甚内様なるもの、いはれを一通り説明しなければならぬ。

八

淺草の鳥越橋の西南に御書院番の小出兵庫(二千百石)さいふ旗本の屋敷の中に、二人が今いふ甚内様の社があるのです。

神に祀られるほどの甚内様さは何人ぞ、それは英雄にもあらず、また義人にもあらず、一箇の盜賊に過ぎないのであります。姓を高坂さいつて名は甚内、父は甲陽の軍師、高坂彈正であるさいふことです。

「天晴手練の此の槍先、受けてはたまらぬ大切な幼な兒……」

さいふ廿四孝の舞臺面は、可なりに高坂彈正の器量を上げるやうに書いてあります。その初め容貌を以て信立に愛せられた處を以て見れば、また非常な美男子であつて、その後「保科彈正槍彈正、高坂彈正逃彈正」を以て取て争はなかつた處は、沈勇にして謀を好む人傑の面影を見ることも出来ず。武田信立の股肱として一二を争ふ智將であつたことは疑ふべくもない。

其高坂彈正に一人の遺子がありました。幼名を甚太郎さいひ、後に甚内さ改めた其の人が即ち鳥越の永護神として、半は實在の人となり、半は荒誕の人となり、奇怪な盜賊として祀らるるに至

りました。
父が歿して此の遺子は祖父の高坂對馬に伴はれ、没落の甲州を後にして攝州芥川に隠れて閑居してゐる處へ、祖父の知人であつた宮本武藏が訪ねて来て、夜もすがら語り明した時に、祖父の對馬が甚内を武藏に預けました。その甚内は、また甚太郎といつて年僅に十一歳であつたといふ事です。

十一歳にして宮本武藏に預けられた甚内は、その時から武藏に従つて江戸に下り、武藏が神田お玉ヶ池の近傍に道場を開いた時（武藏がお玉ヶ池へ道場を開いた事があるかどうか考へないで傳説をそのまゝ借用する）そこで武藏から眞免流の免許皆傳を受けました。それは甚内が廿一歳の時のことであるといふことです。

その時分、甚内は人の活脚を試みたく、竊に柳原の十手へ出て往來の人を一刀に斬り倒してゐたが、或時、飛脚を斬つて金を奪つてから遂に辻斬が盜賊にまで進んだ。それより悪行が面白くなり、辻斬をしては金を奪ひ、その金で鎌倉河岸の風呂屋女に耽溺してゐたがその悪事が師なる宮本武藏の耳に入つて破門された。そこで諸國の遍歴を志ざし、その門出に參詣したのが此の高尾山の飯綱權現の社であつた。この社の前で、名を甚内と改めて、生涯のある目的を祈願した。それから相州の平塚在に暫らく足を留めて、其處で盜賊の首領となつた。その後箱根山へ隠れて強盜の張本となつた。高坂甚内は、宮本武藏に就て劍道の奥儀を究めた上に強勇にして力量があ

る。殊に水練に達して久しく水底に沈み、水の中を行くこと魚の如くであつたこと云はれてゐる。加ふるに身體は不死身であつて、一切の刀劍の刃が立たないといふことでありました。

その頃「日本三甚内」と諺はれた三人の甚内があつた。三人共に同名で、さうして同じく兇惡なる盜賊であつた。右に云ふ高坂甚内を、その隨一とし、もう一人は、庄司甚内——である。これは吉原を初めて開いた人であるが、前身はやつぱり盜賊で、劍槍に一流を究め、忍術に妙を得て、その上力量三十人に敵し、日に四十里を歩み、晝夜眠らずして倦むことなく、それに奇妙なのは盜賊ながら日本を週國して、孝子孝女を探り、堂官の廢れたのを起して歩いたといふ處が變つてゐる。それさもう一人は、飛澤甚内——これも同じく劍術柔術早業に一流を極め、幅十間の荒澤を飛び越えること鳥獸よりも身輕であつた處から自ら飛澤と名乗つた。これが捉まつた時に、大久保彦左衛門の命乞ひによつて死罪を許され、身持を改め、苗子を富澤と替へ、横目の御用を蒙り、古着屋商賣をして無事に天命を終へた。その住宅附近が後に富澤町となつた。

斯くて高坂甚内は箱根山に籠つて悪事を働いてゐたが、詮議が嚴しく、箱根山の住居もなり難く、そこを立ち退いて諸國を徘徊してゐたが、やがて再び江戸に舞ひ戻ると赤坂に住居を構へ、例によつて辻斬、強盜の外には、表面は劍術を人に教へ、内實は無賴の徒を集めて博奕を業としてゐた。悪行いよく募つてその頃牛込御門内に住居してゐたが先手役青山主膳（千五百石）の組與

力同心が召捕に向つた處同心二人まで深傷を負ひ、與力も辛き目に遭つて這々の體で逃げ返つた。それを聞いて齒齧をした主膳は自ら召捕に向はんさしたけれども、叛逆謀叛人でない限りは奉行自身に召捕に向ふさいふ例はなく、さりさて、無敵の悪人であるから、ウカミ手を下し味方を損するの愚であるさ召捕の方法を思案してゐるうちに、甚内が瘡を患ひ出したさいふことを聞き込んで、押入つて遂にこれを捕縛することが出来た。それで牢の中へ入れて、病氣が癒つた後に改めてお伺ひの上、淺草元鳥越橋際に於て死罪に行うことになつた。處が、生來の不死身であつた處から容易に刀劍が身に立たない。よつて甚内が日頃所持してゐた槍を取寄せて礫にかけてしまつた。——その後引廻しの者の先へ拔身の槍を二本立てる。其一筋の槍は高坂甚内を礫にかけた槍であるさ云ひ傳へられてゐる。斯うして高坂甚内なる無類の兇賊は一生を終つたけれど、その兇賊が神に祀らるゝに至つた理由は外にあるのです。

右の高坂甚内は、寛永の中頃から正保年間までの間の人で、その時分の南の仕置場は本材木町五丁目であり、北の仕置場は元鳥越橋の際にあつたさいふことです。甚内が鳥越橋でお處刑になる最後の時の言葉に、瘡さへ患はなければ、召捕られるやうなことは無かつたのだ、我死すとも魂を此の土に留め、永く瘡に悩む人を助けんさ云ひながら、槍に貫かれて死んださいふことで、それから甚内様に病氣平癒を祈り出す者が多くなつた。その願書には男女の別と年齢と、いつ頃より患ひ出したかさいふ事と何卒この病氣癒させ給へさいふ祈願とを認め、上書には高坂様或は

甚内様と記して奉る。病氣は瘡に限つた事はなく、他の病氣でも瘡を書いて願ひさへすれば治る。願が滿ちて病氣が癒つた時は鳥越橋から魚の干物と酒を河の中へ投げ込んでお禮参りをする。縁日は毎月の十二日で、例祭は八月十二日、甚内が處刑せられた日さいふことになつてゐる。

二人のいふ、甚内様、永護様さいふ變態な神様の縁起は、大よそ斯う云つたやうなもので、二人は例の伯耆の安綱を坊主持にして高尾の山の飯綱の社から、淺草鳥越まで行く間に、その名刀の處分を定めようとするのであります。

けれども、これは東海道の道筋などは違つて、何を云うにも十里内外の道中ですから、二人の足では横町を走る位のものだから、出し抜かうにも、出し抜くまいにも、飽氣ないもので江戸の市中へ入つてしまひました。

江戸の市中へ入つて、間もなく二人の姿は昇平橋の袂へ現れました。いつぞや貧窮組が起つた時に、貧民が群集して、お粥を煮て食べた處に今日も人集りがあります。その人集りの真中に大きな萬燈があつて、その下で口上云ひが拍子木を叩きながら頻りに口上を云つてゐます。

安房の國

清澄の茂太郎は

幼い時に

父母に死に別れ……

口上云ひが、甘いやうな、憐れつばいやうな一種異様な節で、歌さもつかず、口上さもつかぬ事を云つてゐました。

が、んりきの百藏は、それを聞きながら、ふと萬燈の表を見るさ筆太に、

清澄の茂太郎

さ書いてある、右の方へ持つて行つて、

兩國橋女輕業大一座

さあつたから、ちよつと妙な氣持になつてゐるさ、七兵衛が、

「百、ありや、お前の女房がやつてるらしいぜ」

「さうだなあ」

が、んりきも、何だか、ムズ搔ゆいやうな面附で、萬燈をながめてゐるさ七兵衛が、

「甚内様は、後廻しにして兩國へ行つて見ようか」

「さうよなあ」

「久しぶりで會つてやりたからう」

「さういふ譯でも無えのだが、あいつが斯うやつて、俺の方に渡りをつけずに、花々しいことを

やり出したさすると、些さばかり腑に落ちねえことがあるんだ」

「たつて、札附の無宿者のあさを追蒐けて、一々相談をするさいふわけにも行かなからうじやね

えか」
「そりやあさうだが、あいつの器量で、これだけの事をやり出したさすると、後立があるに違へねえ、あいつに相當の金を出してやらうさいふ後立は、まんざら色氣の無え奴とも思はれねえんだ、さうたさすりや、さういふ心持で、あいつが其の御厚意を受けたかその邊が些さ聞きものだ」
「こいつは些さはかり嫉ける」
が、んりきがムズ搔ゆい面をしてゐるさ七兵衛があざ笑ひました。

九

その晩の事でありました。兩國橋の女輕業もハネて、樂屋の真中に大柄なごてらを引つかけて立膝をしながら、長い煙管で煙草を輪に吹いてゐるのは一座の棟梁のお角であります。

「わたしは、これから柳橋まで行つて来るから、あの子が歸つたら何處へも出さないでお呉れ、お迎へがあつても何さか云つて斷つてお呉れ」

誰にさもなく、こんな事を云ひつけたが、それでもまた落着いて煙草をのんでゐて、立たうさもしません。

傍に茂太郎が居ない處を見ると、こゝにあの子さ云つたのは、その茂太郎の事でありませう。茂太郎が今宵も然るべき客筋から招かれたから、出してやつたあさで、お角は、斯うしてひそりで、

物案じをしてゐるらしい。

「さうも、今日のお客は變だよ、後から行つて見ようとは思つたけれど、それもかしいから、あゝはしてやつたもの、何さなく氣が揉めるのは如何したんたらう、行つて見ようかしら、それも、あんまり腹を見られるやうだし、さうかさ云つて、相手が、さうも尋常のお客ではないらしいから、抛つて置いて、若しや間違ひが……間違ひと云つた處で、相手が、やつはり女のお客だから、取つて食はうさいふわけでも無からうけれど、何だか、わたしや、今日に限つて、あの子を人に取りられてしまふやうな氣がしてならない、柳橋の殿様へもお伺ひしなければならぬが、それよりもあの子の方が氣にかゝる、と云つて、あの子が歸つてからお伺ひしたんじや殿様に恐れ多いし、忌になつちまふね、稻ちゃん、稻ちゃん、そこにおゐでなら、ちよつと来てお呉れ」

「はい」

幕帳で仕切つた樂屋の後から、可なり美人の部に屬する女輕業の娘が面を出す。

「あのね、茂太郎を呼んで下すつたさいふ今日のお客様は、さんな人たつたか、お前知つてるでせうね」

「あの、棧敷におゐでなさる時に、ちらりとお見かけ申しましたが切髪であらうしやるけれども、なか／＼品の宜い、美しいお方でございました」

「お前御苦労だが、若い衆をつれて、ちよつと迎へに行つて来て呉れないか、わたしは、これから、外へ出かけるんだが、あの子が歸つてゐないさ心配になるんだから、お客様の御機嫌を損ねないやうにお話をして、早く歸して戴くやうにね」

「畏まりました」

「近い處だけれど、この頃は物騒だから氣をつけてね」

お角は、わざ／＼茂太郎を迎へにやつて置いても、また何か心配が残つてゐるらしく、柳橋へ行かう／＼と云ひ／＼、また煙草を吹かしながら、

「何だか、その切髪のお部屋様らしいお方さいふが氣にかゝる、と云ひました」

茂太郎が、多くの婦人客から可愛がられて、その席へ呼ばれるのは今に始まつたことではないのに、今日のお客に限つて、お角が留守の間に、樂屋のものをうまく籠絡して、茂太郎を拉して行つたもの、やうに思はれてならない。何か特別に、茂太郎に野心があつて、物ずきな若い御隠居の美人が誘惑を試みたやうに思はれてならない。いつもならば、そんなに心配になることでは無いのに、前後の事情を聞いて見れば、をかしい事が多い。お角はその事を、いろ／＼に思案してゐるが、やがて、荒つぽく火鉢の縁を叩いて煙管を投げ出し、どてらを脱いで帯を締め直しました。漸く、その柳橋の殿様とやらへ伺候する氣になつたものと見える。

お角が輕業小屋を出た時分に雨が降り出してゐました。下足番が蛇の目の傘を差しかけて送つて行かうといふのを、お角は斷つて傘だけを受取つて外へ出ました。

お角がこれから訪ねようとするのは、柳橋の船宿にゐる駒井甚三郎の許であります。ついこの間、その界限で辻斬沙汰があつた處だけれど、また宵の口ではあるし、兩國から柳橋まで、ほんの一足の處ですから、お伴をつれなくつても心配ではありません。

お角は派手な着物を着て、それに薄化粧さへしてゐるやうです。斯うしてお角が柳橋に駒井を訪ねるのは今に初まつた事ではありません。三日に上げず宵のうちに駒井を訪ねて、でも、そんなに長話はしないで歸ります。駒井も亦お角の訪ねて來ることを好まないではないらしい。たゞ何の爲に、斯うして、しげくお角が駒井を訪ねて來るのたか、また駒井ほどの人が何用あつて、屢々、お角のやうな女を近づけるのたか、その邊が、さうも暗に落ちないやうです。そこで、もとは駒井の先代の家に仲間奉公をしてゐたさいふ此の船宿の亭主と、おかみさんとは、その噂をして、お角が來る度に小首を捻つてゐるのであります。

駒井の殿様ほどの人が、あんな女を相手になさう筈はないと思ふけれども、そこは、あたりまへに考へてしまふわけには行かない。あれほどの殿様が、甲州をしげく、じつとお出でになつたのも女の爲であつた。その相手の女といふのは、女もあらうに身分違ひの女であつたさいふ、こ、わ

づかに、その賤しい女一人の爲に、あれほどの地位を棒に振つて、半生涯を埋めてしまふやうな破目に陥つておしまひになつたのが情ない。

お家柄なら、御器量なら、男振なら、學問武藝なら、何として一つ不足のないあの殿様は、その上に世にも美しい奥方をお持ちでありながら、その奥方はお美しい上に、やんごとなき公卿様の姫君であらせられるさいふお話であるのに、それが、好んで身分違ひの女をお愛しなさるさいふこそこそ戀は思案の外である。えらいお方ほど女にかけては脆いものか知らん。それこそ駒井の殿様は、あんなお優しい御容子をしながら、やつぱりいかもの食ひであらつしやるのかも知れない。さうして世の常の女では食ひ足りないで好んでお角のやうな女をお求めになるのかも知れない。さいふやうなこまで船宿の夫婦は想像して見ましたけれど、まさか、さういふ御關係でございませぬ聞いて見るわけにも行かず、其のまゝにして居りました。

お角は、また、ごんな心持で駒井甚三郎を、しげく訪ねるのか知らん。そのしげく訪ねるうちにも、お角としては念の入り過ぎたほごに、おめかしをして、乳の下あたりの動悸を押へながら、そわ／＼として通ふ素振が、よつばさをかしいものです。さりごと此の女が駒井甚三郎に戀をしかける女ではない、また男振りに、ぼ／＼と打ち込むさいふやうな女でもない。だから、しげく駒井の處へ通ふにしても、露骨に云つてしまへば駒井の懐を當て込んで、その信用を取り外すまいと心がけてゐるのでありませう。

駒井甚三郎は落魄したけれども、また大事を爲すの準備として相當の資金が何れにか蓄へてある筈である。事に依ると、お角が兩國橋へ旗揚の資本も駒井が所持金の一部を割いて貸與へたのかも知れない。たゞ、轉んでも只は起きないお角が、駒井甚三郎の男振に打ち込んで、これに入れ上りけようとして通ふものではなく、却て駒井を利用するの意味で御機嫌を伺つてゐるのだといふことだけは、ドチラにもよくわかつてゐる筈です。

お角は蛇の目を、して柳橋の袂へかかりました。

お角が柳橋の袂まで来ると、頬冠りをして襟のかゝつた絆纏を着た遊び人體の男が、横合から、ひよいと出て来て、いきなり、お角の差してゐる傘の中へ飛び込んだから、お角も驚きました。

「何をするの」

「お角、久しぶりだな」

それは立治店の奥三郎もごきの文句でありました。その文句でお角が気がついて、

「おや、百さんじゃないか」

「うむ、百だよ」

と云ひました。この頬冠りこそ、がんだりきの百蔵です。

「何だつて、お前、こんな處にゐたの、兩國へ訪ねて来ればいゝじゃないか」

「兩國へ訪ねて行つたんじゃないや、バツの悪いところがあるから、こゝに待ち合せてゐたんだ」

「雨の降るのに傘も差さないで」

「柳の下に、お前の来るのを、ぼんやりと待つてゐたんだ」

「わたしは、これから、ちよつと其處まで用足しに行つて来るからお前さん、小屋へ行くのが忌なら、そこいらで一杯やりながら待つてゐてお呉れ」

「そいつも思た、お前の行く處へ一緒に行きてえんだ、さうで無くつてお前、雨の降るのに斯うして柳の下に立つてゐられるものかな」

「たつて、わたしは、お前さんと一緒じゃ行かれない處へ行くんだから」

「だから、折入つてお伴が願ひたいんだ、亭主と一緒にには行けねえ處へ相合傘で乗り込まうといふ寸法が面白いやねえか」

「お前さん、何かいやに氣を廻してゐるね、わたしの、これから行かうとするのは、そんな譯じやありませんよ、後ろ暗いことなんぞは有りやしませんよ」

「誰もお前に後ろ暗い事が有つたとは云はねえ、だから一緒に出かけて、先方のお方にもお目にかゝつて、お前が色々お世話になるんなら、お世話になるやうに、俺の方からお禮を申上げて置きてえのだ」

「牛僧、それがお前さんとは、些さばかり話の合はない人だんだから、お目にかゝつたつて仕方がないよ」

「話が合うか合はないか、話して見なけりや判らねえや」

「たつて、先方は殿様なもの」

「おや、殿様たつて、何處のさうした殿様だか知らねえが、お前が特別の御最前にあつかつてゐる殿様へ、おいらがお禮を申上げて悪からう道理は無からうじやねえか」

「それにしたつてお前、あの殿様とお前さんは、あんまり桁が違ひ過ぎるからね」

「成程、このがんりきと、何さやらの殿様とは、あんまり桁が違ひ過ぎるけれど、女輕業の親方と駒井能登守とは、あんまり桁が違はねえのかい」

「まあ、お前さん、それを知つてゐるの、駒井の殿様を御存知なの」

「馬鹿にするない、甲州勤番支配の時分から先刻御承知の殿様だ、鐵砲が大層お上手たさうだけれど、女にかけては、根つから二本棒の殿様だ、身分違ひのロクでもねえ女に引か、つて、あつたら家柄を棒に振つてしまつた殿様なんだ、何處をさうしたか、それを此の頃お前が引かけて物にしてゐるさいふことが、いつまで、がんりきの耳へ入らずにゐると思つてゐるのだ、そりや瘦ても枯れても、もさは三千石の駒井能登守、お前の腕で絞つたら、また随分絞り甲斐もあるたらうが、そんな氣のいゝ殿様を、お前のやうないかもの二度三度絞らせて置いちゃ、見ても聞いてもゐられねえ、お目にか、つて御意見を申上げやうと思つてゐるのだ」

「がんりきは斯う云つて歩き出したから、お角も仕方が無しに傘をさしかけて二人は相合傘の形で

柳橋を渡りました。

「がんりきから斯う云つてせがまれると、お角も困じ果て、しまひます。

無論、いゝ加減のお座なりで胡麻化したせる相手ではなし、さうかき云つて駒井甚三郎に引き合せようなどは以ての外です。會はせないさ云へは、こたわりをつけるに相違ない。お角も、この男にだけは尻尾を押へられてゐるさ見えて、仕様こそなしに相合傘で歩き出しては見たものゝ、橋を渡りきつてしまへは甚三郎の宿は近いのですから、先へ進む氣になれません。

「行つても仕方が無いから歸りませうよ、小屋へ歸つて、ゆつくり話をしようじやありませんか」斯う云つて覗いて見たけれども、無論おいそれと應ずる男ではありません。

そこで二人は橋の欄干に添うて押問答をして居りました。

この時、他の一方の橋の袂から、また一組の相合傘が現れました。その相合傘は、こちらの相合傘とは大分趣を異にしてゐます。こちらは蛇の目であるのに、あちらのは買ひ立ての番傘でありました。一本の傘の下に二人の人が、雨を凌いでやつて来るのは同じこと、またその二人が一方が男であり、一方が女であることも同じだが、あちらのは、女の人がお高祖頭巾で覆面をしてゐるのに、男の方は素面です。お高祖頭巾の女の面付はわからないけれども、素面である男の方は一目見てもそれとわかる宇治山田の米友に紛れもありません。

米友はあの通り脊が低いのに、お高祖頭巾の女は、人並より心持ち高い位ですから、この相合傘

はあまり釣合が取れません。第一宇治山田の米友といふのが相合傘の柄ではありません。お高祖頭巾の女がその番傘をかざして、米友は氣の毒さうに例の杖をついて其の傘の下に歩いて來ましたが、柳橋を渡りかゝるに、怪訝な目をして橋の上をながめます。それから神田川の水の流れを何か思案ありけにながめて渡ります。

「ね、あの晩、この橋の上に立つてゐた人は、わたしは慥に見たことのある人のやうに思ひました」

お高祖頭巾が米友に向つて斯う云ひました。このお高祖頭巾の女といふのが、藤原のお銀様であることは申すまでもありません。お銀様がさう云つたから米友は領いて、

「さう云はれるに、おいらも何たか見た事のある人のやうな心持がするんだ」

米友も、以前、舟を漕いで來たあたりを見下して返事をしました。此の不釣合な相合傘が橋の半へ進んで來た時に、

「御免なさい」

橋の欄干に立ちもよつて押問答してゐた一方の相合傘と摺れ違ひになつて、傘と傘とが軋り合ひましたから、どちらでも御免なさいと云ひました。

御免なさいと云ひながら、傘を傾けてお互に面を見合すに、

「おや、お前は米友じゃない、友さんじゃないか」

さ云つたのはお角の聲であります。さう云はれて米友はギョツとしました。前にも云ふ通り、この女輕業の親方お角だけが宇治山田の米友に取つては唯一の苦手であります。可なり大膽不敵の米友もお角に一言云はれると身がすくむやうになるのは前世の宿縁といふものか知らん。

「あッ」

さ云つて、さすがの米友が舌を捲いて面の色を變へて立ち留まりました。

「まあ、久しぶりじゃないか、米友さん、お前は此の頃何處にゐるの」

舌を捲いてゐる米友をお角が発見したのは、恐らく甲斐國石和の袖切坂以來の事でありませう。

あの時にお角は、米友を発見して、轉んではならない袖切坂の途中で轉びました。

その時にお角は鼻緒の切れた下駄を敷の中へ抛り込んで、さも口惜しさうに、

「友さん、わたしが此處で轉んだことを誰にも言つちや可けないよ」

さ念を押しました。その時に米友は、

「うむ」

さ固く承知すると、お角は尙ほ、

「言ふと承知しないよ」

さ馬鹿念を押しました。そこで米友は再び、

「うむ」

さ力を入れて返事をすると、お角は、

「けれども、お前はキット云ふよ、お前の口から此の事が露れるに定まつてゐるよ、若しさういふ事があつた時は、わたしはお前を只は置かない……只は置かないと云つても、わたしよりお前の方が強いんだから、して見ると、わたしは何時かお前の手にかつて殺される時があるんだらう、さうもさう思はれてならない」

その意味がわからないから米友は、

「何、何を云つてるんだ」

と眼を圓くすると、

「轉んだ處を見た人を見られた人が、若し間違つても男と女であつた時は、さつちか其片一方が片一方の命をさるんですさ」

お角がこんな事を云つて自暴のやうな氣味であつた事を米友は、もう忘れてしまつてゐるに相違ない。併し、お角の方では、多分それを思ひ出してゐるに相違ない。

こゝで、めぐり合つた米友ををかしいと思ふと共に、それと相合傘をしてみたお高祖頭巾の女の人をお角は不審に思はないわけには行きません。處が、お高祖頭巾の女の方では、さいぜんから、ちやんと心得たもので、頭巾の中からお角の面を見据ゑるやうにしてゐましたので、お角も何か氣味が悪く思ひました。

「おや、あなたは……」

今度はたしかにお角の方がギョツとしました。お角に呼び留められた米友は、てんで氣を吞まれてしまつたが、この覆面の女に見据ゑられたお角は、物の怪につかれたやうに立ち竦んだのは稀に見る光景であります。

米友に取つてはお角が苦手であるやうに、お角に取つてはお銀様が苦手であります。米友は、お角から言葉をかけられても頼には返事が出来ません。お角は、お銀様に正面から見据ゑられて、しごるもごるであります。

この三スクミの體を傍から見ても、あんまりきの百蔵は委細を知らないから、何とも口出しがなからず、川の流れを横目に見てゐました。

「お角さん、お前さんは何處へ行くの」

と云つたのはお銀様であります。

「はい、其處まで、ちよつと用足しに」

お角としては怪しいほど神妙に返事をしました。

「お連がお有りなさるの」

「いゝえ……」

と云つたけれども、それは甚たまづい云ひ抜けに過ぎません。

「若し、御用がないのなら済みませんが、其處まで、わたしと一緒に来て下さいませんか」
お銀様から斯う云はれたのが、この場合お角に取つては勿怪の幸であつたらしく、

「はい、お件を致しませう」
と云つてしまひました。それで納まらないが、りきの百蔵が向き直るさお角は、それにカブせるやうに、

「百蔵さん、このお方は、もさ、わたしのお世話になつた御主人のお嬢様ですから、わたしはちよつと御一緒に行つて参ります、それで今晚はあそこへ行くのはやめませう、直に歸りますから兩國へ行つて待つてゐて下さい、友さん、お前も兩國へお出で」

そこで相合傘がまた二つに別れました。

お角の差して来た蛇の目の傘には、お銀様が入り、お銀様の差してゐた番傘を米友に渡すと、米友は、それを受取つて不承々に、が、りきの上へ差しかけます。

蛇の目の傘は兩女を容れたまゝ、元来た方へ動き出したから、斯うなつて見るさ、が、りきも其れを追宛けて袂を引くのも見つともないさあきらめたのか、無言つて見送つてゐるだけでした。

「や、こりや、さうも兄さん有難う」

漸くの事で、番傘を差しかけて呉れてゐる米友の好意に氣がついて見ると、が、りきも動き出さなければなりません。動き出した處で今度は蛇の目の傘ではなく、番傘で、さうして相合傘の主

も、得體の知れぬ河童のやうな男だから、多少、うんざりしないわけには行かない。併し乍ら、が、りきは流石に如才ない處があるから、金助のやうに見てくれただけで、頭ごなしに米友を侮辱するやうな事はありません。

「兄さん、お前さんは、何方へお出でなさるんだね、わたしや、そこいらで、ちよつと一杯やりたいんだが、何なら付き合つてお呉んなさいな」

と優しく米友を誘ひました。

「おいらは、さうしてもゐられねえんだ、一杯やるんならお前一人でやんねえ、傘はお前に貸してやらあ」

斯う云つて米友に番傘を差しつけられたから、さすがが、りきも苦笑ひをしないわけには行きません。折角の相合傘の相手が振り變へられた上に、その振替へられた相手から劔ねられる始末だから、いやはや、色男も臺なしといふ體でありました。さうして詮方なく苦笑ひをしながら、

「それでも、兄さん、わたしが傘を借りてしまつたらお前さんは濡れるんだらう」

「おいらなんぞは濡れたつていゝやな、土團子じやあるめえし」

米友が斯う云ひました。米友が土團子じやあるめえしと云つたのは洒落でも警句でもないだけに、をかしい處があります。さちらかと云へば米友は土團子のやうな人間でありますから、が、りきもをかしく思ひながら、

「土團子でねえにしても、お前さんを濡らしちや氣の毒だ、それじゃあ、わたしは其處いらで一杯やることにしますからね、兄さん、御苦労だが、そこまで送つてやつてお呉んなさいな、ナニ、何方でも構はねえんだ、あいつ等が兩國の方へ行つたから同じ方へ行くのも願だ、代地の方へ行きませうよ」

斯う云つてが、いりきが橋の上を歩き出さうとする。

「遠慮をなくつてもいゝやな、傘は貸して上げるから一人で勝手な處へ行きな、おいらは送つて行くのは嫌だよ」

「たつて、兄さん、濡れたつて詰らねえじゃねえか」

「いゝよ、おいらは濡れたつて構はねえんだ、ツブ濡れになつた方が氣持がいゝ位なものだ」

「自暴な事を云ひつこなし」

「自暴なんぞを云やしねえ」

「そんな事を云はずに、大人しく相合傘といふ寸法で行かうじゃねえか、一人で差したる傘なれば、片袖濡れやう筈がないなんぞは乙なもんだが、フラれて自暴でツブ濡れなんぞは氣が利かねえ、兄さん、相合傘をやりませうよ」

が、いりきは強ひて米友を相合傘に捲き込もうとするけれども、米友は頑として聞かない、愚圖愚圖してゐるを傘を抛りつけて行つてしまひさうですから、相合傘の押賣なんぞは氣の利かないこ

こ此の上なしたと、が、いりきも呆れ返つて持て餘してゐる途端に、フイと氣のついた事がありました。した。

「おい、兄さん、ちよつと待つて呉れ」

米友を呼び留めたけれども、米友は矢も楯も堪らなくなつてゐました。開いたなりの傘を其處へ抛り出して、勝手にしやがれといふ態度で、跛足の足を引すつて、雨の中を、さつさと駆出してしまひます。

が、いりきは、いよくテレたもので、苦笑ひが止まらず、是非に及ばない面をして、橋の上でぐるぐる廻つてゐる番傘を片手で取り押へて肩にかけ、米友の走り去つた方面を見送つてゐましたが、やがて、あきらめて、橋を渡つて代地あたりの闇に消えてしまひました。この時分の事、例の船宿の二階で、書き物をしながら、お角の來るのを待つてゐた駒井甚三郎は、約束の時間に至つてもお角の姿が見えないから、なほ暫く待つてゐたけれども、音沙汰がありません。そこで、書き物を始末をして立ち上がる。蝦子の馬乗袴を穿き、筒袖の羅紗の羽織を引かけ、大小を引寄せて壁にかけてあつた大塗笠を取り卸りました。これから何れへか出かけて行くものを見えます。出かける前に、お角に會つて置きたい用件があるのでせう。若しやさ再び机の前に坐り、火鉢の上に手をかざして、更に消息を待つてゐるもの、やうでしたが、お角の姿は見えないし、ここわりの使ひもやつて來ないから、もうあきらめたものを見て、大小を取つて手扱みました。

駒井甚三郎は、近々に房州へ歸らなければならぬ、この程江戸へ上つて来たのは、洲崎の海岸で船を造らんが爲に、その費用と材料と大工を求めんが爲に來たものであることは申すまでもありません。お角も茂太郎も、それと一緒に遣つて來たものの、駒井に取つては、それは偶然の道運に過ぎないが、お角や茂太郎に取つては駒井甚三郎は再生の恩人であります。駒井の役に立つことならは何を置いてもつとめなければならぬし、若し、甚三郎が急に立つものとすれば、やはり何を置いても見送らなければならぬ筈です。

十

机龍之助は、あの晩から再び彌勒寺の長屋へは歸りませんでした。染井の化物屋敷へも姿を見せた形跡はありません。練堀小路の湯屋を出たのは確かに、その人であつたに相違ないけれど、早駕籠の行先はわかりません。

けれど、天にかくれやう筈もなし、地にくぐらう術もないから、日ならず何處かへ姿を現はすには定まつてゐます。姿を現はさないにしても、何れにか志す所の安住の地があればこそ駕籠を備うたものであらう。駕籠屋とても、めくら滅法界に人を載せて走るさういふ筈はありません。その落着く處と、興へらるゝ酒料の胸算用を度外にして、物好きに人を載せて走るさういふことはありません。駕籠屋を突き止めて見さへすれば大概はわかることではありますが、その駕籠屋が藤原

にひさしいもので、いづれの町内から運んで來て、何れへ向つて走つたか、それを尋ねるさ煙の如くになつてしまひます。さりとて今更、甲州でもあるまいし、神尾主膳を使つて行くでもなし、宇治山田の米友に介抱されるでもなし、明るい日では一寸も獨り歩きの出來ない身になつて、その昔のやうに、鈴鹿峠を越えて、上方の動亂の渦に巻き込まれようとする勇氣も無からうし、よし勇氣があつたに似た處が身體が許さないし、今は京都で威勢を逞しうしてゐる彼の新選組の手が江戸へ舞ひ戻つても來るやうなら、そのうちには自から龍之助を護護する者も出て來ようけれど、今の處、そんな當はなし、早駕籠で飛はして何處へ如何落着かうとするのか、その見當は、さうもわかり兼ねます。それでも、お銀様との間に意志の疏通が出來てゐるならば、何處かで謀し合せて二人で身を隠すものとも思はれるが、お銀様は、あれからあゝして、米友を案内にして心當りを探してゐる位だから、こゝ暫らく二人の間の縁の糸が切れてゐるさ見なければなりません。さうして見るさ机龍之助の落ち行く先は、いよく想像がつかなくなりません。

いろ／＼思ひめぐらして見るさ、思ひ當る處が、たつた一つあるにはある。机龍之助には一人の男の子があつた筈で、その名は郁太郎と云つて、それを養つてゐるのが水車番の與八であることは、もう久しいものであります。さう云つて見れば成程、急に里心ついて我が子に逢つて見たくなつたかも知れない。紀伊の國龍神の奥に於ても、その事を見えぬ眼の夢に見て、血の涙をこぼした事がある筈です。甲斐の國關ヶ崎の古屋敷でも、峠を一つ越えて甲斐と武藏の境を抜けさ

へすれば、そこにわが子の面影を見ることを人に語つて涙を呑んだこともある筈です。江戸へ着いて、いづれの時か、それを思ひ起して、歸心矢の如きものあるべきは、情に於ても理に於ても、當に然るべき處であるが、今では、もう義理にも人情にも泣かうさいふ涙は濁れて、たゞく血に濁く咽喉が擴大し、夜なく飽くまで人の血を食ひ飲むの快味に我を忘れ、我を荒ましめてゐるに過ぎなからう。今時分里心に驅られて故郷へ歸つて見たつて其處には何の興味もあるべき筈はない。興味はあるべき筈はないけれどもこの際、何さはなしに歸りたくなつたものご見れば論はないが、肝腎の早駕籠は甲州の裏道の街道、いづれをも飛んで行く形勢は無くて、意外千萬のここにはその夜の大引前になつて、龍之助は杖をついて吉原の大門内を忍びやかに歩いてゐました。

お銀様は吉原の廊のうちを探してゐたけれど、その時分には龍之助はあまり吉原へは立ち入らなかつたやうです。

今日この時分にこゝへ入り込んだ龍之助の姿は、あまり人目にはつきませんでした。茶屋から行かうとするのではなく、以前神尾に連れられて行つた萬字樓をさして行かうでもありません。茶屋と妓樓の軒下を例の通り忍びやかに歩いて、巴屋の前へ來ると立ち止まりました。そこで、彼が巴屋の暖簾を押分けて入つてしまつたとき出て來ないのは不思議です。龍之助の姿が巴屋の暖簾の下で消えるさ、間もなく、

「大隅さん、大隅さん」

と誰やらの呼ぶ聲が聞えました。

「あいよ」

二階の間で返事したのは若い女の聲であります。

「按摩さんが参りましたよ」

「あ、さうですか」

間もなく番新が其處へ連れ込んだのは按摩さんとは云ひ條、決して机龍之助ではありません。廊へ出入するあたり前の按摩を番新があたりまへに引張つて來たのに過ぎません。間もなく連れ込まれた按摩は、中でハタ／＼と肩の療治にかゝりながら、世間話をはじめてゐるのが、よく聞えます。

「萬字樓の白妙さんは、可哀さうな事を致しました、ほんさにお氣の毒でございますよ、まあ、何て運が悪いところでせう」

「萬字樓の白妙さんが、さうかなすつたの」

「花魁はまだあれをお聞きになりませんか、柳原の土手で、あの花魁が殺されてしまひましたよ」

「え、柳原の土手で、あの白妙さんが殺されたつて、そりや嘘でせう」

「いゝえ、嘘なんぞは申しません、あの花魁が御最負の旦那に引かされて、矢の倉の親御さんの

處へお歸りになつたのは、つひ近頃のことでしたが、お禮参りたさいつて柳原の杉の森の稻荷様へ御参詣になつた歸りに、やられてしまひました」

「へえ、随分、怖ろしいことを聞くものですな、まあ、さうして其んな事になつたのでせう」

「この頃は、江戸の市中へ辻斬といふことが流行つて、行き當りパツタリに殺られる人が何人あるか知れません、ほんの近い處ですけれども、一人で夜歩きをなさつたのが、あの方の落度でございますね、その歸りにやられてしまつたのでございます、それでも、人の噂には、あれは辻斬では無からうといふことでございます、辻斬ならばスツバリと抜き打か何かにやるんでせうけれど、あの花魁のは抉つてあるんださうですから、何か遺恨があつて、つまり戀の恨みたらうと云つて専らの評判でございますよ」

「思、思、そんな話は、もうよませう、今時、また戀の恨みで人を殺すやうな男があるのか知ら」

「そりや、ありますともさ、いつになつても、此の道はかりは別でございますからな」

按摩が浮かりこんな事を云つた時に、面がダラリと伸びて口が耳まで裂けたやうでしたから、この部屋にゐる人が、皆んなゾツこしました。

そこへ白い羽二重を首に巻いて十徳を着た坊主頭の可なりの年配な品のよい人が不意に姿を現はし、障子を開ける音もなしに入つて来たから、眼の見えない按摩の外は、新造も禿も一度に狼狽

して、

「御前様、ようこそ」

と云つて手をつきました。無論當の花魁の大隅も按摩をやめさせて居すまゐる直したものです。處が、さうでせう、一度に狼狽して敬意を表した部屋中の人々が、

「おや〜」

と云つて面を見合はせたが、その面は、いづれも土のやうになつてゐました。

「たしかに御前様がお出でになりましたね」

新造が云ふと、

「え、たしかにお出でになりましたよ」

禿が返事をしました。大隅も亦、

「まあ、如何したのでせう」

呆れた上に、齒の根が合はなくなつてゐるやうです。取り残されてゐるのは按摩さんだけで、それは、きよさんとして折角の話の腰も折られ、療治の手をやめさせられて、本たうに手持無沙汰で控へてゐました。

眼の見えるもの三人は、たしかに入つて来た白羽二重を首に巻いて十徳を着た坊主頭を見たので、す。だから、慥に手をついて、めい〜の頭まで下げたのに、下げた頭を上げた時分にはその

客はゐないので。入つて来たのが、いかにも突然であつたのに、消えてしまつたのが、またあまりに突然です。前の話があつて、ソツとして寒がつてゐる處へ、それですから、惣身に水をかけられたやうな思ひです。

前代の大隅に熱くなつて通つてゐた淺草の或る寺院の住職がりました。法體では吉原へ通へないから、大抵は醫者のやうな姿をして通つて居ました。この寺は裕福な寺であつて、この住職は大隅の爲には随分金を使つたものです。大隅は表面上手に持てなしたけれど内々は随分惡辣な金の絞り方をなしたものと見えます。

「大隅さんは、あんな事をして罰が當らないでせうか、坊主を欺す七代崇るといふ事だから、後生が怖ろしい」

と蔭口を云はれることもありました。併し、いよく熱くなつてゐた坊さんは、それでも一向悔ゆる氣色がなく引つゞいて通つて居ました。

今も、心安く、すうつと大隅の部屋へ素通りしたものと思つてゐると、その姿が見えないといふわけです。

「御前様のお面が眞蒼でした」

禿が唇を顫はして云ひました。

「さう云へば肩の處に血が滲んでゐたやうでした」

それつきり、物を云ふ者がありません。

「大隅さん、大隅さん」

や、暫くたつて障子の外から呼ぶ聲で、一同が息を吹き返したやうなものです。

「大隅さん、あなたをお名差のお客様をお通し申しました。御初會かご聞きますと、さうではないと仰有います、お馴染かとおたづね申しても、さうではないと仰有います、お一人で、すつとお通りになりましたから、常のお客様と存じました處が、お目が御不自由のやうでございます、まあ、兎に角、お迎へにお出で下さいまし」

廊下に立つて誰とも知らず女の聲で、斯ういふ者があつたから大隅は立ち上りました。

大隅を名差で来たのは龍之助であります。初會といふことでもなし、馴染といふことでもないから、多分二度目でありませう。して見ればいつの間にか、一度は此の家の此の女と會つたことがあつたのに違ひない。

併し乍ら、ほんの訪ねて来たといふだけで、二人は別れ別れになつてしまひました。大隅は自分の部屋へ来て、氣分が悪いと云つて寢てしまひました。龍之助は疲勞が甚たしいと云つて、他の何れかの部屋で寢てしまひました。

その間には藝妓仲間を揚げて盛んに騒いでゐる客もあります。一つの間、たつた一人で、頻りに義大夫を語つてゐる者もあります。ひそ／＼に内密話をしてゐる者もあります。急がしさうに

手紙を書いてゐる人もありません。

龍之助の寝てゐる處へ廊下を通つた番新が、そつと開けて、屏風の中を覗いて、無事に寝てゐることを確かめて安心して行つてしまひました。不寝番が油を差しに來た時も、ちよつと驚かされたけれどもやつぱり無事に眠つてゐるものだから、安心して行つてしまひました。

寢返りを打つた途端に、右の手の傷がヒリ、さ痛んだ爲に夢が破れた龍之助は、渾心からの深い息をついて痛む傷を押へようともせずに見えない眼を見開きました。さいせん注ぎ足して行つた行燈のあかりが明るくその網膜にうつつて來ました。夜が明けても眼が見えないし、晝になつても眼が見えない。寢ても見えないし、起きても見えない。横になつても縦になつても見えない眼は、やつぱり見えない。

抑今夜斯うして此處へ、女の名を覚えてゐてやつて來たのも裏を返すといふやうな遊蕩氣分に驅られて、やつて來た譯ではあるまい。すべてが闇黒であつて、たゞ人を斬つて見る瞬間だけで全身の血が逆流する。その時丈けが此の男の人生の火花なのだから、戀さやら情さやらいふものは、もう無いものになつてゐる筈です。

美しい女もないし、醜い女もない。戀せられたつて愛せられたつてそれが何れたけも骨身にこたへるものもあるまい。金で買はれる果敢ない一夜の情に堪能して、それで慰められて行くならば何の他愛もあるまい。

この男に取つて最も悲惨なのは、夜中に夢が破れることです。その夜中に夢が破れた時、お銀様があるは辛うじて、その裂け目をお銀様が繕うて呉れました。宇治山田の米友が一緒にゐた時は、その率直な一種の眞實味が彼を慰めて呉れました。それでも堪へ切れない時に一刀を帯びて人を斬りに出かける。

夜半に夢が破れた時には、その破れ目の傷口から有ゆる過去が流れ出すのです。

與八に抱かれて行つた其の子供が、雲に乗つて天上へ舞ひのぼる姿、その雲が火になつて燃え出すのは堪へ難い執念です。

今までの過去といふ過去が残りなく、そこへ並べられる最後に、その中へ現れるのは、いつも我子の郁太郎の面影でありました。我子の面影のみは拂はうとして拂うことが出来ません。消さうさしても消すことが出来ません。まさに親の因果が子に報うべき現世の地獄を眼のあたり見せらるゝ事が苦しくないではない。幾度か、故郷へ歸つて、その見えぬ眼に、わが子を抱いて後死にたいと思ひ立つたけれども、今となつては、もう其んな心持はないらしい。

四隣人定まつた時に、過去の事々人々を思ひ出すことが彼に取つては、ひた／＼四方から鐵壁で押へつけられるやうに苦しい。枕許の水差を引寄せて水をグツと一口呑んだ時に、つい隣の部屋で、思ひがけなく短笛の音が起りました。

一口飲んだ水でさへが火になつて胸の中で燃えるかと思はれる時に、短笛の音は一味の涼風さな

つて胸に透るのです。

この真夜中に隣の部屋で尺八を吹き出したものがあります。龍之助の持つてゐる風流さいへは恐らく、尺八がその唯一のものでありませう。それは父の彈正が好んで吹いたものであります。それを學んで龍之助は幼少の時から、それだけは心得て居りました。伊勢から東海道を下る時に、たしか濱松までは、その一管の尺八に餘音をこめて旅をして来た筈です。濱松へ来て、お絹に逢つてから尺八を捨てました。少しく光明を得てみた眼が、再び無明の闇路に歸つたのも其の時からでありました。

父から尺八を教へられる時に、龍之助は、よく尺八のいはれを聞かされたことでもあります。臨濟と普化禪師との挨拶の如きは、父が好んで人に語りもし、龍之助にも聞かせました。龍之助には、その事が判つたやうな、わからぬやうな心持がしてゐました。父が、よくすべてを禪味に持つて行くことを龍之助は、寧ろ反感を懷いてゐました。普化禪師の物語を聞かされた時も、冷淡に聞き流してしまつたもので、尺八その者の音色には、どうかするさ我を忘れることもあるのが、自分ながら不思議と云へば不思議であります。

氣のせい知らん、この時隣室に吹いてゐる尺八の音色が又なく微妙なものに響きます。吹く人の技の拙からぬ事も、吹かれてゐる尺八その者の稀なる石器であるらしいことも龍之助は聞いて取ることが出来ました。

吹いてゐる曲は、慥に「戀慕」と思はれる。

尺八を吹いてゐるのは金伽羅童子で、歌をうたつてゐるのが制多伽童子です。

二人は双子でありました。もさは然るべきさむらひの子であつたとかいふ事ですが、みなし兒になつて此の家に引取られ、實の名もあるにはあるが、この樓の者は二人を呼ぶに金伽羅、制多伽の名を以てして其の實の名を呼ぶ者がありません。

曾て素人芝居があつた時、この樓の主人が文覺勳進帳の不動明王に扮して、二人がその脇侍の二童子をつさめた處から其名が起つたものであります。

二人は、この家に拾はれて掃きさうぢや庭の草取りや追廻しをつさめてゐました。天性二人は音楽が好きで、樓の人の學ぶのを見まね聞まねに様々の音曲を覚えてゐます。人定まつた後に誰もゐないやうな部屋を選んで、二人は斯うして、笛を吹き、歌をうたふのが何よりの楽しみであります。

「ねえ、金伽羅さん、今度は、すが、きをおやりよ」

さす、めたのは歌をうたつてゐた制多伽であります。

「制多伽さん、このお隣りには人がゐるのよ」

金伽羅童子は尺八を膝に置いて返事をしました。

「え、人がゐるの、お隣に」

「え、病氣なんでせうよ、はじめのうちは大へん苦しがつてゐたんですけれど、そのうちに癒つて寢てしまつたやうですから、それで、わたしは笛を吹き出しました、あんまり吹いたり歌つたりして、折角寢た人を起すさ悪いね」

「さう、でも、病氣が癒つて寢てしまつたのなら、いゝでせう、すがゞきをもう一つおやりよ、わたしは歌はないで、無言つて聞いてゐるから」

「左様ませうか」

やがて、また、しめやかな尺八の音が起りました。

「ウーホフ、ホウエヤ……」

こんどはすがゞきを初めました。淀みもなく三べん吹返したすがゞきは、子供の歌口さと思はれないほかに艶のあるものです。

「旨いね、金伽羅さん」

制多伽は、その短笛の音色に心から感心して賞めるさ、賞められた金伽羅は無邪氣に嬉しがつて、

「あんまり賞めないで頂戴、笛がいゝんたよ、笛のせいで、よく吹けるんたね」

「金伽羅さん、こんどは、おかゞきをおやりよ、ね、おかゞきをやつて下さいな」

「やりませうかね、では、おかゞきをやるから制多伽さん、お前、おうたひなさいな」

「あ、歌ひませう」

隣室の人を驚かす事を怖れて歌はないと云つた誓ひを忘れて、二人はまた興に入つて了りました。

岡崎女郎衆

岡崎女郎衆

岡崎女郎衆はよい女郎衆

二人を知つてゐる者は、それで宜からうけれども、二人を知らない者に取つては、壁を隔て、す

る其の會話は一種異様なものに聞えます。まことの金伽羅童子、制多伽童子が此の場へ天降りして戯れ遊んでゐるのではないかさへ思はれるほかに世間はなれがしてゐます。

思ひがけなく其の幸福を受けたのは机龍之助でありました。次の間で天童の戯れ遊ぶことによつて、此の世からなる地獄の責を免れました。戀慕を聞き、すがゞきを聞き、岡崎女郎衆を聞いてゐるうちに、いつかは知らず恍然として夢さうつの境に抱込まれました。いゝあんはいに、ほさんさ一日を寢通して、その日の黄昏に此の家を出て行きました。駕籠に乗つて歸る途中で、昨夜の金伽羅童子と制多伽童子の事が思ひ出され、あの尺八の音色が忘れられません。

歌の聲の可憐なのが耳許についてゐるやうです。

そこで、駕籠の中から、駕籠昇に向つて注文しました。

やがて、その望みが叶うて、さある道具屋で、駕籠昇が一本の煤色した尺八を求めて呉れました。駕籠の中で龍之助は其の尺八の歌口をしめました。そこで、昨夜の「戀慕」が吹いて見たくなり、金伽羅童子が吹いためりかりを真似ることもなく真似て吹いてゐるご自分ながら、いゝ心持に吹けて堪りません。

三返しまで戀慕を吹いて、夫から獅子師の前歌にかゝりました。それを吹きはじめると、いよく昨夕聞いた金伽羅童子の冴えた笛の音が、そのまゝ、この笛に乗りうつゝたかと思はれるほどです。さうして、あの制多伽童子のそれに合せて、うたつてゐる聲まで、ありくこ、そこにひいて来るやうです。

身をやつす、賤が思ひを、夢ほご様に知らせたや、ゑい、そりや、夢ほご様に知らせたや……自分の吹いてゐる尺八と金伽羅童子の尺八と、制多伽童子の歌さが全く一つであつて二つとも三つとも思はれません。

浅ましや、賤が身は、たゞ一夜で落ちて、名を流す、ゑい、そりや一夜で落ちて名をながす……あまり面白いので、

ヤリ、ヤリ ヒヒ、ヤリエウホフ

と吹いて行くさ、

これとても苦しうござらぬ、若いが二たびあるにこそ、ゑい、そりや、枯木で花が咲くにこそ……

さうして、こんなに面白いのだからわからない。自分で吹いて自分の音色に聞き惚れてゐると、金の鈴を振るやうな制多伽童子の音聲が常住不斷に耳もさで鳴りひびいてゐます。心なき駕籠屋も、心して駕籠を揺れないやうに昇いで行くものらしい。

鎌倉の御所のお庭で、十七小女郎がしやくを取る、ゑい、そりや、十七小女郎がしやくをさる……しやくをさるは宜いけれど、一體、この駕籠はごこまでやるつもりだ。

十一

お角が、あの晩、おそく兩國の小屋へ歸つて来た時分に、また茂太郎が歸つてゐませんでしたから嚇されました。

小屋の者共を叱りつけて、迎へにやつたけれども、そのお客はさうに歸つてしまつたこの事です。お角が、むしやくしやに腹を立てたのは無理がありません。斯うなつては、確にかごわかされたさ見るより外はない。大切の大切の一枚看板を外されては明日からの人氣にさはる。人氣よりも損得よりも出し抜かれた事がお角としては口惜い。殊に相手が女であるこの事、然るべき切髪のまた水々しい女であつたさいふこそが頼にさはつてたまらない。其の女は若黨らしい男をお伴にしてゐて、茂太郎を連れ出して船で柳橋の方へ乗り出したさいふことです。負けない氣性のお角を、それを知つてした事が、知らずにした悪戯か、これはかりは容赦が出来ないさ、お角は齒齧

みをして口惜しがりました。

朝になるに、染井のお屋敷から参りましたさいふ使の者が、

「へえ、御免下さいませ、染井のお屋敷から、こちらの太夫元へお言傳がありましたさいふのは外じやございませぬ、こちらの小屋に出でおゐでなさる茂太郎さんさいふのが、さうしたもので、昨晚迷兒になつて、染井のお屋敷のお絹様を使つてお出でになつたさうでございませぬ、お絹様も、不憫に思召して、昨晚はあれへお泊め申して、よく／＼事情をお聞き申して見まするていよ、兩國の女輕業の一座に出でおゐでなさるさいふ事ですから、こちらの太夫元に、若しお心當りがございませぬら、早速お引取りにお出で下さるやうに、斯ういふ使の趣で、早々さやつて参りました」

それを聞いたお角が夜具を劔のけて、

「いづれ御挨拶を申上げますから、歸つて下さい」

使の者はニヤリと笑つて歸りました。

何といふ馬鹿々々しいことだらう、すつかり彼の女に鼻毛を隠されてしまつた。さうしたら此の仇が打てるだらうと齒きしりをしました。ほんたうにさうです。お角として此れから染井の屋敷へ出かけて、あの子を引取りに参りましたと云つてお絹の前へ手が突けるものか突けないものか、さりさて引取りに行かなければ、向うは、茂太郎を人質に取つて、これ見よがしのおもちやにす

るには定まつてゐる。第一、あの呼物が無くなつては今日からの一座も打てないぢやないか。お絹といふ女は蟲唾の走るほごキザな奴だ。嚙んで吐き出してやりたいほごイヤな奴だ、お角は腹が糞えくり返つて堪りませぬ。ブン／＼して弟子達に當り散らしてゐる處へ、

「お早う、親方はおゐでか」

と云つて、やつて来たのが七兵衛であります。

此處へ七兵衛が來合せた事は、お角に取つては佛様でありました。口惜しまぎれに七兵衛に向つて此の事を語り出すと、七兵衛が面白がつて、

「そいつは面白い、さういふ風に仕かけられたんでは、こつちも其のつもりで喧嘩を買はなくつちやならねえ、併し、お角さん、お前が、ムカツ腹で吐鳴り込んで行つた日には先方の思ふ盡た、何さかい、智慧は無えものかなあ」

七兵衛が面白半分に頭をひねつて小膝をぼんざ打ち、

「い、智慧が一つ湧いて来た、それをお前さんに授けるから、上手にやつてごらんさい、その智慧さいふのは斯ういふわけなんだ、當人のお絹さんへ打突かつちや可けないよ、あれは多寡をく、つたやうに見せかけて置いて、搦手から、神尾の大將を責めるんだね、その責道具さいふのは斯ういふ仕組にするさい、先づ、神尾の殿様へ使を立て、この度、是非、殿様にお目き、を願ひたい掘出物が出ましたと斯う申上げるんだ、それは何たさ來る、お腰の物でございませぬ、

刀でございますと斯う申上るご、刀は誰の作たさお云ひなさに定つてゐる、それは外ではございませぬ伯耆の安綱でございますと申上るご、きつと神尾の殿様の眼の色が變るに違ひない、そこを附け込んで……處で、その伯耆の安綱は、もごく神尾の殿様のお持物でございますから、決して代金を戴かうごは存じませんが、お言葉に甘へまして、たゞ一品の望みがございます、その一品と申しますのは、お絹様のお手許にお出でなさる子供を、決してお絹様のお手から戴かうごは存じませぬ、殿様のお手づから……こんな事に持かけて御覽」

それをお角は大喜びで悉く吞込んでしまひました。これが伯耆の安七兵衛は、お角に智慧を授けてから、持つて來た箱入の品物を手渡ししました。これが伯耆の安綱でありませう。此の時の安綱はまた鳥越の甚内明神へは納めないであつたものさ見えます。甚内様へ納める代りにお角の手に預けて、その後の幕を見ようごもしない七兵衛は、此の小屋を立ち出で、何處へ行くか見れば、品川へ出て東海道を眞一文字に走せ上ります。

十二

お松が、ひそりで氣を揉んでゐるのみではなく、宇津木兵馬の此の頃は誰が見ても變つて來たごがわかります。

第一は金錢に困つてゐること、第二は外へ泊つて歸ることが多いこと、この二つは近來になつて

殊更に眼に立つやうになりました。

それを、誰よりも一番早く見て取つたから、お松の氣を揉むのは無理のない話です

宇津木兵馬は此の頃吉原通ひが面白くなりました。

あの時のやうに、東雲と二人で碁を打つてゐるだけでは納まらなくなりました。東雲が勤め氣を離れて兵馬を可愛がるやうになると、兵馬の心が漸く熱くなつて行きまゝ。

兵馬の傍にはお松といふ者もあり、お君のやうな美しい女もゐるのに、兵馬は其れに心を取られることがありませんでした。

京都にゐた時も新選組の連中と、島原界限に随分出入もしたけれども、ついで、その道に溺れるといふことがありませんでしたのに、こゝへ來て東雲に打ち込むやうになつたのは全く思案の外と云はなければなりません。

人間が純良であるだけに打ち込むごが深いと見え、女は商賣柄、いくらかの餘裕もあり手管があつても、兵馬は突きつめた心でその云ふ事の全部を信用してしまひます。生一本に打ち込むやうになると、自分が愛するだけ他から愛してもらはなければ満足が出来ないものになつて見るご、相手は此の上もない大敵であります。幾人の男にも自在に許すごの出来る立場にゐる女を、戀の相手として持つごは氣の揉めるごはない筈です。落ちて行く處は、他人には指一本もささせずに己れの一人の愛情で包んでしまはなければならぬといふごだが、それをするには此

の女を身受して、生涯を保證するといふことが第一の問題になつてゐるけれど、それは兵馬の力では覺束ないことで、女も亦それを兵馬には期待してゐないのです。若しそんな場合に立ち至れば兵馬でなくても外に心當りの客は、いくらもありさうなものです。今の處、女は兵馬を可愛がり可愛がられて、勤め氣を離れてゐるといふだけの氣分ですけれども、兵馬には、もつと突きつめて、

「世の中は金と女が敵なり早く敵にめぐり逢ひたし」いつぞや辻講釋で聞いた冒頭の歌が、ひしひしと迫つて来るやうです。

兵馬に浴びせてゐた可愛ゆい言葉を、兵馬が去ればまた外の人に借氣もなく浴びせる。兵馬を可愛がつた情を、また今宵は外の人に許してしまうのだ。さりさては、あんまり淺ましいと兵馬は歸りがけに泣きたいほかに悶えました。

此の苦痛に蹴弄されて、へこへこになつて相生町の老女の家へ歸つて見ると、自分の部屋に一人ゐて、無遠慮に兵馬の机へ寄りかゝつて物を書いてゐます。

「お、南條殿、いつお歸りになりました」

それは南條力でありました。

「やあ宇津木君、何處へ行つてゐた」

何處へ行つてゐた云はれた兵馬は、

「つい、其處まで」

と勢のない返事です。

「君、面の色が良くないぞ」

南條は其の爛々たる眼で兵馬の面をデロリと見て、

「君が意氣銷沈してゐると娘達が心配する、それに君、あまり外泊はせん方が宜しいぞ」

「……………」

兵馬はグツと詰まりました。

その時に南條力は書きかけてゐた筆をさし擱いて、膝を兵馬の方に向き直らせ、

「君の事だから、さう馬鹿けた事もすまいけれど、他で見えてゐるものは相當に氣を揉むらしい、氣を揉ませぬやうにしてやつて呉れよ、周囲の者に氣を揉ませるのが一番毒じや」

南條は光る眼をすゞしくして斯う云ひました。その言葉の節々が何もかも心得てゐるもの、やうで、眞綿で首を締られるやうに苦しくもあるが、この人だけに頼もしい處もあります。

思案に餘つた上、兵馬は遂に今の胸の中を南條力に向つて打明けました。

それを聞いてゐた南條力は、

「して見ると、その氣の毒な女を救つてやりたいが金が無いといふことに歸するのじやな、愚圖愚圖してゐれば他人が引抜いて持つて行くかも知れぬといふ怖もあるのじやな、兎も角も傾城一

人を身請するといふからには相當の金が要る筈である、餘程遊んだ金を持つてゐる奴でなければ出來ないことじや、宇津木君、君がそんな事に關係したのは柄ではない、宜しく見殺しにするに越した事はないのだが、君も此處まで切り出して拙者に相談を打つからには、退引ならぬ義理もあるのたらう、乗りかゝつた船で、是非に及ばぬ破目になつてゐるのたらう、こゝは一番拙者が肌をぬいでやらうかな。

斯う云つて莞爾として笑ひました。兵馬に取つては此の一言が頼もしいやうな探ぐつたいやうな感じがしました。けれども、冗戯にしる此の男が一肌ぬいでやらうと提言して呉れた事は非常なる心強さで、思はず息がハツむと、

「處で、その傾城を身請して一體當人はどうするつもりじや、宿の女房にでも据ゑやうとするのか、たゞしは圍ひ者にでもして置かうといふのか……まあ宜いわ、其の邊は豫め聞いて置くべき必要はない、併し、拙者が肩を入れるとしても、世間の金持の遊治郎のするやうに、大金を抛り出して、馬鹿を盡した引かせ方はせぬつもりじや、少々悪辣な手段をめぐらすつもりだが、結局は理窟に合つて行くやり方をして見せる、つまり正面から掛け合つては埒が明かない上に金がかゝるから、それで悪辣の手段を講じて置いて善後策を上手にやる、その悪辣の手段といふのは、女を盗み出すことじや、女を盗み出して置いて親許を説き落して其れから談判させるのだ、女を盗み出すことは拙者に任せるが宜い、親許を説き落すことも拙者に任せるが宜い、それが爲に要

する多少の金銭も拙者が君に免じて立て替へても宜しいが、宇津木君、その交換條件といふ意味ではないが、君に一つ頼みたいことがある。」

と云ひました。成程やりさうな事である。南條ならば部下の二三の浪士を差向はして女を盗み出させる位は朝飯前である。さうして置いて威力と和解と兩方面から事を纏めることも、此の男としては容易い仕事であると思ひました。それで兵馬は内心非常に喜ばしく思つて、一も二もなく南條に信頼することに決めました。況んや南條から交換條件の意味であつても無くても、頼むと云はれて其れを躊躇する氣などは更にありません。その時に南條が徐に云ひました。

「君に頼みたいこと、いふのは、拙者共の仕事をするのに兎角邪魔になる奴が一人ある、水戸の浪人で山崎讓といつて、鹿取流の棒にかけては中々の達者だが、君の力でそいつを一つ片づけて呉れまいか。」

意外にも南條の頼みといふのは、宇津木兵馬の力によつて山崎讓を暗殺させようこの事でありませぬ。

其の翌日の夕方になつて、兵馬が、ついまた、ふら／＼と迷うて行く足ざりは吉原の方面であります。

昨夜も此處で夜を明かして今朝歸つたばかりであるのに、又してもこの門をくゞらなければならぬやうに仕向けたのは誰が悪い。

兵馬が行つた時に東雲には他の客があつて、兵馬は暫らく待たせられました。兵馬は待たされることの、いつになく水いひの感じました。自分を待たせて置いて相手になつてゐる今宵の客といふのは何者であらうなぞ、考へました。

兵馬は實際、自分だけが此の女から可愛がられてゐるつもりでゐるのです。外の客はあつても其れは勤めの習ひで、その女との本當の愛情は二人の間にのみあるものたと思つてゐるのです。た二人の間に不足なのは金銭が有り餘るこいふわけに行かないだけの事で、他に金銭を山ほど積むお客が幾らあつたさて、二人がお互に可愛がるほどの愛情は湧いて来るものでは無いと思つてゐるのです。遊女に迷ふてゐるもの、自惚には誰もありさうな心持ですけれど、兵馬のは其れがいかにも初心でした。併し乍ら自分が斯うして待つてゐる間に、戀しい女が他の客の相手になつてゐるかと思へば、決していゝ氣持はしません。

そのうちに東雲は兵馬の許へ歸つて來ました。兵馬が悶えてゐるほどに女は氣にかけては居りません。

「兵馬さん、わたしは近いうちに身請をされるかも知れませんよ」

ご例の通り無邪氣な愛嬌をたゝへて云ひました。

「エ、身請をされる、誰に」

兵馬は足許から鳥の立つやうに驚かされました。

「そんなに吃驚なさらなくても宜うございますよ、たゞへ誰に身請をされても、あなたとお會ひすることの出来ないやうな處へは参りませんから」

東雲の申譯は兵馬に取つては少しも申譯になりません。それでも女は兵馬に充分の好意を示してゐるつもりで、逐一その身請の話といふのを兵馬に向つて物語りました。

その話によると、日本橋區の或大問屋の主人が東雲を身請をしようといふことに話に進んでゐるのださうです。今宵來てゐたのは其の客であらうと思はれます。可なりの老人であるこの事だが、この女を身請して何れかへ圍つて置くつもりらしい。女も、それをまんざら忌まは思つてゐないらしい。もごより色でも戀でもないが、その通りの老人だから世話になつてゐるのも長いことではあるまいし、世話になつてゐるうちも首尾さへすれば何所でも兵馬を迎へて會ふことが出来るからこいふやうな都合で、却て此の廊にゐるよりは勝手であるこの事情が唯一の理由となつてゐるやうです。

兵馬は其れを聞いて甚だ嫌らない。嫌らないのみならず今更淺ましきを感じずには居られません。人の力で自由にされたものに、そつと忍んで逢瀬を楽しむこいふやうな氣にはなりません。女が其れをあたり前の事のやうに心得、寧ろ手柄のやうに思つてゐることが兵馬には齒痒くて堪まりません。世話になつて身を任せる人こ、可愛がつて楽しむ人こを區別して、平氣で其の間を取つて行くことは、この社會に生ひ立つた女には是非もない觀念かと思へば淺ましい。かりそめに

も二人の間に本當の愛情があるならば、この際その商人とやらの身請話を断らせて、自分の力で萬事をしてやらなければ女の面目を立て、やることも、自分の面目を立てることも出来ないのだと思はれて堪まりません。そこへ来るに、自分に無ければならない事は、右の大商人とやらが積んで身請をしようとするだけの金を自分も持つて居らなければならぬ事、さうでなければ南條力の力にたよつて非常手段を決行するのみです。その時に兵馬は、南條から頼まれた義理合づくの交換條件を思ひ起しました。

「さうあつても此の儘には置けない、宜しい、山崎讓を手にかげよう」
遂に兵馬の決心が此處まで上りつめ、多年の仇敵に向ける刃を、己には罪も恨みもない、寧ろ新選組以來の諍みのある山崎讓に向けようとする兵馬の心には天魔が魅入りました。

十三

龍之助を尋ねあぐんだお銀様は染井の化物屋敷に歸つて、土蔵の二階で寫經を始めてゐます。針の先で自分の左の指を刺して其處から滲み上る血汐を筆に染めて法華經を序品から寫しはじめました。

今宵も亦、行燈の下で針を出して、左の人差指を刺しました。軟らかいふくらみへ針を立てると、ポツチリと茶葉のやうな血が湧いて來ます。お銀様は其のチクリとした痛みと共に湧いて出る血

をさらい、心持の様に眺めてから仕事に懸ります。

一ヶ所で足りない時は二ヶ所を刺します。指の先では食ひ足りないと思つた時は二つの腕をまくり上げて針を立てます。さうかすると滲み上がった血が筆に餘つて、ダラ／＼と腕を傳はつて流れることもありますけれど、お銀様は一向それを氣にするではありません。こんな事をして法華經二十八品を寫し終る時分にはお銀様の身體の血は一滴も無くなつてしまふかも知れません。お銀様は其れを承知なんでせう。それでも不意に書きかけた筆をさし置いて、梯子段の上り口を見返るのは、さうも人が上つて来るやうな氣配がして、トン／＼と梯子段の途中まで上つて來ては其處で立止まつてゐるものがあるやうに思はれてならないからです。

昔、なにがしの聖が經文を寫しはじめると惡魔が苦しがつて邪魔に來たさいふことではありますが、お銀様の發心を妨げる惡魔が其處まで來て、經文の功力で上へ昇れないのかも知れません。けれどもお銀様はそれを惡魔だとは思つて居りません。たしかに梯子段の下まで來た人が其處で迷つて二階まで上りきれないものだらうと思つてゐます。その人さいふのは龍之助ではありません。龍之助は全く別な人が下まで來て迷つて、此處へは上りきれないものだと思はれてならないのです。

お銀様が寫經の心願を起したのは、甲府の躰ケ崎の古屋敷で神尾主膳の殘忍な慾望の犠牲となつて虐殺された幸内の菩提を弔はんが爲に始まつたのが、中ごろから法文をうつす殊勝な心より

も、今は却て針で肉を刺す痛快味が、お銀様の身にこたへるやうになりました。

「お嬢様、亂暴なことをなすつてはけません」

「いゝのよ」

幸内の抑へる聲がしたかと思ふと、お銀様は一層反抗的に針を二つ腕へブツリと強く刺し込みました。

「あ、痛」

自分ながら、あんまり強く刺し込み過ぎたのを驚いて、あわて、引抜かうとしたはずみに、ポツリと其の針が中からは折れてしまひました。たゞ折れたんならいゝけれど、半分折れたのは肉の中に食ひ止まつてゐて、折れた其の半分だけが自分の指先に残り残りました。そこで、さすがにお銀様もハッとしましたけれど、折れた半分の針はさうしても抜くことが出来ません。口を當て、吸ひ取らうとして空しく努力しました。幾度口を當て、吸ひ上げても、お銀様の舌に磁石の力が備はつてゐない以上は肉の中に残つた針を引出すことは出来ないのです。出来ないのをお銀様は自棄に吸ひ上げ吸ひ上げたものですから、滲み出る血を、すつかり口中に吸ひ取りました。紙を開いて、それを吐き出して見ると、白紙の上に牡丹の花を散らしたやうに眞赤な血です。

其の時に人の氣配がして、いつの間にかお銀様の背後に立つてゐたのは悪魔でもなければ幸内でもありません。それは眞蒼な面をした龍之助でありました。

お銀様はそれを見るや、

「お歸り遊はせ」

肉に食ひ入つてゐる針の事は忘れて喜び迎へました。

けれど龍之助は、お銀様が今まで何をしてゐたか、今何をしたのたかを見る事が出来ませんから、いよく冷然たる上に冷然たるもので、疑を突立つてゐるうちにも、いつもと違つてゐるのは右の手に一本の尺八を携へてゐることです。

この人は今まで何處に何をしてゐたのたうさいふことはお銀様もまた尋ねはしません。龍之助もまた其れを語らうとしません。尺八と刀を荒つぽく其處へ投げ出した龍之助は、手さぐりして、夜具をはね返すさ其の中へもぐり込んで寢てしまひました。お銀様は眼を凝らして其舉動をながめてゐました。

その沈黙が暫らく續いてから後、

「もし、貴郎」

お銀様は枕許へ坐つて優しい言葉をかけました。この時も返事はありません。

「針がこゝへ刺さつて痛くて堪まりません、誰か抜いて下さる方があればいいのに」

お銀様はひそり言を云ひました。それでも何とも挨拶がありません。

「半分、この肉の中へ折れ込んでしまつてゐるのですから、さても抜けやしませんね、さんな大

カの人たつて、この針はかりは抜き取ることは出来やしません、抜かないで置くと、きつと此處から肉が腐りはじめるでせうよ、さうしてゐるうちに此の手を切つてしまはなければ、身體中が腐つてしまひませう、悪いことをしてしまひましたね」

お銀様は、ひそり言を云つて、折れた針の創から滾々こ湧き出す血汐を面白さうにながめてゐます。龍之助は其れを聞いてゐるのか聞いてゐないのか、相變らず死んだものゝやうに寝込んでゐるのは、よくよく疲れきつたものさ見えます。

「もし、貴郎、私の身體が腐つてもいいのですか」

お銀様は物狂ひでもしたやうに、荒らかに龍之助を夜着の上から揺ぶりました。それでも答へがありません。

「わたしは斯うして血を絞つてお經を書いてゐました、もし、わたしの身體が此處から腐つていいのなら、わたしはもう、此の血でお經を書きません、書きかけたお經は反古にしてしまひます、この血で歌を書いてしまひます、貴郎、お經を書いた方が宜いでせうか、それとも、歌を書いた方が宜いでせうか、お經の有難味は、わたしにはまた本當にわかりませんけれど、歌の面白味はさうやらわかつてゐますから、寧ろお經をやめて歌にしてしまひたいのです、信心をはじめて途中で廢す二倍の崇りがあるといふことを、よく世間で云ひますから折角血で書きかけたお經をやめてしまへば、怖ろしい崇りがあるでせう、法盛んなれば魔も亦盛んなり何かの本に書いて

ありました、人が善心を起すと、きつと惡魔が片一方から妨げに来るさうです、この針の折れたのは惡魔の仕業にちがひないと思ひます、惡魔が針の形に化けてお經を書くわたしの手の中に食ひ入りました、これが取れなければ、いくらお經を書いても駄目なんでせう、もし抜けるものなら此の針を抜いて下さいまし、わたしの身體が惡魔の爲に腐つて行くことがお忌ならば、此の針を抜いて下さいまし、貴郎は刀を使うことはお上手ですけれども、この短い針の折一本を、さうすることも出来ずまい、お、痛いこと、ヒリヒリと痛みます、それでもこの痛みは何だかい、心持よ、もう一本、こゝへ針を刺して見ませう、宜うござんすか、貴郎」

お銀様は、また一本の針を摘み上げました。

その時に土藏の前の車井戸の輪がギーツと刺りました。誰か水を汲みに来たものさ見えます。

その車井戸がギーツと軋る音を聞くに、お銀様はソツと身の毛を竪てました。お銀様は夜中に車井戸の軋る音を何よりも嫌ひます。その音が忌だから一旦はソツとしたけれど、直ぐに摘み上げた第二本目の針を何の躊躇なく、プツリと左の二の腕へ刺し込みました。眞紅な血汐の粒がホロ／＼と湧き上がりました。お銀様はそれをチクリ／＼と深く刺し込みます。その度毎に少しづつこたへて行く痛みが、何ともいへない快感を與へるものらしくあります。

その時、車井戸の音がまたキリ／＼と鳴りました。それと同時に喧ましい物音が井戸側のあたりで起りました。

「汝れ夜中、人の住居をうかがうとは怪しからん奴ぢや、誰に頼まれて何しに來た、それを言はぬぞ、此の井戸の中へ投げ込むからさう思へ、さあ、誰に頼まれて何しに來た、眞直に云へ」斯う云つて罵つてゐるのは、他ならぬ神尾主膳の聲であります。然も主膳が酔つはらつて酒亂になつてゐる時の聲であります。その云う處を察するに何か怪しの者を捉まへて、それを井戸側まで拉し來つたものらしくあります。お銀様は針の手をさぐめて耳を傾けるぞ、

「いゝえ、決してさういふわけではございませぬ、わたくしは怪しい者ではございませぬ、安房の國、清澄山から出て參りました辨信さ申す盲目でございます、この通り眼が見えないものでございます、清澄山から此のお江戸へ出て參りまして、外に稼業もございせんから、少しばかり習ひ覚えしました平家琵琶を語つて門附を致して居りますのでございます、御覽下さい、この通り袋に入れて脊負つて居りますのが其の平家琵琶でございます、ほんたうに拙い業でございますから、収入も至つて少うございます、それでも皆様のお情で、さうやら其の日の暮しに差支へないだけは御報酬を戴きますんでございます、只今は本所の報恩寺長屋に御厄介になつてゐるんでございます、長屋でも皆様が、わたくしが眼が不自由なものでございますから可愛がつて、いろ／＼と世話をして下さいますんでございます」

斯う云つて申譯をしてゐるのは、また年の若い、成程、名乗つてゐる通りの盲法師であるらしい聲であります。處が此の神妙な申譯は頭からケシ飛ばされてしまひました。

「黙れ、黙れ、嘘を云ふな、貴様はニセ盲目だ、誰かに頼まれて此の屋敷の容子を探りに來たものに相違ない、琵琶であれ、三味線であれ、門附をして歩くほどの者が、この淋しい染井あたりへ、うろついて如何なるのぢや、本所から此處までさう間違つても盲目の獨り歩きが出来る道ではない、眞直に白状せねば、此の井戸の中へ生きながら叩き込むが如何ぢや」

これは主膳の聲ではなく福村の聲のやうです。彼等は此の盲法師を何處までも偽物と信じてゐるらしい。何者かの頼みを受けて此の化物屋敷の内状を探りに來たものと信じてゐるらしい。

成程、さう疑へば疑はれる餘地が無いではありません。門附をして歩くに云ひながら田舎同様な此の染井あたりへやつて來るさういふのもわからない。また盲目の身で本所から此處まで流して來たさういふのも充分に不審の價值はあるのであります。それからまた此の化物屋敷の内状さういふものが、實際、嫌疑をかけられて探られた場合に無いとは云へない住居であります。それを引捕へて糺明しようさういふのは主膳の仕業としては有り得べき事に違ひないが、それにしても、生きながら井戸へ投げ込むさういふのは餘りに慘酷である。さすがにお銀様も、いゝ心持でそれを聞いてゐるわけには行きません……處で盲法師の申譯は少しく意想の外でありました。

「それには仔細がございます、わたくしが、こんな處まで迷ひ込みましたのは、お屋敷の御容子を、おうかゞひしようなんて其んな譯ではございせん、尺八の音色に聞き惚れてつい／＼此處まで參りましたのでございます、その仔細を申しますのは斯様でございます、わたくしが今晚町

を流して参りますと、ふと尺八の音が聞えました、わたくしは眼が見えませんが音を聞くことが好きでございませぬ、音には御承知の通り宮商角徴羽などの幾通りもございませぬ、また双調、盤渉調、黄鐘調といったやうな調子も色々ございませぬ、それをわたくしは聞きわけるのが好きでございませぬ、その外に音といふものは人の心持によつて變化が起るものなれどもございませぬ、心に悲しみを持つた時は、喜びの調を吹きましても喜びには響きませぬ、心に楽しみを持つたときは、よし悲しい音を吹きましても、その悲しみの中に喜びがあるのでございませぬ、身體の壯健な時に吹く音と病氣の前に吹く音とは違つて居ります、失禮ながら、あなた方がお聞きになつては少しも違はないと仰有る音を、わたくしが聞けば違つたこと申すことがございませぬ、人に災ひの起る前には其の音を聞いてゐると、ひそりてに判ることがあるのでございませぬ……それでございませぬから、わたくしは、氣にかゝる物の音色は聞き過ぎしに致す事は出来ないのでございませぬ、そこで、今晚、聞きました尺八の音色は近頃珍らしいものでございませぬ、わたくしは其の音色を聞きながら、色々想像を致しまして、ついで、此んな處まで、お後を慕つて来たやうな譯なれどもございませぬ、ご申すのは、その方は駕籠の中で尺八を吹いておゐてになりましたんですが、わたくしと同じところに眼の見えないお方なれどもございませぬ、眼の見えない方の吹くのと眼の見える方の吹くのと、私にはよくわかるのでございませぬ、處が、同じ眼の見えないに致しましても、そのお方の眼の見えないのと、私の見えないのとは性質が違ふのでございませぬ、わたくしの眼

は全くつぶれてしまつた眼でございませぬ、その方は、さうかするご開きませぬ、再び眼が開くべき筈のものを、開かせて上げることが出来ないでございませぬ、それですから、わたくしの眼は全く闇の中へ落ちきつた眼でございませぬ、そのお方は天にも登らず闇にも落ちない業にからまられた眼でございませぬ、それに、わたくしが、さうしても不思議で堪まらないと思ひますのは、前に、わたくしは其の方と一度逢つたことがあるのでございませぬ、さうして其れが判つたかご申しますと、駕籠の中で咳をなすつた時に氣がつかました、いつぞやの晩、神田の柳原の土手といふ處を通ります時分に、わたくしは怖いものに出會しました、怖ろしいことをして人を毘殺にしてゐるお方がありました、その方が、つまり今夜尺八を吹いて駕籠に揺られて此方の方へお出でになつた方なれどもございませぬ、その尺八のうちには本手の鈴幕といふのを吹きになりましたね、俗曲の戀慕は違ひまして、鈴幕と申すのは、御承知でもございませぬが、普化禪師の遷化なさる時の鈴の音に合せた秘曲なれどもございませぬ、人間界から天上界に上つて行く時の音があればなれどもございませぬ、わたくしは其の方がお吹きになつた鈴幕を聞きまして下總小金ヶ原の一月寺のここを思ひ出しました、あれは普化宗の總本山でございませぬ、今は居りますか、さうですか、そこに尺八の名人が其の時分おゐてになりました、以前、私はその方から鈴幕を聞かせていたのが忘れられませぬ、その時の心持と今晚の心持とが同じことでもございませぬ、人間界を離れて天上界にうつる心持といふのは此れかも知れませぬ、尺八の音に引かれて、

知らずく、わたくしは此處までおあそを暮つて来て、つひに、お屋敷の中まで紛れ込んでしまひました、さういふ譯でございますから、決して怪しいものではないでございます、さうぞお見のがし下さいまし」

一息に語りつづけてしまつた辨信の長物語に、抑へつけてゐた者も呆れたらしいが、言葉が途切れると急に撥ね返つて、

「お喋り坊主たなあ貴様は、聞かれもしない事まで、よくツベコベと喋べるお喋り坊主だ、音がさうあらうと、尺八が鳴らうと鳴るまいと此方の知つた事かい、貴様をスポーンと此の井戸の中へ抛り込んだら其れこそい、音がするたらう、人間界から天上界さやらへ舞ひ上つたものを、スポーンと井戸の中の地獄へ逆落しにかけると、それで三界をめぐり歩いたことになる。まあ、

此の井戸の中へ入れ」

神尾主膳は斯う云つて、また此の盲法師の首の根を押へて吊るし上げようさします。酒亂とは云ひながら本當に此の盲法師を井戸の中へ投げ込むつもりと見えます。

「あ、本當に、わたくしを井戸の中へ投げ込んでおしまひなされるのですか、御冗談に、わたくしを嚇かして御覽になるのぢやございませんか」

盲法師は今更慄へ上つたやうです。

「知れた事よ、貴様位の小坊主が丁度投げ込みごろの小坊主だ、スポーンと投げ込んで見たい、

古井戸や坊主飛び込む水の音、スポーン」

神尾主膳は惡戯を弄しながら盲法師を抱上げたものらしい。此時に盲法師は悲鳴を揚げました。

「そりや、あんまりお情ないでございます、お屋敷うちへ足を入れましたのは、いかにも、わたくしが悪いのでございます、お叱りを受けましたも、お仕置を受けましたも、お恨みには思ひませんが、井戸の中へ投げ込みなされるのは、あんまりヒドウでございます、それほどの罪ではございません、存じませんことでありますし、何を云ひましても、眼が見えないのでございますから、ついで、こんな事になりました、さうか、お助け下さいまし、井戸へ投げ込むことだけは、おゆるし下さいまし」

盲法師は必死になつて神尾の毒手から免れようとして、井戸桁に取りついてゐるもの、やうです。盲法師とは云ひながら死力を出して争うて見ると、神尾も無難作には投げ込むことが出来ないこと見えます。併し、斯うなつて見ると、神尾の惡癖は、いよく嵩じて来るばかりで、いくら盲法師が事情を訴へても、悲鳴を揚げて、それでは許してやるさういふ氣づかひは無い。そのみならず、彼が悲鳴を揚げて悶掻けは悶掻くほど、却て神尾の殘忍性を煽るやうなものであります。幸内を虐殺したのも、安綱の刀が欲しいとは云ふもの、一つは此の殘忍性が然らしめたものであります。井戸桁に取りついてゐる盲法師の辨信は其れとは知らず聲を嚔らして悲鳴を揚げました。

「人は死んでも思ひさいふものが残ります、わたくしだけではございませぬ、あなた様に祟りが出来ませぬ、わたくしを井戸へハメるごあなた様が地獄に落ちませぬぞ」

もごより、斯様な警告に怖れる神尾ではありません。遮二無二辨信を引提へて井戸へ投げ込まうと焦ります。辨信は、さうはさせじと死力を出して相争うこと前の如くであるが、結局、盲法師は神尾の敵ではありません。遂に井戸桁にしがみついた兩の手を撈ぎ離されてしまひました。得たりと、神尾は兩の手を抱きすくめて辨信を渡ひ上げました。

「あ、誰か助けて下さい、盲法師の辨信を生きながら井戸の多へ投げ込んでしまひませぬ、辨信は其れほどの罪をつくつた者ではございませぬ、このお方が無慈悲でございませぬ、此のお方は非道でございませぬ、誰か助けて下さる方はありませんか、一生のお願ひでございませぬ、後生のお頼みでございませぬ」

ほごんと断末魔の叫びに等しい此の聲が、十蔵の中にあるお銀様をはじめ寢てゐる龍之助の耳を驚かさぬ譯には行きませぬ。

「あなた、あれをお聞きになりましたか」

「あ、聞いてゐる」

龍之助は辛うじて答へましたけれども、起き上つて其の急に赴かうとする氣色はありません。却てお銀様が立ち上りました。

神尾の残忍と兇暴を知りつくしてゐるお銀様は、この場合に自分の力で如何することの出来ぬのを知らない道理はない筈であるのに、それでも静止はして居られなくなつたものと見えませぬ。

今、お銀様が立ち上つた足許に觸れたのが一管の尺八であります、今までは忘れてゐました。

「あ、外の盲法師さやらが、尺八を吹いてお出でになつたさいふのは、あなたの事でございませぬ、それなら、あなた、助けに行つて上げて下さい、あなたの尺八の音に聞き惚れてあごを慕つて来たのたご云つてゐるではございませぬか」

お銀様は尺八を片手に持つて再び龍之助を動かしました。この時、外では盲法師の悲鳴が三たび響き出しました。

「わたくしには、さうして、私が、これほどの目に遭はなければならぬのですか、それがわかりませぬ、お助け下さいませ」

井戸の車が、ミシ／＼と軋る音を聞いてゐるご、盲法師は神尾の暴力を必死にこらへて井戸の繩に取りすがつてゐるものゝやうです。神尾主膳は、無茶苦茶に残忍性が嵩じて、口も利けないほどに昂奮してゐるらしく、たゞ鼻息のみが荒く、力を極めて一人の盲法師を井戸の中へ投げ込まうとしてゐるものゝやうです。さうさせじと争う力は、盲目の小坊主ながら侮り難きものと見え、神尾が力を極めてやつても、やゝもすれば持て餘すほどの抵抗力があります。最初は神尾の

腕に取すがつて見たが、それを抜き離される。今度は着物に取りつきました。その着物が破れる。今度は井戸桁に取りつきました。井戸桁に取りついたので、それを抜き取られる。今後は頼みの綱の井戸綱に、しつかり抱きついて物哀れな悲鳴を揚げてゐるのであります。死を怖るゝ。今斯の如く、生に愛着すること斯くの如くなればこそ、神尾の残忍性はいよいよ其れに興味が乗つて來ます。辨信が素直に殺される氣ならば、神尾は、さまで問題にしなかつたかも知れません。それにも拘らず、辨信は、いよいよ悲鳴の限りを加へて、

「死ぬのが忌なんではございません、死なねばならぬ譯がわからないのでございます、殺されるのが怖いのでございませぬ、こゝで殺されるほどの罪を、わたくしはまた作つた覺えがございません、死ぬと仰有れば何時でも死にます、わたくしが死んで、他様が助かりますやうな事ならば、いつでも死んでお目にかけます、また、わたくしの過去の罪と現世の罪が重いから、斯うして殺すのだと仰有るならば、幾度でも殺されて罪ほろぼしを致しますでございませぬ、けれども、今晚、斯うして……見ず知らずの、あなた様の爲に、何にも譯がなくて、たゞ、お屋敷のまはり、うろついてゐたさいふ廉だけで、生きながら井戸の中へ投げ込まれましたは私には死んでも死にきれませぬ、さうぞ、お助けなすつて下さい、さうしてもお殺しなさるならば、私が死ぬるやうにしてお殺し下さいませぬ」

必死になつて悲鳴を揚ければ揚げるほど神尾の残忍性に油を加へるものに過ぎませぬ、過去世も

未來世もあつたものでありません。神尾は遂に金剛力を出しました。その力で、わづかに取り締つてゐた一條の井戸綱の手が離れました。

「あれ——」
凄じい音を立てたのが、この世の別れであつたか無かつたか、辨信は遂に井戸の底へ生きながら投げ込まれてしまひました。

「あつ——」

これと共に絶叫して後へに墮ち倒れたのが神尾主膳であります。

お銀様は我を忘れて土蔵の二階から倉の戸前まで一息に駆け下りてしまひました。

二階から駆下りたるお銀様が倉の重い戸前を開けるには、かなりの暇がかゝりました。

漸く、それを開けて井戸端まで來て見るに、後に倒れた神尾主膳は福村の手によつて頻りに介抱されてゐます。介抱してゐる福村は、度を失うてあはてきつてゐるのが餘りに大仰です。

「早く、何さかして呉れ、誰でもいい、早く何さかして呉れ、大將が死んでしまふ、この傷を見るがいい、始末が悪い、この傷を見るがいい、」

福村は神尾を抑へたり抱いたりして、うろたへ廻つてゐるのを、お銀様は冷笑氣味で後目にかけて辨信が投込まれた井戸へ近づかうとしたが、井戸の屋根の柱につるしてあつた提灯の光りが生憎に怪我をしたさいふ神尾の面を照してゐます。神尾主膳の面は左右の眉の間から額の生際へかけ

てる牡丹餅大の肉を殺ぎ取られ、そこから、ベツトリと血が流れてゐるのです。福村があわて迷

うて手んてこ舞をしてゐるのは其の大怪我の爲であることがわかりました。この點に於てはお銀様は冷やかなものでした。神尾の額の^{おの}大怪我は寧ろ痛快至極なものだと思ひました。だから、いくら福村があわてやうと喚^{わめ}がうと一向驚かない。神尾が苦しむのは當然であつて、處もあらうに額の真中へ刻印を捺されたことの小氣味よさを喜ばないわけには行かないが、それにしても、咄^{はな}嗟の間に、神尾が此の大傷を受けて倒れたのは何に原因するのか、それが、わからないなりに井戸の車の輪を見上げると、釣瓶の一方が、車の輪の處へ食ひ上がつて逆立をしてゐるやうに見えます。氣のせい、その釣瓶の一端に神尾の額から殺ぎ取られた牡丹餅大の肉片がベクリと密着^{くっ}いてゐるものやうに見えました。

お銀様は、そこでホツと息をついて、同時に胸の溜飲を下けました。は、あ、これだなと思つたのでせう。盲法師が下へ投げ込まれると其の重みで、一方の釣瓶が急轉直下すると一方の釣瓶が海老のやうにハネ上つて、さうして、その道づれに神尾の額の肉を牡丹餅大だけを殺いで持つて行つてしまつた。

それだと思つたから、お銀様はいよ／＼痛快に堪へませんでした。痛快といふよりは此の時のお銀様は正しく神尾主膳の残忍性が乗りうつゝ、たかと思はれるほかに、い／＼持になりました。うめき苦しむ神尾にも、驚き騒ぐ福村にも、冷然たる白い齒をチラリと見せたきりで、井戸桁へ近

寄つて、一方の繩をクルリと廻してゆるめるを、海老のやうにハネ上つてゐる一方が釣瓶が少しく下がつて来たから、手を高くさしのべて、それを取り下ろして見るとお銀様の想像した通りに、神尾主膳の額の肉片は、べつと釣り釣瓶の後に密着してゐました。

お銀様は、其の肉片と神尾主膳の面と、うろたへ騒ぐ福村の舉動を見比べながら、徐かに繩を引いて見ると手ごたへがあります。そこで釣瓶を卸して、兩の腕の力をこめて繩を引いて見ると、いよ／＼重い手ごたへがあります。生きてはゐまいけれども、この繩の重みによつて見ると、今、投げ込まれた盲法師は、井戸の底でまた此の繩に取りついてゐることは慥かです。盲法師は最後の死力で、繩に取りついたら、その手を離さないでゐるものらしい。さうたすれば、この繩を手繰ることによつて、その死骸を引上げることも出来る、とお銀様は、さう思つたものらしく全力をこめて繩を手繰り出しました。

小坊主さは云へ、人間一人を引き上げることは女一人の力には可なりの重荷です。それでもお銀様の此の時には思ひがけない怪力が加はつたものやうに、誰の助けを借りもせずに、井戸の車が動きます。

その時に龍之助は蒲團の上に起き直つて、枕許の煙草盆を引き寄せて長い煙管で煙草を喫みはじめました。

あわて騒いでゐた福村は、神尾を肩にかけて漸く其の場を退去してしまつたあそこには、お銀様が

力をこめて井戸繩を手繰る音が、ミシリミシリと重く軋つて、お銀様は一尺引き上げては休み、二尺引き上げては息をついてゐる容子が手に取るやうです。好きでもない煙草を吹かしながら龍之助は、茫然として事の經由を考へてゐます。一體、あの盲の小坊主なるものが奇怪千萬であるとも思つてゐるのでせう。

「坊さん、いつかりして下さい、怪我はありませんか」

これはお銀様の聲でありました。その時に、重い車井戸の軋りは止んで、

「はい、有難うございます、何處も怪我はございません」

意外にも、これはハツキリとした小坊主の聲。して見れば、たしかに一旦は井戸へ投げ込まれた小坊主は、生きて再び浮び上がったものに相違ない、龍之助は其れを怪しみました。

「何方か存じませぬが、お蔭様で命が助かりました、一旦、地獄へ落ちたわたくしが、また此の世に生れることになりましたのは、あなた様のお蔭でございます、でございますけれど、斯うして再び此の世へ生れ更つて参りましたが、業が盡きない限り此の世もあの世も同じこの地獄でございます」

小坊主は凄然たる聲で、こんなことを言ひ出しました。さき程から聞いてゐれば、この小坊主のいふ事が一々癩にさはらないではない。お銀様も今の言葉を幾分か不快に思つたらしく、

「そんな事を云うものではありません、地獄は怖ろしい處です、この世はまたく捨てたもので

はありませんよ」

お銀様は叱るやうに云ひました。

「私も、つい今までは左様に思ひましたけれど、今となつて見るに地獄も、そんなに怖い處ではないと思ひましたよ」

小坊主は斯う云つて滅らす口を叩きました。滅らす口では無いけれども、何さなく小僧らしい口に聞えました。それは、最初は、あれほさまで苦がつて、絶叫したり、號泣したりして死ぬことを厭ひ、助けられんことを求めてゐたのに、助けられ救ひ上げられて見れば却て済ましたもので、さのみ感謝の意を表してゐると思はれないからです。感謝の意を表さないのみならず、寧ろ、酒蛙々々として餘計なことをして呉れたと云はぬばかりの濟まし方であつたから、お銀様も面白くなく、そんなら地獄へお歸りなさいと云つてやりたいほどの處を黙つてゐるさ、いゝ氣になつて盲法師が、

「つい、今までは、私も、さうかして助かりたいと思ひました、生きて居りたいと思ひましたけれど、井戸へ落ちてしまつた時に、生きてゐたいさか助かりたいさかいふ心持が、すっかり無くなつてしまひました、大へん良い心持になりました、ですから、私は、井戸へ落ちましたから、助けて呉れども生かして呉れども一言も申しませんでした、幸ひに、身體には怪我は一つも致しませんで、しつかり此の繩を握つて居りましたから、水の底へも沈みはしませんで、わた

くしの身體は半分だけ水の中へブラリと下がつて半分は水の上に浮き上つて居りました、その時、わたくしは何方でも宜いと思ひました、再び地の上へ浮き上がれなければ、水の底へ沈んでしまつても解しい心持で往生が出来ると思ひました、さうしてゐるうちに、わたくしの身體が少づづ上へくさ引き上げられるやうでございます……その時も私はごちらでも宜いと思ひました、小坊主の言葉聞いてゐる龍之助は煙草盆の縁で煙草の吹殻をハタキます。その後、染井の化物屋敷へ、また一個の怪物が加はることになりました。その怪物は言法師の辨信であります。

二階には龍之助とお銀様が住んでゐる處に、辨信は階下の板の間に一疊の疊を敷いて其の上に安んじてゐました。土蔵の二階には窓があるけれども、下には窓がありません。尋常の人では晝燈火を點さなければ堪へられない處へ、言法師の辨信は平氣で座を構へました。

そこで翌日からの辨信の仕事は琵琶の手入れをすることです。昨夜の井戸端騒ぎで辨信の平家琵琶の上部は滅茶々に毀れました。辨信は一挺の鑿若干の材料を借り受けて、手細工で、それをコックと修繕に餘念がありません。

「この平家琵琶はかりは、好く人は馬鹿に好きなんでございます、嫌ひな人は見向きも致しません、それで、よく世間の人平家は江州館のやうたご申します、好きな人は何處までも好きでございます、嫌ひなものは、てんで見向きも致しません、其處を申したんでございませうね、わた

くしが、この琵琶を習ひはじめましたのは……」

お喋り好きな此の小坊主は、餘念なく毀れた琵琶の手入れをしながらも、人の足音さへ聞えれば何かな語り出すのであります。人が耳を傾けやうものなら、自分の素性來歴までも事細かに喋べり出さうとするのだが、こゝにはお銀様と、それから屋敷の召使の外には、あまり近寄るものはありません。相手が無くなる平家の文章を、ひこりて口吟んで、曲の歌ひ廻しが思ふやうに行かない時は幾度も諦み直してゐます。その辨信琵琶修繕の手は少しも休むものではありません。たゞ、擧が行かないだけで、何處を如何直してゐるのか、この分では、一面の琵琶修繕に半年もかかるかと思はれるほどの體たらくです。

「ハ、エ、やるご云ふほごでもございせんが、好きなものでございませうからね、三味線も、ちよつさはかりならお相手を致しませう、私に琵琶を教へて呉れました檢校が何でも心得のある人でございませうね、その人から調子だけを教へて戴きまして、あごは自分で工夫するご、さうやら當りがつくのでございませうから、追々ご、色々の音曲をやつて見たいご斯う思つてゐるご、さうやいます、お寺にゐては、さう色々のものをやるわけには参りませんから、在家に居りますうちに、あれこれ手を出して置きたいご思つてゐるご、さうやいます、それでは藝人になるごお此音が出るかも知れませんが、私は藝人で宜しうございませう、さても名僧知識となつて衆生濟度を致すやうな事は、私共の及ぶ所ではございせんから、藝人となつて、いろいろの面白い音曲を皆様に

お聞かせ申し、皆様をお喜ばせ申すことが出来れば其れで結構でございます、ですから平家琵琶は、あまり多くの人好きが致しませんもの故に、琵琶をやめて寧ろ三味線にうつらうか此の頃は、さう思つてゐる處でございました、それ故、斯うして毀れた琵琶に手入れをして見まして、若し調子が合はないやうにでもなりますれば、こゝで琵琶をやめて三味線の方に宗旨替を致しませうと、そのつもりで斯うしてやつてゐるんでございます……合奏ですか、結構でございますね、琵琶は此の通りいけませんから三味線でお相手を致したいものですが、三味線がございませうか、あ、さうですか、先生が尺八で、あなた様がお箏でわたくしが三味線で、それは至極宜しうございませう、お相手を致しませう、わたくしは數を餘り多く存じませんから、一つ二つ教へて戴きます、三度教へて戴けば、さうやら獨り歩きが出来たらうと存じます、其れでも私は毎晩、琵琶を流して歩きますうちに、諸方のお師匠さんの軒下へ立つて、いろ／＼のお稽古を立聞を致して覚えさせて戴いたものでございますから、そのうちで物になつてゐるのを一つお相手を致して見たいものでございます」

誰もゐないのに辨信は此んな事を云ひながら、暗澹たる土蔵の中の隅つこで頻りに鑿を揮つて居りました。

その翌日から、此の土蔵の中で、思ひがけない合奏の音が聞えました。その合奏も世の常のお行儀のよい合奏ではありません。机龍之助はあちらを向いて短笛を弄ぶと

それと六枚折の屏風一重を隔てた此方でお銀様が箏の琴を調べます。さうすると二階の下の暗澹たる處から盲法師の辨信が三味線の音をさせるのです。三人共、離れ離れにゐて、それと勝手の形を取り、勝手の曲を奏ではじめた時が合奏のはじまる時であります。初まる時に何等の合圖もなく、三曲のうちの何れかの一方が音締をするとき期せずして他の二人が、それ／＼の樂器を取り上げるのであります。

「千鳥の曲」を吹きはじめた時は、龍之助は何とも云はれない心持になりました。

しほの山。

さしでの磯に

すむ千鳥

君が御代をは

八千代こそ鳴く

と歌つた後に、後歌の「淡路島かよふ千鳥の……」が續かなくなりました。それと同時にお銀様も、はたと琴の音をやめてしまひました。

下にゐた盲法師の辨信も亦、糸を半ばに斷絶しなければならなくなりました。そこで、折角、合奏に興の乗りかけた「千鳥の曲」は曲の半ばで立ち消えになりました。それでも三人のうち、誰一人、女句を云うものはありません。最初に曲をやめたのは龍之助であ

りましたけれど、聞いた處では三人申合せて同時にやめたもの、やうであります。陰深な土蔵の中は無人の境のやうに静まり返つて、やゝ暫らくの後に、

「何か傷心の事がございましたね」

辨信法師が、やつこの事で下から上へ向けて言葉をかけました。

二階からは早速の返事ありません。

「傷心の事」さいふのは、少しくしやれた言葉であります。傷心さいふ言葉を文字で現はさず音で現はしたから、二階の二人も、ちよつと戸惑ひをして、そのまゝに受取るこゝが出来なかつたのかも知れません。

そこで辨信は三味線をさし置いて琵琶の修繕に取りかゝりました。

「如何でございます、先生、明晩あたりは町へお出かけになつて御覽になりませんか、お件を致しませう、あなた様が短笛を鳴らしてお出かけになりますならば、私が……左様、琵琶はまた出来上りませんし、三味線では、うつりが悪うございますから、私も、やはり短笛を吹いてお件を致しませう、明晩はお天気も宜しうございまして、それにお月夜でございます、時々、外へお出でになることがお互様に保養でございます、月に浮れて、お江戸の市中を、尺八の音を流して歩くのは風流ではございませんか」

辨信が斯う云つて相談をかけると、

「出かけてもいゝな」

さいふのは龍之助の返事でありました。

けれども其の明晩は其の事が實行されませんで、それから三日目の晩此の二人の盲目が相つれて築井の屋敷をぶらりさ出かけました。龍之助は、その頃市中を歩く麻無僧の姿をして身には一剣をも帯びて居りません。辨信は例のころもを着て、法然頭を剃代笠で隠して居りました。二人共に杖は持たず、同じやうな尺八を携へて出かけました。土蔵住居の屈託から、斯うして、かりそめの風流を試みるつもりであるが、それにしても生憎今宵はまた月がありません。お銀様は二人の出歩く事を敢て異議を唱へないのみならず、何くれと仕度をしてやつて送り出したものです。それは、辨信が附いて行くことが何さなしに心持みになるし、それと今宵に限つて龍之助が身に寸鐵を帯びずして出て行くさいふことに安心したものと見えます。

十四

丁度、その晩の事、甲州街道を新宿の追分まで上つて来た一組の荷馬があります。五頭の馬に、それと荷物を積んで馬方が付き添ひ、最後の一頭のから尻には三度笠の合羽の宰領が乗つてゐました。その宰領の脊格好が、さうやら山崎讓に似てゐるのも道理、聲を聞けば、やつぱり山崎讓です。

「おい、久造、おれは、ちよつと思ひ出した事があるから、これから内藤の屋敷内へ寄つて行か
にやならねえ、お前、御苦勞だが、代りに宰領をやつて呉れ、前の四頭は拘ねえから新宿の間屋
場へ抛り込んで、此のから尻だけは今夜のうちに江川の邸へ着けてへんだ。宜しく頼むぜ」

山崎が斯う云うと、馬の側にゐた屋敷出入の飛脚らしい五十男が、
「宜うございます、たしかに、私が今夜のうちに、新錢座の江川様へこのお馬だけはお届け申す
ことにしますから、旦那様、さうか御ゆつくりと御用をお足しなさいまし」

快く引受けたから、山崎は馬から飛んで下りて、

「それじゃ頼む、それ、この笠をかぶりな、合羽も引かけて行くがい、この提灯にはそれ江
川の印があるから、消さねえやうにして行つて呉れ」

「旦那、それには及びますまい、この菅笠で結構ですよ」

「左様でねえ、三度笠が定法だから冠つて行くが可からう、江川の邸で笑はれても詰まらねえか
らな」

「それぢや、お借り申すことに致しませうかな」

「それでお前の其の菅笠をおれに貸して呉れ、合羽はお互に其れで宜からうじやねえか」

山崎は身代りの印として、久造には自分の冠つてゐた三度笠を渡し、自分は久造の菅笠をかぶ
り、江川の印のついた小田原提灯を渡して、新宿の追分から一行と別れてしまひました。

山崎が斯うして宰領をして来たのは、甲府の城下から然るべき要件があつて来たものに相違ない
が、内藤家の屋敷内に知る人があつて急に思ひ出した用事から、それへ廻るといふのは實は嘘で、
山崎には此の新宿に、ちよつとした馴染の女があつた爲、こゝへ来て、つい其れに會つて行きた
くなつたものらしい。

處が、この夜に限つて大きな間違ひが出来てしまつたのは、その身代りの宰領が、四ッ谷の大木
戸へかゝつた時分に、何者とも知れず闇の中から躍り出でたものがあつて、矢庭に馬上の宰領を
切つて落しました。餘程腕の冴えてゐたものと見えて、一刀に切つて落された宰領は二言もな
く息が絶えてしまつたものです。人々があつと騒ぐ時には、もう曲者の姿は何れにも見えません
でした。非常な早業であり非常な手練であつたが、止めを刺す餘裕が無かつたものか、その必要
を認めなかつたものか切り捨てたまゝ姿を隠してしまひました。懐中の物を奪はうでもなし、荷
駄の品物に手をかけようでもありません。何の恨みあつて、この宰領を手にかけたものか、そ
の要領の程が誰にも合點が行きません。

馴染の女と話をしてゐた山崎は、無論、この事を知らう筈がありませんが、その噂は忽ちにし
て耳へ入りました。

「お代官の江川様へ行く馬方が大木戸で斬られた
それを聞くに山崎は着物を振つて立ち上りました」

「退いて呉れ、退いて呉れ、親類の者がやつて来たんだ、退いて呉れ」

一足飛びに大木戸まで来て人集りを突き退けて前へ出て、丁度検視の役人が取調べの眞最中へ臆面もなく面を突き出して、

「遅かった、遅かった、一足遅かったよ、濟まねえ事をした、お役人衆、これは拙者の連の者に相違ござらぬ、拙者が宰領で甲府の城内から、つい其れまでやつて来たのが、僅の行違ひでこんな事になりました、委細の申開きは拙者が致しますが、兎も角、この者の傷所を見せて下さい、どうも合點がいかねえのだ」

山崎は検視の役人に、簡単な挨拶をして、すつと宰領の死骸に近寄つて、提灯の火をつきつけて仔細に其の斬口を調べたものです。太股に一箇所と、肩から袈裟がけ、實に汚れた斬口です。

全く人違ひで斬られたものに相違ない。違はれた本人は氣の毒だが違へて斬つた者は、たしかに此れを山崎讓と信じて斬つたのに違ひない。

斯ういふことにかけては、山崎は、こゝに出張したお役目の役人よりは遙に觀察が鋭くなければならぬ筈です。そこで唯一の證據人であつた馬方を捉へて、其の前後の模様について訊問を試みました。

馬子の答うる處を綜合して見ると、第一その斬り手は大兵ではなかつた事、寧ろ小兵の男で覆面をしてゐた事、斬つた後に失策つた！といふやうな叫びを残して行つたこと、その聲は細い聲で

あつたといふやうな事、それ等の事が、ほんの取り留めのない参考になるだけで、なほ四邊を提灯の光で隈なく探して見たけれど、證據になるべきものは塵一つ落してはありません。

其の晩、江戸の西の郊外を只走りに走つてゐるのは宇津木兵馬であります。

兵馬の舉動は尋常ではありません。その髪は亂れてゐるし、その眼は血走つてゐるし、第一、何處まで走るつもりか、その見當さへついてゐないやうです。

道を誤れば、月の入るべき處もないといふ武藏野の西の汎まで走らねばならぬ。川越、入間川を経て、秩父根まで走らなければ道は窮するこなき武藏野の枯野の末です。

さある森の蔭に立つて兵馬は天を仰いで見ました。その宵はまた星もありません。このあたりに人家も見えません。たしかに道を過つたものと思ひました。よろ／＼と自分を支へる力を失うが如く大きな木の根に腰を卸ろして、ほつと深い息をついて俛首してしまひました。

兵馬は正しく道を過つたものです。その道は行けども涯しのない武藏野の道ではなく、自ら爲すべき事の道を過つたものと思はなければなりません。

四谷の大木戸で宰領を斬つたのは誰あらう、兵馬の仕業であります。それを山崎讓と見誤つて斬つたのがオソましい。兵馬には山崎讓を斬らねばならぬ何等の恨があるのではない。それは南條力に頼まれたからです。南條さても山崎に私の怨みがあるわけでも何んでもない。彼は大事を成すの邪魔物であると思へばこそ、兵馬の手を借りて片付けさせようとしたものです。それは勿論、

頼まれたりして承諾すべきことの限りではないのを、斯くも兵馬が引受けて手を下すやうになつたのは淺ましい事に女故です。南條力の主観や主張に共鳴して一臂の力を貸すといふことであれはまた名分もあるが、事實は、さう云つても女の爲であるのを争うことが出来ません。南條等の一味は、その以前から山崎が江戸へ出るさいふを探り知つて、其れを老女の家まで合圖をしました。その合圖によつて兵馬は大木戸あたりに待ち構へて遂に物の見事に馬上の者を斬り捨てたけれども、それが物の見事に間違ひであつたといふことを覺つたのは、誰よりも斬つた當人の兵馬が先です。隙があつても無くても山崎讓である。さう容易く斬れるとは思つてゐなかつたのに案外なのは其馬上の人です。ほこんど薬人形を斬るよりも容易く斬れてしまひました。たゞへ無意味にしる、山崎ならば斬つて斬り榮えもないではないが、馬に乗つて世渡りをして妻子を養つて行くだけの男を斬つた處で何になる。それ等の妻子や親族の者の歎きの程も思ひやられる。斯様な愚劣極まる殺生をする爲に劍を學んだ筈ではなかつた。いろ／＼我が心に辯解を試みて、人を斬ることは何でも無い。無用の人を斬る爲に夜な夜な辻斬をして歩く者さへある。間違つて人一匹殺めた事は物の數ではないのだ。兵馬は強ひて自分の心を落着けようとしたけれど、世の中に此の位、馬鹿々々しい人殺しは無いものと思はれてなりません。その馬鹿々々しい人殺しを甘んじて、やつて来た自分といふものゝ馬鹿さ加減こそ底が知れない。あゝ、さうして我ながら此處まで本心を失うたものか、それを思ひ來つて無念に堪へられないで兵馬は、

火のやうに燃え上る頭を抑へました。

斯うして兵馬が燃えさかる頭を抑へてゐる時に何處からともなく短笛の響が起りました。眼をあけて見ると、いつしか月が東の空に出てゐます。

人の姿は見えないが、笛を弄ぶ風流の人は、わざと月の上らないうちに武蔵野の外を吹きめぐらうとするものらしい。この短笛の音色が兵馬の頭燃に一陣の涼風を送らないといふ限りはありません。兵馬には、その人が何の心あつて何の曲を吹いて來るのたか其れはわかりませんが、その音は柔和にして濃やかな感情を含んでゐる、なだらかにして夢幻の境を辿るやうである。一轉するさ悲壯沈痛にして抑へがたき感慨が籠る。朦朧として春の宵の如き處から、寥々として秋の夜の月のやうに冴え渡つて行く。

餘音嫋々として其の一曲が吹き終つた時に、漸く人の足音と話し声の聲が聞え出しました。

「下總の小金ヶ原の一月寺といふのへ行つて御覽になると、今でもあの門前に石碑が立つてございませぬ、わたくしには讀めませんが、讀んだ人の話によりますよ、骨肉同胞たりと雖も、案内人無くして入ることを許さず」と刻んであるさうでございませぬ、一旦、あの寺へ入りました以上は父母兄弟でも、案内人に許されなければ面會が出来ないものとなつてゐるのでございませぬが、それが昔は「骨肉同胞たりと雖も、山門に入るを許さず」とあつたのださうでございませぬ、つまり昔の父母兄弟でありませうとも、案内人が有りませうとも、無かりませうとも、一旦、寺へ入つ

たものには面會を許さないさい。ふ宗門の掟なのでございませうです、それを近頃になつて白河樂翁さんいふお大名が、それでは、あんまり酷い、さいふので、案内人無くして入ることを許さずと止めさせたのたさうでございませう、此れは何方が宜しいでせうかね、宗門の方から申しますと「骨肉同胞たりと雖も、山門に入るを許さず」といふ卯の毛も入れない厳しい處に情があるんださうでございませう、また世間普通の人情から申しますと樂翁公のなされたやうに融通をつけるのが道理だと申すものもございませう、あなたは何方が宜いとお考へになりますか。」

兵馬が見ると、月を脊にして歩いて来る二個人影があります。前のは脊の低い網代笠を戴いた小坊主と覺しく、後ののは天蓋をかぶつて着物は普通の俗體をしてゐる男のやうです。

この二人がそこまで来た時に、お喋り坊主が遽に突立つてしまひました。

「もし、其處に何誰かおゐでになりますやうですが、何誰でございませう。」

斯う云つて見答めたのは無理もないと兵馬も思ひました。

行き暮れて、こんな處に、たゞ一人、物案じ顔に休んでゐるのを通りかゝつた者が見ればギョツとするのも無理はない。兵馬は、そこで取り敢ず返事をしました。

「御覽の通り、このあたりで少々道に迷ひました。」

「左様でございましたか。」

それでも小坊主は動いて來ませんでした。そして突立つたなりで暫く耳を傾けて、

「また、お若い方のやうでございませうな、何方へお出でにならうと仰有るのでございませう。」

「淺草の方へ出たいと思ひませう。」

「淺草へ、それは飛んだ方角違ひでございませう、と申上げた處で、私も實は淺草へ參る道は存じませんでございませうが、そちらへお出でになつては違ひませう、今、丁度、お月様が上つたやうでございませうから、そのお月様の上つた方へと歩いてお出でなさいませう、さう致しますと程なく人家がございませう、人家についてよくお聞きなさいませう、何でも、お月様のお上りになつた方へとお出でになれば間違ひはございませう。」

お喋り坊主は親切に斯う云つて、道案内をして聞かせましたけれど、やつぱり歩いては來ないで其處に突立つてゐませう。

「有難うございませう、それでは、あの月を目あてに尋ねて參りませう、して、この邊は何さいふ處でございませう。」

兵馬は立ち上りながら斯う云つて尋ねて見るとお喋り坊主が、

「何さいふ處でございませうか、私共にもわからないのでございませうが、つと參りますと染井から傳中の方へ出ますとございませう、尤も淺草へ參りますには染井傳中へ出ては損でございませうから、その邊に、つと左へ切れる道がございませうと存じます、それを尋ねてお出で遊ばすが宜しうございませう、多分巢鴨の庚申塚といふ處あたりへ出る道があるたらうと存じます。」

私共は御覽の通り眼が不自由なものでございませうから……」
 成程、さうも容子が訝しいと思つたら、盲人であつたか、道理こそ最前から口だけ親切で身體に氣を許さないのが判つた。そこで兵馬はお喋り坊主に會釋をしながら、その傍を通り抜けること、それを離るゝこと三間はかりの處に天蓋をかゝけて月を見てゐる人があります。
 多分、月を觀てゐるのたらうと兵馬は思ひながら、その人の側を、すつと摺り抜けて通りました。通り抜ける途端に風を切つて何物か落ちて來ると思つたから兵馬は、ひらりと身をかはしたけれど、口惜しいことに、かはしきれませんでした。右の肩を打たれようとしたのを肩を開いた爲に、それが落ちて來て刀の柄に乗せてゐた手の甲を江つて、右の小指を發止と打ち砕きました。

「痛……」

兵馬は道の側へ飛び退いて身構へて見れば、月をながめて突立つてゐた天蓋の人が、手に持つてゐた尺八を振り上げて、通り抜ける兵馬を音もなく打ち込んで來たものです。

稀代の亂暴かなと思ひました。よし、それが及でなくて尺八であつたとは云ひながら、これ抜打の汁斬と相えらはぬ仕方です。この上もなき無禮、この上もなき狼藉です。この場合でなかつたら兵馬と雖も、その分には済まされぬ處を兵馬は極へました。砕かれた小指を握りながら、月に立つてゐる天蓋の怪しの男の姿をながめながら兵馬は取り合はずに別れて行きました。

指の痛みを堪忍して、宇津木兵馬は其の傷を立ち去りましたけれども、彼の天蓋の怪しい男を單

純な亂暴人とのみ見るわけには行きません。況んや狂人の振舞ではありません。

相手の右へ向つて摺り抜けるといふことが作法の上から間違つてゐて、それが爲に彼の怒りを買つたものご見れば過ちは、やはり自分にある。そこで兵馬は多少悔ゆるの心を起すと共に、心外なのは此の指の痛みです。かりそめに振り上げた尺八の爲に、兎も角もこれだけの傷を負はせられたことは自分の不覺である。と同時に、さう考へても相手の腕の骨を認めないわけには行かない事です。そこで兵馬は彼の天蓋の男が只者でないといふことを考へました。たゞ其れだけの考へなければ、混亂した頭腦の爲に、空想は有らぬ方へ持つて行かれてしまひます。

兵馬は最初から吉原へ飛ぶつもりでゐました。今となつては其れが餘りに恥しくて堪まらぬ事です。さうかと思つて、本所の相生町の老女の家へ歸つて誰に面を合せよう。

五

神尾主膳は眉間に怪我した爲に病床に呻つて寢てゐます。

ナゼか、主膳は醫者を呼ぶことを嫌ひます。これほどの怪我をして呻りながら、ついに一言醫者といふことを云ひません。醫者を迎へようといふ者があれば嚴しく其れを叱りつけて、寄つて集つてする手療治に任せてゐるのは一方から云へば此の男の剛情我慢で、一方から云へば己れの屋敷へ他人の出入を許さぬ内部の弱味かも知れません。

呻り通しに呻つて其の合間に、

「坊主を呼べ、あのお喋り坊主は頼にさはる小坊主だ、戸惑ひをした賣卜者のやうな夜迷言を喋べるのが疳に觸つて堪らん、あれを此處へ伴れて来て、眼の前で締め殺して呉れ、斯うして寝てゐても、彼奴の姿が目觸りになり、彼奴の言草が耳觸りになつて堪らん」

主膳は嚙んで吐き出すやうに斯う云つて罵ります。

「大將、あの小坊主は井戸へ落こつてお陀佛ですぜ、死んでしまひましたぜ」

福村が、云ひくるめ様とする主膳は承知しません。

「なあに、死んでしまうものか、彼奴は生きて土藏の中に助けられてゐるのだ、誰か、あの小坊主を此處へつれて来て、拙者の眼の前で締め殺して呉れ、それでない拙者の怪我は癒らん」

福村は、當惑しながら、

「冗戯じや無え、坊主は、疾うに井戸の底に往生してゐるんだ、小坊主の死靈に惱まされるなんて大將にも似合ねえ」

それでも主膳は承知しません。何處までも小坊主が助けられて土藏の中にある者と思ひ込んで、彼を其處へ引いて来て締め殺せくそ繰り返すその有様は、あの小坊主の生命を眼の前で斷たなければ自分の命が危ないものと思ひ込んでゐるやうです。持て餘した看護の連中とても、敢て辨信を憐んで主膳の前を云ひこゝらへるのではないから、遂に主膳のむづかりに我慢がしきれなくな

つて、

「さうだ、大將がすっかり感づいてゐるんだから、坊主を一つ此處へ引張つて来ようぢやねえか」と云つて、土藏は此方の鬼門だからあの中へ引取られた上は、おいそれは渡してよこすまいが、何さか口實をこしらへて引取つて来ようぢやねえか、さうもしなければやこでも看病人が遣り切れねえ」

遂に彼等は相談して土藏へ、小坊主引取り方を交渉に出かけることになりました。福村が先きに立つて御家人崩れが都合三人で其の晩土藏の前までやつて来たが、彼等にも、この土藏の中が氣味が悪い。美しい腰元のお化が怖いのではなく、現に此の中に籠つてゐる幾つかの怪物は同じ尾敷中にあつても、彼等に取つては治外法權の怪物であります。

土藏の前まで来るには来たが、彼等は急には訪れようとはしないで、先づ此方に立つて中の容子をうかがつて居りましたけれど、中には物音が一つするではありません。四方も眞暗で土藏の二階の金網の窓から燈火の光が青く洩れてゐるばかりです。

そのうちに土藏の戸がガタピシと開いて中から人が現はれました。容子を見てゐた連中は物陰に隠れてゐると、中から現はれたのは先づ盲法師の辨信です。今宵は笠もかぶらず例の法然頭を振り立て、出て来ました。たゞをかしいのは、手に九曜巴の紋のついた可なり古びた提灯を點して持つて出たことです。それが倉から出て戸前を二三歩あるくとき、そのあさから出て来たのは龍之

助です。これは頭巾を被つて兩刀を帯びて竹の杖を持つてゐました。

龍之助が出るさ倉の戸前を引き立て、しまつたから、多分、今宵も倉の中ではお銀様一人が留守居をするのでせう。さうして出かけた二人は今宵は尺八を持つてゐないのだから、彼等は別に目的があつて出歩くものに違ひありません。たゞ、わからないのは其の提灯です。持つて前に立つ人も盲目です、あそこについて便りにする人も亦盲目です。盲目が盲目の手引をするのに持つ人も持たれる提灯も變なものです。それさ板倉家の定紋である九曜巴を辨信が提げ出したことも何の意味たかよく判りません。

「エ、その邊に何誰かおゐでになりますな、何誰でございます」

辨信は此の時、例によつて聞き耳を立てました。その實誰も言葉をかけた者も無ければ、物音を立てた者もありません。辨信は杖を取り直して提灯を持ち換へながら誰かに向つて、こんな事を呼びかけて立ち止まり、

「ちよつとお断りを申上げて置きます、わたくしはこれから本所まで行つて参りたいものたご存じます、あれから暫く御無沙汰を致しました法恩寺の長屋へ参りまして、皆様に御挨拶を申上げて來たいと存じまして、これから出かける處でございます、長屋の衆は、定めて、わたくしがあれから一度も便りを致しませんものでございますから、死んだ者と思つてゐることでございませう、かねて、わたくしは左様に申し残して置いたのでございます、斯ういふ身の上でございま

すから、何時さうして、どんな處で間違が起るか知れませんが、若し、二日も三日も、わたくしが歸りませんでしたら、死んだものとお諦め下さいまし、決して、お忙しい處をお探し下さるやうな御心配をなすつて載いては困ります、さ、斯う申して置いたものでございますから、多分、長屋の衆も、辨信は死んだものと思つておゐでなさるたらうと思ひます、それでも、斯うして無事であるのでございますから、一應は御挨拶に上らねばならぬと思つて居りましたけれど、こちら様で御懇意になつたお方の不思議の御縁に引かされて今日まで斯うして御厄介になつて居りました、今日から以後も、事によるさ、また長く御厄介になりになるやうになるかも知れませんが、法恩寺の方を引き拂つて、こちら様へ御厄介になるやうな事になりますれば、またお屋敷の皆々様にも改めて、御挨拶を申上げおわびも申上げたいと存じて居ります、それで今晩は、これから本所まで、こつ／＼と歩いて行きたいと存じます、幸ひ、此方様が、やはり本所の彌勒寺長屋までお出でになる御用がお有りなさるさ斯う仰有るものでございますから、お連を願ひましたのでございます、今晩は二人共に、あちらへ泊りまして、歸りも成るべくは御一緒に願ひたいと存じます、多分さう参りますまいかこのお話でございます、わたくしだけは明晩は必ず此方様へ歸つて参りまして改めて御挨拶を申上げるつもりでございますから、さうぞ御無禮をお許し下さいまし、え、この提灯でございますか、成程、盲目が提灯を持つては物笑ひと思召すでございませうが、何の意味もあるのじやございません、わたくし共の爲に提灯を點けて歩くのではござい

ません、彼方から行らつしやる方が、突き當るごお困りになさるたらうと思ひまして、これを持
つて参ります、御新造様がお倉の中からこれを探して、わたくしに持たせて下さいました」

例によつて盲目法師の辨信は誰に問はれもしないのに、ペラ／＼とこんな事を喋りました。

二人の盲人は斯うして徐々／＼と屋敷を出て行きました。

福村をはじめ御家人崩れの連中は、それを見ながら如何することも出来ません。

二人の行かうとする目あては、多分只今辨信が名乗つた通りであらうけれど、その歩み行く道筋
の光景は更にわかりません。武蔵野の盡くる處には林もあり森もあり畑もあり、江戸の郊外が初
まらうとする處には屋敷もあり人家もあり火の見の半鐘もあらうといふものだが、二人はたゞ黒
暗々の闇を歩いて行つただけです。お喋りの辨信も、さうしたものか、あれつきり沈黙してしまひ
ました。

染井から本所へ行かうとするのは、この二人に取つては可なりの夜道です。若し、氣永に歩いて
行つたら夜が明けるかも知れません。急いで行つた處で此の二人は、とても近道を取るまいふわ
けには行きませぬ。あぶなければ途中で駕籠でも雇ふまでの事です。

巢鴨の庚申塚あたりへ来たと思はれ、急に人聲が喋がしくなりました。庚申塚へ廻るのは少し
廻り道過ぎると思はれるけれども、化物屋敷の連中は、江戸の市中へ出るのに好んで、あちらの
方を廻りたがります。二人も亦期せずして、そちらへ廻つたけれども、そのあたりは、いつも闇々

たる廣野の心持のする處です。然るに、今宵は、その邊で人聲が喋がしい。

斯ういふ時に、辨信法師は何事を措いてもヒタヒタと歩みをこめて、仔細らしく小首を傾けて、そ
の物音の因つて起る處を、ぢつと聞き定めようとするのが其の例です。今も亦、その例に洩る、
とこがありません。

「大層、騒がしいやうでございますね」

と云つて立留まりました。その聲は往來で起るものではありません。往來を少し引込んだ處の原の
中で起る騒々しい聲であります。

「喧嘩でも初まつたのかな」

と龍之助が云ひました。

「エ、さうも穩かでない騒ぎ方でございます、多分、喧嘩が初まつたのでございませうと思ひ
ます、そこへ、仲裁の人が出て、あゝのかうのさ云つて騒いでゐるらしいでございます」

そこで辨信は、また静かに歩き出しました。聲の因つて起る處をたしかめて置き、その道二人は、
その方向へ行かねはならないのです。人の喋る聲は、いよく／＼近くなりました。その數多の人が
騒ぎ囂る中に泣く聲が聞えます。そこで、辨信は再び立ち留まりました。

「エ、エ、あの中で泣いてゐるのは、あれは女の聲でございます、大勢の者に圍まれて女
が泣いてゐるのでございませぬ」

成程、辨信の鋭敏な耳を待つまでもなく、人の騒ぎ罵る中で、絶え入るばかり、悲鳴を揚げてゐるのは正しく女の聲であります。

「皆さん、それほどまでに恥をか、せないで寧ろ一思ひに殺してしまつて下さい、私共が悪うございまして、殺されても決して皆様をお恨み申しは致しませんから、さうぞ、一思ひに二人を殺してしまつて下さい、それほど恥をか、せないで殺してしまつて下さい」

ひい／＼泣いてゐるのは女の聲であつたけれど、斯う云つて敢願してゐるのは男の聲です。

「見せしめの爲だから斯うしてやるのだ、俺達を恨んじやならねえぞ」

これは、いきり立つた大勢の中から起る聲です。辨信ならずとも、感づくことでありませう。路傍の原つはで、大勢の者が、男女二人を捉へて何かの制裁を加へてゐる處です、女が、たゞ泣いてゐる、男が只管にあやまつてゐる、大勢が見せしめの爲たさいふことを聞けば、それも直に合點の行かねはならぬことで、こゝに二人の男女が道ならぬ行ひをして大勢の爲に極端な私刑を加へられようとしてゐる處に紛れもありません。

「もし、皆さん、少々お待ち下さいまし、さういふ譯か存じませぬが、わたくしは通りかゝつた盲目の者でございます」

お喋り坊主の辨信は、さうしても持つて生れたお節介をやめる事は出来ないものと見えます。そこで九曜巴の提灯を振りかざして大勢の中へ飛び込んだものです。

けれども、それは受入れらるべくもありません。この制裁は單純なる意味の喧嘩や口論とは違つて、これは土地の風儀で、重なる人が先に立つてやらないまでも、その爲すことを默許しなければならぬ制裁ですから、立つて見てゐる者のうちにも、必ずや可哀相だと思ふ人も一人や二人ではあるまいけれど、それを、如何とも口出しの出来ない性質のものでした。たゞへ、役人達が通りかゝつても、それと聞いては見て見ぬふりをするより外はない種類の制裁に屬するものでありました。

云ふまでもなく不義をした男女です。男には女房があるか無いか知れないが、女には確かに夫のある身です。その道ならぬ戀を重ねて露はれた時に加へらるゝ制裁は、時により處によつては、非常な慘酷な私刑となつて現はれて來ることがあります。二人は、その哀れむべき憎むべき犠牲であつて見れば、この場合に辨信風情が取りついたので詮方のないものであります。

「可けません、可けません、お前さん、こんな處へ來る者ではありません」

「温和しい年寄株の者が辨信を抑へました。」「ですけれども、可哀相でございます、大勢して二人の者をお苛めなさるのは可哀相でございますから、何とかして上げたいものでございます、當人があの通り、わたし共が悪いから殺して下さいと、あやまつてゐるではございませんか、あやまつてゐる者を殺したつて仕方がないではございませんか」

辨信は提灯を振りかざしながら、頻りに其の人に縋りついて、もがきました。

「お前さんには判らない、あゝして遣らなければ皆んなの爲にならないのです、だから誰もお詫をしてやらうといふものは一人もないのだ、それで可いのだから、引込んでおめでなさい」さう云つて濃厚なのは離れて辨信を和めてゐるが、血氣なのは男女を取つて押へて、その見せしめの爲さいふ恥しめを興へんさしてゐますが、盲目である辨信には、その振舞がわかりません。併し乍ら暗い中の一方には焚火がしてあつて、その明りで見ると、光景は狼藉にして酸鼻を極めたものさ云ふべきです。

男女二人を此の原まで誘き出して来て、泣いて拒むのを無理矢理に一絲もつけぬ素裸に剥いてしまつたものか、これから剝かうとするものかして、揉み合つてゐる處です。遠く圍んでゐる見物の者は、息を凝らして其の體をながめて一語を出す者もありません。

この上に、血氣の連中が、男女二人の肉體に向つて有らん限りの侮辱を加へようとするものらしい。すでに加へてゐるのかも知れない。男には堪へられる侮辱も女には堪へられない。寧ろ、殺された方が遙かに優る辱かしめの爲めに女が身を悶えて泣いてゐるのが、辨信にもよくわかります。

兎も角も殺すことは憚りがあるから、彼等の制裁は其處までは行くまいが、常人達は、さうされるよりは殺されることを心から訴へて號泣してゐます。

見物してゐる者の中には女性もありました。見てゐられないで面を蔽うて逃げ出す者もありました。併し乍ら、その爲に、たゞへ、一言でも取なしを云はうとする者はありません。慘として一語もなくその成行を氣遣つて泣くものさへありません。泣いて同情を現はす事が自分の弱身になることを怖れたのでせう。

「あたいのお母ちゃんが殺されるよう」

誰も彼も慘として一語なき處に、咽喉も裂けるはかりに號泣して此の場へ驅けつけて来たのは、またいたいな子供です。

憐れむべきは其の子供です。多くの人が鳴をひそめて見物してゐるうちに其の子供だけが母なる人の命を助けられんとして、號泣して飛び廻るけれど、誰あつて、この子供の訴へを聞いてやるものはありません。誰に取りついても、皆んな突き放してしまひます。突き放さないものは、何ぞ云つて慰めてやつていゝか、その言葉に苦しんで横を向いてしまひます。

「母ちゃんを殺しちや忌やよう」

七歳か八歳になるほどの女の子です。遂に龍之助の袂を縋りつきました。

「叔父さん、お母さんを助けて上げて下さい、刀を差してゐる人は弱い者を助けて上げて下さい、でせう、ね、をぢさん」

女の子は龍之助の刀に取りついて、わあ／＼と泣きます。何處へ行つても突き放された子供は、

最早、その人を使ふことなしに手に觸つた腰の物を頼むものらしい」

「あれはお前の母親か」

龍之助は斯う云つて尋ねました。

「をぢさん、あれは、あたしの母ちやんです、皆んなの人があゝして苛めます、あたしは、母ちやんが何を悪い事をしたか知らないけれど、皆んなして、あゝして酷い目に逢はせるんですもの、誰も、母ちやんを助けて呉れる人は一人もありません」

女の子が必死に縋りつくの龍之助も御多分に洩れず、冷やかに突き放しました。

「お前のお父さんを連れて来て助けてもらへ」

女の子は頭を振りました。

「お父さんは駄目です、お父さんは助けて呉れません、お父さんが助けて呉れないだけなら可いけれど、そのお父さんが先に立つて、あゝして母さんを苛めてゐるのですもの」

「エ、お前のお父さんが先に立つて」

「え、お父さんだつて、そんなに母さんが憎いのじゃないでせうけれど、あゝして、先に立つて、母さんのお仕置をしなれりやならないんですつて、だから誰だつて、母ちやんを助けて呉れる人はありません、をぢさん、ごうぞ、頼みます、もう、母ちやんに悪いことをさせませんから、今日は、これで許して上げて下さいまし、ごうぞ、頼みます、をぢさん」

斯う云つて女の子が杖さも柱さも龍之助一人に縋りつく時に、一方盲法師の辨信は、いよく群集の中へ深入りしてしまひました。

「皆さん、人の罪を責めるのは結構な事でございますけれども、それよりも結構なのは人の罪をゆるして上げることでございます、責められて恨む者はございまして、ゆるされて有難いと思はぬものはございませぬ、さなたも人間でございまして、あやまちの無いといふ限りはございませぬ、人のあやまちは七度ゆるして上げて下さいまし、ゆるし難いあやまちでも許して上げるのが功德でございます、悪木の梢にも情の露は宿るさ申しまして、許し難いものを許して上げるのほご功德が大きいのでございます、さうか、皆様、こゝで神様のお心になつて下さいまし、佛様のお心になつて下さいまし」

こちらから見てゐると、辨信の差し上げてゐる提灯だけが人波に揉まれて左右に揺れます、丁度擔ぎ上げられた樽御輿が擔がれたまゝで自由になつてゐるやうに、真闇な人波にうごめく中で提灯のみが宙に浮いてゐるやうです。

その時に、群集の焦點から、また一つの騒ぎが起りました。それと共に大波の崩れたやうに人集りが四方へ溢れ出しました。

「御亭主殿が氣狂ひになつた、御亭主殿が氣狂ひになつて脇差を抜いて荒れ出した、誰彼の見さかひなく人を斬りはじめた、危ない、逃げる！」

原つはに集まつた幾百の人波が、眞暗な中を右往左往に逃げ惑ひます。成程、その通りでせう、群衆の逃げ惑ふ眞中に、髪は女童こどもになつて、片肌脱いた男が一人、一尺八寸ほどの脇差を振りかざして驚るを幸に切つて廻つてゐる處は、佐野次郎左衛門の荒れ出したやうな有様です。

思ふに、此の男は、不義をした女の御亭主なのでせう、あまりの事に逆上して、かつさ氣が狂うて此の體からだたらくと見えます。

驚いて押へようとした者は、皆んな斬られたやうです。逃げ迷うて轉んだ者も、浅かれ深かれ一太刀づゝは浴びせられてゐるやうです。これによつて見るに相應に手は利いてゐるのかも知れませんが、手の利いてゐないまでも、氣狂ひになるほどの逆上に及物を持たせたのだから、無人の境を行くが如くに群衆の中を荒れ狂う勢は手をつけられないものらしい。

たゞ九曜巴くわうばの提灯だけが一つ、相變らず宙に浮いて右へ揺れたり左へ揺れたりしてゐる處を見れば、辨信だけはまた斬られてはゐない容ようです。生きてゐる間は、持つて生れたお喋りが止みさうにも思はれません。

「そうれ御覽なさい、何か大變が出来ましたでせう、いくら罪ある者にしました處で、それを責める事が、あんまりキツイと、きつと咎とががあります、許して上げれば、その徳が、いつかは此方へ向つて歸りますけれども、あんまりキツイことをなさるご恨みが皆んな此方へかゝるものでこ

さいます 何か大變が出来ましたやうですね、何でございませう、エ、本當の御亭主さんが氣狂ひになりましたんですつて、さうでございませう、さう云ふ事にならなければ宜いと思ひました、敵も味方も見さかひなく斬りかけておゐでなさるんですつて、それく、さういふ事になつてしまふのでございませう、悲しいことですね、何でも最初に許しておしまひになれば、そんな事にはならないのでございませう、許して上げないから、こんな悲しいことが出来ました」

辨信は逃げ惑ふ人に押し返されながら提灯を振り立て、こんな事を云ひましたけれども、誰ぞに耳に入れるものはありません、また成程と感心して、それを聞いてゐるやうな場合でもありません。

兎耳うみみを振りかざした氣狂ひは、もう其の背後まで迫つて怒號してゐます。

「おれの女房は美しい女だ、美しい女だから、おれも好きで女房に貰つたんだ、おれが好きで貰つた女房を誰が何と云ふんだ、おれが美しい女を見る位のもは、他の男が見たつて美しい女だ、だからさうしたと云ふんだ、おれが惚れる位の女に、他の男が惚れるのは當り前だ、それが如何したと云ふんだ、判らねえ奴等じやねえか、それほご女房が大事なら箱へ入れて藏つて置くが、いや、箱へ入れたつて蟲がつくさういふ事があるじやねえか、自分の女房に蟲が附いたからつて土用干も出来ねえじやねえか、奴等あ、皆んな嫉ねたんでさういふ事をするんだな、おれが美しい女房を持つてゐるものだから、それをけなれがつて、寄つて集つて、あんまり苛こえ事をしやがら、だから承知

が出来ねえ、さあ、矢でも鐵砲でも持つて来い、これからはおれが相手だ、おれの女房に指一本たつて差させるものか、さあ来い」

自分も血塗れになつて、血に染まつた白刃を振りかざして、前後の辻褃の合はない啖呵をきつて息せきながら辨信の背後まで迫つて来ました。盲法師の提灯が危ない、提灯を斬られた切先で其の頭が危ない、頭を斬られ、命が危ない。さすがの辨信も狼狽して逃げ惑ひました。

今、打ち下ろした刃は辨信の持つてゐた九曜巴の提灯をバツと斬り落したらしい。辨信はアツと云つて倒れたから、それで第二の刃をのがれる事が出来ました。

あさは、眞暗闇の廣つはを、その狂人が躍り上り躍り上つて狂ひ走ります。

その時に狂人の刃の下に取り纏つたものがあります。それは八歳になる女の子でありました。

「お父さん、危ない」

龍之助の耳には、たゞ其の騒がしい物音を聞くのみです。

遅りも知れぬ廣い原に、野火が燃え出して右往左往に人が逃げ走る光景を想像するだけであります。

疾風に煽られた野火のやうな勢で、觸るものをめら／＼と舐て行く一個の狂人を想ひ浮べるのみであります。

その狂人が、斯うも突發的に狂ひ出した原因は、略わかりました。その狂人の如何なる種類の男

に屬するかといふことは、想像があるのみです。

その時に現れた狂人の面影は、大和の國の三輪の藍玉屋の伴の金藏といふもの、其れにそっくりです。その伴は三輪大明神の社家、植田丹後守の屋敷に預けられてゐたお豊に命がけて懸想した男であります。その執念深い戀が、遂には物になつて、お豊をつれて紀伊の國の龍神へ行つて温泉宿の亭主となつた其の男であります。その宿から火が出て龍神の村を焼いた時に、龍之助は其の男を何の苦もなく日高川の水上へ斬つて落しました。その後、お豊の話によると、金藏は嫉妬故に狂ひ出したものたさうです。お豊さ、或る前髪の若いさむらひとの間を疑つて、それから狂ひ出したといふことでもあります。取るに足らぬ男ではあつたけれども、その執念の深いことは怖るべきものでした。垣根を忍び越えようとして龍之助の爲に泥田へ投げ込まれた恨も、植田丹後守が自分を遠ざけるが爲に、お豊をかくまつた事も、悉く、彼に取つては恨みの種でありました。遂には鐵砲を持出して、お豊以外の邪魔物をすべて撃ち殺さうとして失敗つた程の執念でありました。彈藥を明神の杉の木に埋めて、之を植田丹後守に見つかつて、それが爲に處に居られなくなつたけれども戀を捨てる事が出来ません。いろ／＼に浮身をやつして遂にお豊の心を靡かせてしまひました。心は靡かないにしても女をわが物とする事が出来ました。其時の事を、龍之助はよく見て知つてゐたものです。知つてそのまゝに、十津川の旗上に加はりました。

今や、その男の執念がこゝにめぐつて来たものと見えます。龍之助の眼にうつるのは髪をふり亂

した藍玉屋の金藏であります。斬られつ追はれつしてゐるのは曾て三輪の社頭で見た、その時のすべての人々であります。藍玉屋の親爺もあれは藥屋の夫婦のものもあります。植田丹後守に召使はれた男や女達、それに、はじめて三輪へ、たどりついた時に將棋をさして無駄口を叩いてゐたすべての面が、いづれも面の色を變へて逃げ惑うてゐる光景が歴々々現はれます。阿修羅のやうに荒れ出した金藏が血刀を振りかざして、遙の彼方の野原から此方をのぞんで走つて来る光景が歴々々見えます。

「お父さん、助けて下さい——」

女の子の聲が金を斬るやうに龍之助の耳下に響く途端に、龍之助の横髪を掠めてヒヤリと落ちて来た狂人の刀。小癩も云はずに右手を伸べた龍之助は、狂人の脇差の柄を握つて、邪慳にそれを引奪くると、高く振り上げて、水を掻くやうに無難作に振り下す。左の肩から垂直に胸の下まで斬り下げました。日高川の上で金藏を斬つて捨てたのが、やつぱりこの手でした。

「苦——」

狂人は二言もなく其處へのめつてしまひました。

四方の原は大風の吹き荒した後のやうに静かなものです。

燃えさかつてゐた野火も消えてしまひ、それを消さうと騒ぎ廻つた人も在らず、霧々たる廣野の淋しさを感じた時に、ふと氣がつかしました。

斬つたのは金藏ではないが、その女は、若しやお豊さは云はないか。

辱かしめられたる不貞の女を憎み、憎む女の肉を食ひ骨を削りたくなるのは、彼の膏育の入れる病根であるかも知れない。龍之助は、金藏を斬つた此の刃で、その女を併せて殺したくなりました。彼の右の手には、悪血がむづ痒いほさに湧き上がつて来る。よし、その女が生きてゐようとも、すでに殺されてゐようとも、飽くまで此の刃を其の女の豐満した肉に突き立て、その血を啜らなければ飽かぬ思ひが、ぞく／＼と全身にこみ上げて來ました。

龍之助が、男から奪ひ取つたその脇差を離さないのは此の故です。この廣野原のいづれかを尋ねたならば、必ず其の女の肉體がころがつてゐるに相違ない。求めて其の肉を食はなければ、渾身に漲る悪血を如何することも出来ない。

それにしても盲法師の辨信は如何したらう。提灯が消えてしまつたからさて、無事であるならば、あのお喋り好きが、何か文句を云ひ出さない限りはないのに、それが一言も云はないのは可哀相に、是も狂人の刃にかゝつて敢なき最期を遂げたのか、原をうづめてゐた無数の人集りは如何したものか。狂人の勢に怖れをなして一旦は逃げ散つても、また盛返して取押へに來なければならぬ筈であるのに、四邊に人の近づく氣配はない。

森閑として物淋しさが身に沁みると、夢ではないかと思ひます。夢でなければ狐につまゝれたものでせう。巢鴨の庚申塚あたりには悪い狐が出没する、この場の座興に同勢を狩催して、二人の

盲人をからかつて見たものかも知れない。

その時遠音に聞えたのは鶏の鳴音です。その鶏は宵鳴をしたものやら時を告げたものやら一向要領を得ない鳴音でありました。

續いてベウ／＼と犬の吠えるのが、また宵の口であるか、たゞしは深夜の物に驚かされたのか、それもハツキリと判りません。

會て、十津川の奥から龍神村へ逃げ込んだ時に頻りに犬が吠えました。龍神八處の犬が、悉く天に向つて吠えるのを聞いた時には、さすがに物すごいと思ひました。今、吠えてゐる犬は、まさしく其の時の犬であります。机龍之助は再び紀伊の國の龍神村の人となつたのであらう。

空をながめる事が出来たなら、その天には清姫の帯が流れてゐたかも知れない。天に清姫の帯が流れる時、地にそれをながめた人に祟りがある。こいふことを後にお豊の口から聞きました。

恍惚として立つてゐる龍之助の周圍は、さうしても紀伊の國、龍神村の山の奥であります。

金藏は斬つて落したけれども、その相手のお豊は何處にゐる。

「もし、あなた、罪のない人を殺しては可けません、わたしを殺して下さいまし、わたしが悪いのですから、わたしだけを殺して、他の人を助けて下さいまし、わたしはお前さんに殺され、は本望でございます」

そこへ縋りついたのはお豊ではありません。名も知らぬ女です。聲にも聞き覚えのない女であ

ます。

女も亦、縋りついて其の人が動かない人でありましたから驚きました。

「あ、違ひました」

離れようとしたが離れられません。動かない人の手が早くも蛇のやうに、からみついて居りました。

「あなた様は、さなただでございます、あの人はさちらへ参りました、さうぞ、お放し下さいまし、わたくしは、あの人に殺されなければならぬ女でございます、さうぞ、お放し下さい」

閃爍いたけれども、離れることは出来ません。

あちらの原つはの方角で辨信法師が、お喋りをはじめたのは此の時分でありました。

「大變な事になつてしまひました、一時、わたくしも氣が遠くなつてしまひました、おや、提灯の火も消えてゐますね、それでも御安心下さいまし、わたくしの身體は無事でございます、倒れた拍子に頭を打つたものですから、んんの一時、氣が遠くなつたゞけの事でございます、もう、何ともございませぬから御安心下さいまし、それにしても、あの發狂者は、さうなされた、本當にお氣の毒なのはあの方でございますが、これも前世の宿業の致す處でございます、お諦め下さいまし、怪我をしたくもないし、おさせ申したくもないものでございます、女の方は、さうなさいました、逃けておしまひなさいましたかな、それとも眞先に斬られておしまひなさいました

かな、それにつけても女さいふものは罪の深いものでございますな、女一人故にどの位多くの人に間違ひが出来るか知れたものではございません、でございますから、お釋迦様も女は怖ろしいものじやと仰せられました、また女は救はれないものじやと仰せられました」

斯う云つて、漸く起き上つて來ました。轉んでも只は起きないで喋りながら起きて來ました。序に、地に落ちて消えた提灯を手さぐりにして拾つて起き上りました。

「おや、それにしても、あんまり静かでございますね、お怪我をなすつた方も随分お有りなさる筈なのに、この近所には、あなたもおゐでなりません、皆さん歩いてお歸りになつたのですか、たつた今、あれほどの騒ぎがありました處にしては、あんまり静か過ぎますやうでございます、まさか、夢ではございませんまいね、夢であらう筈はございませぬ、それならば、若しや、あの狐につま、れたと申すものではございませぬか、お、それ、わたくしにはお連があらりました、わたくしは其の事を忘れて居りました、お連の先生は、さうなさいましたでせう、あの先生の事だから、お怪我をなさるやうな事はございませぬが、わたくしの事を御心配になつておゐでになるかも知れません、大きな聲でお呼び申して見ませうかしら、それともまた此處で大きな聲を出して悪いやうな事はございませぬか知ら」

辨信は塵打ち拂ひながら例によつて、暫らく小首を傾けてゐるゝ其の鋭敏な耳に女の聲が聞える。

「さうぞ此處をお離し下さいまし、人違ひで失禮を致しました……苦しうございます」

それを聞くゝ、辨信は聲のした方へ頭をクルリと振向けました。

「さうぞお放し下さいまし、わたしは苦しうございます……」

女は何者にか捉はれの手を逃れようとして苦しみ呻いてゐる。半は蛇に吞まれて、半身だけが地上にのた打ち廻つて苦しむやうな熱苦しい、さろくした呻きの聲であります。

それを篤き聞き定めた辨信は、消えた提灯を片手に飛鳥の如く走り出しました。不思議と何者にも躓つくことなく、聲のした處へ一足飛びに走つて來て、

「もし、先生、そこにおゐでになりましたか、女のお方も、そこにおゐでなさいませぬ、何にしろもお怪我が無くて宜しうございました、けれども、あの足音をお聞きなさい、あの人の聲をお聞きなさい、大勢の人がまた尋ねに參ります、今度、連れて行かれたら、もう助かりませぬ、早くお逃げなさい、先生、わたくしの事は御心配にはなりません様、おなた様は早く、其女のお方を連れてお逃げ下さいまし、先生がお逃げにならなければ危なうございます、早く此處をお逃げなさいまし、あの通り人の足音と聲とが近寄つて參りました、お聞きなさいまし」

十六

辨信から逃けるさ云はれた事が龍之助に取つて思ひ設けぬ暗示となりました。女も亦、さう云はれて、一にも二にも此の人を頼る氣になつたらしい。

頼つて見るその人は意外にも盲目の人でありました。強いと思つた人は人並より弱身を備へた人であつた事を知つた時に、女は其の恐怖から解放された心持になりました。この人は怖るべき人ではなく憐れむべき人である。

女の心が男に向う時、その男が己れを托するに足りるほかに強い男であることを知つた時には信頼となり、或は戀愛に變ずることもあります。それと違つて、男が弱くして、自分がそれを世話をしてやるさいふ立場に立つた時は、女はまた其の女らしい自負心が芽を出して、男を愛慕する心も起るものであります。

この不思議な遭逢の二人の男女は、どちらが頼り、どちらが頼られるとも知らずに、その場を落ち伸びました。けれども、道案内は正しく女のした事で、龍之助は萬事を其の女の導くまゝに任せただけでせう。斯くて、板橋の宿の、さある旅籠屋にたどりついて、其處で一夜の泊りを求めることになりました。

多少の疲労をそれから、この頃としては久しぶりで人を斬つた龍之助は、女がまた起きてゐるうちに、すやくと夢に入つてしまひました。

いつしか、自分は、振り別けの荷物を揺りかたけて東海道を上つて行つた時の旅の姿になつてゐる。處は鈴鹿峠の下あたりで、その前を一挺の早駕籠が威勢よく駆けて通る。

何にしても夥しい急ぎ方だと思ひました。

「その駕籠は何處へ行くのだ」

尋ねて見たけれど、駕籠屋は振り返つても見ません。

併し乍ら、さうも見たやうな駕籠である。龍之助は駕籠に引添うて走りはじめました。間もなく駕籠は或る家の軒下へ立ちました。そこは、ちよつとした宿場外れの、木賃宿とも思はれるほどの宿屋の軒であります。

これも見たことのあるやうな行燈がかつて筆太に「若葉屋」と記して、側面には二行に「千客萬來」と認めてあるのを明かに讀むことが出来るのであります。

駕籠は、その掛行燈の下に据ゑつけられると共に駕籠屋共は、いづれへ行つてしまつたか影も形も見えません。

龍之助は是非なく、その宿屋の雨戸をハタ／＼と叩きました。行燈は、またまはゆいほかに點けて置くのに、雨戸は、もう一寸の隙間もなく締めきつて、叩いて見ても、返事もありません。

「お連さんは」

當惑して立ちつくしてゐるこゝや、暫らくすると、中から聲がありました。

「連は女だ」

と龍之助は答へました。

「どうぞ、お通り下さいませ、お待ち申して居りました」

雨戸の樞を外すのも、やはり女の聲でありました。そこで、やれ一安心といふ氣になつて、戸の前に置き据ゑられた駕籠を振り返つて見るに其處にはありません。

「オホ、もう先廻りをして此處にお待ち申して居りました」
戸を開けて微笑んでゐる女の面が見覚えのある面であります。

「お、お前は何時の間に」
さすがの龍之助も、あつげに取られて、その女の面をながめました。正しく見覚えのある女には違ひないけれども、さて、誰を誰と云つていゝか判りません。

「随分、長いことお待ち致しました、もう、お出でになるたらう、なるたらうと思ひまして、斯うしてお仕事をしてお待ち申してゐましたけれど、いくらお待ち申してもお出でがありませんから、戸を締めました、それでも若しやと氣にかゝるものでございますから、あゝして行燈だけは夜明し點けて置くことに致しました」

何者とも見當のつかない女は、斯う云ひながら、懐かしさうに龍之助の手を取つて、廣い座敷へ案内しました。

その座敷は可なり廣いけれども、何となく陰氣な感じのするほかに古びた座敷でありました。その中に行燈が一つ、座敷の廣いのにしては餘りに光りが暗いと思ひました。光が暗いから、それ

で、部屋が一層陰氣に見えるのではないかと思はれます。

案内されるまゝに此の座敷へ通つたけれども、龍之助の心は解けてゐるではありません。案内されるまゝに此の座敷へ通つたけれども、龍之助の心は解けてゐるのではなく、今までの女の言葉によつて、よくわかつたけれども、何故に、此の女から斯うまでして自分が待たれるのか、それは判りません。また何の由あつて、これほかに懐しく、自分を、此の女が旅の宿で待つてゐて呉れるのか、それも判りません。

龍之助が、不審に堪へやらぬ面をして、座敷に通つてゐると、女はその暗い行燈の下へ坐つて、そこで仕事を始めました。

成程、仕事をしながら、今まで待ち明かしたといふ心持が嘘さと思はれません。それにしても、自分は旅の身である。こゝは何れの宿か知れないが、旅籠屋には違ひない。旅籠屋とすれば、この女は宿のおかみさんか、さうで無ければ女中であらう。斯うして着いた上からは取り敢えず風呂の加減を見て呉れるか、食事の世話をして呉れるのが、當り前であらうのに、それ等の事は頓着なしに仕事を始めつてゐる。龍之助はそれを儼然としてながめてゐたが、

「それは誰の着物だ」

と云つて尋ねて見ました。

「誰のと云つて、あなた判つてゐるじやありませんか」

「拙者には判らない」

「これ御覽なさいまし、郁太郎の着物でございますよ」

「え、郁太郎の」

愕然として暗い行燈の下を見ると、女は縫糸の一端を糸切齒で噛みながら、龍之助の面を流し目に見て笑つてゐます。暗い行燈が、いよ／＼暗く、廣い座敷が、あんまり廣過ぎる。

「お判りになりましたでせう」

龍之助は、座右に置いた武蔵太郎の一刀を引寄せました。暗い行燈の下を、瞬きもせず見つめました。

明を失なうてから久しいこと、切れの長い眼の底に眞珠のやうな光を沈めて、甲源一刀流の名代の、例の音無しに構へて、凝り相手を見据ゑて、毛骨皆寒い、その眼の色の訝えを見ることがありませんでした。

「お前はお濱だな」

「え、左様でございます、あなたとお別れしてから随分久しいことになりましたね、今日は、あなたがお出でになるさういふことですから、斯うして待つて居りました、あなたが戀しいのです、ございませぬ、郁太郎が可哀相ですからね、たん／＼寒くなつて行くのに、あの子は、綿の入つた着物一つ着られまいかと思ふさ、それが心配で、眠れません、さうぞ、あなた、これを郁太郎

に持つて行つて上げて下さいまし、あなたとの間の事などは、さうでも宜いではございませぬか、恨みを云へはお互に際限がありませんからね、もう少しお待ち下さいまし、今、わたくしが此れを縫ひ上げてしまひますまで」

「うーん」

「もし、あなた、さうなさいました」

前のは夢の聲、これは現實の言葉であります。夢さうつゝ、この境はよく判るけれども女の聲には變りがありません。して、また龍之助の心では現實の女と夢の女とを區別することが出来ません。夢にうなされた自分呼び起してゐる女の聲を、やはり夢で見た同じ女さのみ思ふより外はありません。

板橋驛の、さある旅籠屋の一室に、夢に見たさ同じやうな行燈の下に、縫物をしてゐるのは、さこやらの婀娜な處のある女房風の女でありました。けれどもその縫つてゐるのは郁太郎の着物ではありません。亂れた髪かたちを直してから自分の着物の縫ひを繕つてゐるものらしい。

夢に、うなされた人の聲に驚いた女の人は、針の手を止めて暗い行燈の光で、うなされてゐる人の面をさしのぞくと、

「また起きて居られたのか」

夢から醒めて却て現實の人の醒めてゐるのを不思議がるやうです。

「はい、また起きてお仕事をして居りました」

女の返事は、まことに、しどやかな返事でありませぬ。

「こんな夜更まで誰の着物を縫つてゐるのだ」

「いゝえ誰の着物でもございませぬ」

と云ひながら、女は再び針の手を運はせて、

「大さう夢に、うなされておゐるのやうでございました」

「あゝ、妙な夢を見た」

「怖い夢でございましたか」

「怖いといふほどの夢でもないが、見てゐる間は夢とうつゝが判らなかつたが、醒めて見ると、

やつぱり夢の通りだ」

龍之助の云ふことは、また夢さうつゝの境に彷徨うてゐるものゝやうです。

再び夢路に迷ひ込んだ机龍之助は、またも旅中の人であります。行手を急ぐ一挺の駕籠に付き添

うて、何處さもなく走り行く己れを發見しました。

行手を急ぎながらも心にかゝるのは今宵の宿です。昨夕は板橋の宿にホツと假寝の息を休めたけ

れども、今宵の宿が覺束ない。何處まで行つて何處へ此の女を泊めていゝか、それが心にかゝる。

間もなく、一つのやゝ大きな宿驛を通りかゝりました。

「此處は何處だ」
たづねて見ると、

「八王子の宿でございます」

返事をするものがあつたから、不思議に思ひました。板橋は中仙道の親宿、八王子は、それとは、

方面を變へた甲州街道の一驛であります。昨夜、板橋を出て何時の間に八王子へ来てしまつたら

うと訝かしさに堪へられません。併し乍ら駕籠はいよゝゝ急ぎます。暫らくして行手に山嶽の重

疊するのを認めました。

「あれは」

と尋ねると、

「小佛峠でございます」

果して甲州街道へ来てしまつた。併し、よく考へて見ると甲州街道へ來るのが其の目的であつた

やうです。

雲の棚曳いてゐる小佛峠の下を見ると、道の兩側に宿場しゆくぢやうの形を成した人家があります、兩側の家

の前には水のきれいな小流れが、ちよろゝと走つてゐます。

「此處は」

「淺川宿あさかゝりしゆくでございます」

と答へた途端に急いでゐた駕籠がヒタヒタ止まりました。

駕籠の止まつた處を見ると、この宿場としては目立つて大きな一軒の旅籠屋の軒下であります。それは昨夜と同じやうに、表の戸は、すっかり締めきつてあるのに掛行燈だけが、かん／＼と明かるく、昨夕「若葉屋」と書いてあつた處に、今宵は「こなや」と假名文字で記されてあります。

駕籠はさ見れば軒下に置き放しにされて、駕籠屋は影も形も見えません。

そこで龍之助は其の家の戸をハタ／＼と叩きました。

「誰方でございますか」

中から返事がありました。

「浅川宿のこなやと云ふのは當家か」

龍之助は念を押してたづねると、

「いゝえ、宅はこなやではございません、花屋でございます」

さう二度目の返事です。

そこで龍之助が、はて、と思ひました。表の掛行燈には正しく「こなや」と書いてあるのに中の人は「こなや」ではない「はなや」といふ。行燈を見直して更にたづね直して見なければなりません。

「此處は甲州街道の浅川宿であらうな」

「はい、小佛へ二里、八王子へ二里半の浅川宿の小名路でございます」

「それならば、行燈に書いてあるこなやが間違ひないのたらう」

「いゝえ、こなやではございません、小名路の花屋でございます、一體どちらからお出でになりました」

「江戸の駒込から来た」

「駒込は何方様で」

「以前、當家の養女であつたさいふお若さいふ人を連れて来た」

「まあ、お若さんがお出でなすつたさうですよ」

家の中が、さざめき渡りました。そこで、はじめて中から戸がガラリと開くと、立つてゐる女は透きとほるほど鮮かな着物を着てゐます。

「よく、お出でになりました、さきから、斯うして、明りだけは、かん／＼と點けてお待ち申して居りました、あまり遅いものですから、戸だけは締めて置きましたが、また皆んな起きてゐるのでございます、さあ、お通り下さいませ」

案内をして呉れた其の女はまた見覚えのある女であります。振り返つて見ると、そこに置き据ゑられた駕籠は、もうありません。

案内された座敷は昨夜と違つて明かるい座敷でありました。朱塗の雪洞が、いくつも點いて、勾欄つきの椽側まで見えてゐるが、其の廣い座敷に誰一人も居りません。家内の者はまた起きてゐるさ云つたにか、はらず入つて見れば、ひっそりとして人の氣配は更にありません。こゝへ案内をして呉れた女の人は、燈籠の下へ、びたりと坐るさ、あちらを向いて頻りに物を書きはじめました。昨夕の女は旅の客の疲れも知らず面に仕事をしてゐたが、今宵はまたお客を書し置いてあちら向きで物を書いてゐるのは、餘程、さし迫つた用向に違ひない。いかに差迫つた手紙さは云ひながら、お客を其方のけにして、あんまり無作法だと思ひましたから、

「何を書くのか知らないが、手紙は後廻しにして置いたら如何だ」

苦々しく云ひ放つたけれども、あちらを向いてゐた女は向き直らうともしません。女の書いてゐる巻紙だけが、する／＼と龍之助の見てゐる方へ流れて來るのです。雨漏の水が板の間を傳つて流れて來るやうに紙が眼の前を流れて行くから、一體、何をそれほど熱心に書いてゐるのたらうさ、のぞいて見ると、

花は散りても

春は咲く

鳥は古巣へ歸れども

往きて歸らぬ

死出の旅

と書いてありました。何のつもりで、こんな文句を書き出したのか知ら、その次を讀んで見ると、やつぱり同じやうに、

花は散りても

春は咲く

次へ／＼と讀んで行つても、さこまで讀んでも同じ文句です。

その手紙がぼーつと白け渡つた時分に、あちらを向いてゐた女が、こちらを向いて、

「あなた、お眼は如何でございます」

突然に斯う云つて暗い燈籠の蔭からたづねました。

「相變らず可けないよ」

女が餘り慣々しく云つたから、それで龍之助も碎けた返事をしました。

「まだ可けませんのですか、困りましたね、早くお癒しなさなくては可けません」

「癒るものか」

それは冷厲の語氣であります。

「癒らないことはいふまでもない」

「癒るものか」

いよく冷淡にハネ返すと、女は何を思つたか、

「それでは仕方がございません、早くあの峠を越えてしまひませう、あの峠を越えないと、さうも心配でなりません、斯うしてゐても眠れませんもの」

「あの峠とは」

女の指した處を振り仰いで見ると、それは前にながめた、小佛の峠であります。左右を見るに路の兩側には小流れが流れてゐて、人家のまはらな甲州街道の一瞬に相違ない。例の駕籠が何處から出て来たか、その小佛峠の方を指して一散に飛んで行きます。これも何時の間にか旅仕度をしてゐた龍之助は、やはり其の駕籠に引添うて道を急いで行くうちに、橋を渡るに追分になつてゐました。

駕籠は追分を左へ一散に急ぐのに龍之助だけが右へ外れてしまひました。右へ外れては駕籠を見失つてしまふに定まつてゐるけれども、行手に見える小佛の峠へ出るには、さうしても右へ行かなければならぬと思はれてなりません。左へ行くのは嘘だと思はれてなりません。右へたつた一人で急いで行くに、最初のうちは、左の道に、畑や林や流れを隔て、駕籠の飛んで行くのがよく見えました。急ぐほどに双方の距離が漸く隔つて、さうく見えなくなりました。駕籠が見えなくなつた時分に峠も見えなくなりました。

は、あ、小佛へ出るには、あちらの道を通るのが宜かつたのだな、と氣がついたけれども、もう

引返す道さへわかりません。四方は一はいに雲と霧が取りまいて、自分は今、かなりの深山幽谷にさまよつてゐるさういふことを發見しました。

「さうも仕方がない」

と呟いて草鞋の紐を締め直しました。その時に、つい耳もさで、たう／＼水の鳴る音が聞えます。草鞋を結び終つて背後を見ると、雲の絶間に一條の瀧がかつてゐる。さのみ大きな瀧は見えないが、懸崖を直下に落ちて、見上ぐるばかりに眞紅の色をした楓が生ひ重なつて、その一ひら二ひらが、ちら／＼笠の上に降りかゝつて來ました。

「あれが蛇瀧でございます」

と云ふ聲で氣がつくと、そこは小名路の宿でもなければ小佛の峠道でもありません。中仙道の板橋の宿場外れの旅籠屋の、たゞつ廣い陰氣な座敷の間で、眼のさめた時に二番鶏が頻りに鳴いてゐました。

「また寝ないのか」

龍之助が驚かされたのは、暗い行燈の下に夜もすがら、まんじりさもしなかつたらしい女は、思ひ餘つて忍び音に泣いてゐる處でありました。

「さうしても眠れません」

何だか知らないが、その聲が龍之助の心を嘖りました。

「生きてゐる間は眠れまい」

と云つたのは自分ながら謎のやうな言葉です。

「本當でございます、わたしは、さうして死んだら宜いか、それを昨夜も一晩中考へて居りました」

「そして考へ着いたかな」

「やはり人に弄り殺しにされてしまひたうございます」

「成程」

寝返りを打つ龍之助は、枕許の刀の下緒をすつと引き寄せました。

小名路の巻了

二〇 禹門三級の巻

一

宇治山田の米友は、あれから毎日のやうに夢を見ます。その夢は、いつも版で擦したやうに不動明王の夢であります。夢や新聞は毎日變つたものを見せられる處にねうちがあるのだが、米友のやうに毎夜々々同じ夢ばかり見せられては、驚かなければなりません。

夢から醒めた度に米友の驚き呆れた面も、やはり版で擦したやうなものです。米友は遂に堪り兼ねて床の間にかけてあつた不動明王の畫像を取り外しました。この畫像があるから夢を見せられるのである。畫像が無ければ夢も無くなるであらうと思つて、その晩は取り外して床の間へ捲いて置いたけれど、やはり同じやうに不動明王の像が夢に現れました。米友は頼にさはつて此の畫像を、他へうつしてしまはうと思つて、今、かつき出した處であります。

今日は例の手槍を持つて出ることの代りに、可なり大きな不動尊の畫像を擔いで例によつて兩國橋を渡りかけました。そこで米友が思うには、これを打捨るにしても不動尊である。有難がつても有難がらなくつても不動明王のお像である。芥溜の中へ打捨るわけには行かない。さりさて、

道の真中へ抛り出して置けない。また米友には屑屋に賣り飛ばすまいふほどの智慧も浮はない。賣り飛ばして其れを己れの巾着えちやくにしようさいふやうな智慧は米友には出ない。出て来た處で彼の良心が許さない。この場合不動尊の殊勝な信心家が現れて、この畫像を米友の手から乞ひ受けて祀りあがめる人が出て来れば米友は一議に及ばず、其の畫像を譲り渡したものであらうと思はれるが、不幸にして其の人を得ることが出来ない。折角、不動尊を擔ぎ出して来たもの、實際、米友はこれを如何扱つていゝかさいふここに迷ひきつてゐるのです。この點に於ては、曾て京都へ遊びに行つた彌次郎兵衛と喜太八が梯子を買つて持て餘して京都の町を擔ぎ歩いたやうで、米友の梯子よりは有難い不動様であるだけに、尙ほ更捨場さらすばに困るのであります。

他の事には餘り頓着はしない米友が、斯ういふ事になると眞面目に苦心するのです。甲州の被切坂せきぎで鼻緒の切れたお角の下駄を、さう處分しようかと思つて二里も三里も持ち歩いた事もあります。今はその下駄さも違つて不動明王のお像だから、擔ぎ出しは擔ぎ出したもの、其心の中の苦心は容易なものではありません。

で、兩國橋へ来てフト思案半に思ひついたのは、やつぱり此處から川の中へ投げ込むのが宜からうさいふことでありました。兩國橋から物を投げ込んだ事は、米友には今までに経験が無いではありません。第一には天誅組の貼紙をした立札を引つこぬいて、この川の中へ抛り込みました。第二には金助から侮辱され腹立まされに、頭からかぶつて金助を大川の真中へ抛り込んだこともあ

ります。

それで、米友は、こんども其の傳で不動明王を此處から川の中へ抛り込まうと考へたものらしい。それで米友は恐ろしく畫像を肩から取り卸して橋の前後を見渡しました。生憎の事に往來の人が可なりに多い、それが一々變な目つきをして米友の舉動をデロ／＼と見るのが癪にさける。さうも自分ながら盗み物でもするやうに氣がさめてならない。前に立札を投げ込んだ時のやうにまた金助を抛り込んだ時のやうに、端的に痛快にやつてしまふことの出来ないのが忌々しい。そこで米友は折角の名案も實行が違つて、一旦、肩から取り下ろした不動尊の畫像をまた擔ぎ直して、非常な不機嫌な顔色をして、

「ちえッ」

舌打ちをして焦れつたさうに、また兩國を渡り出しました。

彼は事をなす時には端的にやつつけてしまふが、その端の端が外れると、もう底知れずに愚圖ついでしまひます。一旦、川へ投げ込みそこねて見ると、もう駄目です。大川へ投げ込めないものが神田川へ投げ込める筈がない。大川へも神田川へも投げ込めないものを、そこらの堀や溝へ投げ込めるものではない。米友は思案に暮れながら不動尊を擔いで、何處を歩むともなく歩み歩んで行きました。

併し乍ら、いくら歩いて此の上、智慧の出ないことが哀です。誰か然るべき人に預けたのが

宜からうかと、それは幾度も思案にのぼらないではありません。けれども、斯うなつて見ると預けた先も心配になるし、預けるさいふその事も心配になります。たゞへは道庵先生とか、盲法師の辨信とかいふやうな者に事情を打ち明けて頼めば、いやさは云うまいけれど、米友の氣象では、さう云つて頼むのが頼にさはりませぬ。何だか自分が、この一幅の畫像に怖れをなして逃げ隠れでもするやうに見られるのが頼に障らない限りもない。それで米友は然るべき相談相手を求めようとする氣にもならないのであります。自分で自分の心が濟むやうに始末をしなければ男の一分が立たないやうに思はれてなりません。ですから、土にかじりついても、この畫像だけは自分で始末をしようとして煩悶しながら歩いてゐるのです。

處がこれほど煩悶してゐる米友の眼の前へ、ちら／＼と不動様のお姿が現はれます。今までは夢にのみ現れた不動様が、米友が斯うして煩悶してゐるに歴々其の怖い面を向けて米友を睨みつけるのだから米友は焦れるばかりです。一體不動尊といふ奴が何の恨みがあつて、おれに斯うして付き廻るのだ。今までに米友は何も不動様に恨まるれやうな事をした覚えが無い。夢になりうつゝになつて自分の眼先へちらつて斯うまで俺を苦しめる不動様といふ奴の了見方がわからぬえと、米友は腹が立つて堪りませぬ。

米友の風采も可なり奇怪に出来てはゐるが、さうも不動様とは太刀打が出来ないらしい。ヤゝもすれば其の不動様に睨みすくめられてしまふのが残念でたまらない。事實有るものならば其れで

も宜いが、畫像は斯うしてクル／＼と據き込んでしまつてゐる以上は、此の世の何處を尋ねても不動様なんていふものがあつたらお目にかゝる。有りもしない繪そら事の不動様に夜も晝も睨められてこつちの睨みが利かなくなるさは腹が立つて腹が立つて堪らない。腹が立つけれども、さうも喧嘩の相手が無いには閉口です。相手といへば此の畫像だが、さて此畫像を相手に、如何處分していか、その思案に思ひ悩まされてゐるのだから如何にも斯うにも仕方がない。

いつの間にか、米友は柳原の土手の通りを過ぎて加賀ッ原の處まで来て見ると、加賀ッ原の眞中に足輕のやうな者が、塵芥を集めて焼き捨てゝゐました。多分貧窮組の捨てゝ行つた米の空俵や塵や席の類であらうと思はれる。それを凝立つて見てゐた米友が、また一思案を思ひ浮かべました。

「さうだ、焼いてしまへば、元も子も無くなる」

そこで、ブル／＼と身を振るはして、自分ながら此の名案を喜んだものらしい。けれども、此處で焼かうとするのではない、何處か然るべき處を選んで、心靜かに焼いてしまひたい。さう感づいたから、急ぎ足で歩き出しました。

少しは遠くなつても、成るべくは、すつと江戸の町を離れた人の居ない處で、心靜かに不動様を焼いてしまひたい。米友は、さう思つて、跛者ではあるけれども達者な足を引ずつて、昌平橋を／＼と登つて行きました。

足に任せて歩いた米友は幾時かの後に廣々とした野原に出ました。其處は代々木の原であります。米友は、代々木の原とは知らないで、こゝいらならば宜からうと思ひました。さうして不動尊の画像は木の枝にかけて置き、それから四邊の山林へ分け入つて杉の落葉たの雜木の枯枝たのさいふものを盛んに掻き集めて来ては山を築きました。さて、時分はよしと思つたのに、氣の注かない事つたら仕方がないので、米友は火道具といふものを持つて居りませんでした。この人は煙草を喫はない人だから、常に火打道具を携帯してゐるさういふわけには行きません。途中で、そんな事に考へつきさうなものが、此の場に立ち至るまで、それと氣がつかなくなつたのは、オゾましいとも何とも云ひ様がありません。泥棒をつかまへて繩を縛ふやうなブマな事を仕出來た自分を、米友は齒痒く思つて地團駄を踏みました。

四邊を見廻した處で、その時分の代々木あたりは深山幽谷も同じものであります。旅人をつかまへて火種を借りるさういふわけにも行かないし、さうしても最寄の百姓家へでも行つて火打道具を無心しなければならぬ破目です。

詮方なく米友は代々木の原を立ち出でました。林のはづれを見るに天氣がいゝものだから、丹澤や秩父あたりの山々が見えるし、富士の山は、くつきり姿をあらはしてゐました。米友も久しく見なかつた廣い原と高い山の景色に觸れると、胸隔がすつと開くやうにいゝ心持になりました。原を出るに大根畑があつて、その向うに生垣があつて、そこでギーツと勿ね釣瓶の音がします。

米友は畑の中の道を突切つて行つて見るに百姓家です。その百姓家の門口へ立つて見たが、さて何と云つて火種を借りていゝかハタと當惑してしまひました。煙草の火とも云へないし、さりとて不動様を焼くのとからは尙ほ云へない。何と云ひこしらへて火種を借りようかと詰まつて空しく百姓家の門口に突立つてゐました。さうするに百姓家の臺所から、けたまひしい聲と羽バタキをして大きな鶏が一つ飛び出して来て、戸惑ひして米友の頬に乗つからうとしました。さすがの米友も此れには面喰つて鶏を拂ひのけるに、そのあざから小犬が飛び出して来て米友に向つて頻りに吠立てるのです。

こんな事では駄目だと、米友は観念しました。また頼みもしない先から鶏に馬鹿にされたり、犬に吠えられたりするやうでは頼み込んで見た處で劍突を食うか、さうでなければ泥棒扱ひでも受ける位が關の山だらうと思つたから、米友は其まゝでスゴくまた畑道を引返したものです。仕方がない、少し遠くなつても町のある處まで出かけて錢を出して火打道具を買ひ求めて来るより外はないと思ひました。

米友が畑道を引返して来るに畑の畔で、百姓が一人、子供を相手に話してゐます。

「これ見る作十、誰か榛の木山ん中へ、こんな掛物を置きつはなしにして行つた、あ、事によると泥棒かも知んねえ」

「爺、あにが書えてあるたえ」

百姓の老翁と子供とが其の掛物を擡げて見ようとする處だから、米友は眼の色を變へて駭きつて横の方から、それを引奪ひらくりました。

「おいらの不動様だイッ」

百姓親子は眼を圓くしました。

水に入れようとしてやりをこない、火に焼かうとしてまた遣りそこなつた米友は、是非なく不動尊の像をかついで代々木の林を立ち出でました。

その途すがら米友は、なほ頻りに此の畫像の處分方を考へてみました。さうして最後に考へつたのは前よりは、すつと隠健な仕方かた、あります。それは個人に頼むところを億劫だが、然るべき堂宮どうみやうへ納めてしまへば文句は無からう。堂宮といふうちには神佛をそれ／＼持分があるのだから、不動様を關廟様の許に頼むわけには行かない。不動様は不動堂に限ると思ひました。で、住職か或は堂守に事情を云ひこしらへて納めてしまへばイヤとは云ふまい。イヤと云へば抛り込んで逃けてしまはう、さまで決心して漸く人通りのある處へ出た時に、この邊に然るべき不動堂は無いものかと人に尋ねました。その人が下總の成田山の出張所が御府内の何處どこそこにあるといふことをよく教へて聞かせました。併し、米友は、江戸の市中まで持つて歸りたくはないのだから、江戸に近い田舎で然るべき不動様は無いかといふやうな事を尋ねると、それはまた瀧の川不動様と目黒の不動様たらうといふ返事でありました。

その二つの不動様のうち、それが近いかと尋ねると、こゝからでは目黒の方が、すつと近いと云ふことでしたから米友は、よし、それでは目黒の不動にしうと、其の方角を、よく／＼聞き取つてそちらに足を向けました。

米友が不動尊の畫像をかついで目黒不動の境内まで来て見ると、そこが大變に賑やかでお祭か縁日かであるらしい。あんまり賑やかで却て定まりが悪いと思ひながら米友は、其の人混みの中へすん／＼と入つて行くと、その日に此の庭で「富」があつたものです。

米友には、また「富」の觀念がよく定まつて居らないながらに、札場の中へ入つて人の蔭になつて容子かひらをながめてゐたものです。

世話人が箱の中から鏝こで本札を突き出して番號を讀むと、皆んなが持ち合せの影札を見比べて、當つたものは嬉しうに、當らないものは、しほらしい面をしてゐます。當つた番號は紙に書いて向うの柱へ貼り並べられました。それが大變な人氣ですから札には利害關係のない米友も、ついで面白くなつて頻りに富札の景氣を見てゐました。

面白がつて見てゐるうちに一の富七十三番の札が落ちました。跳り上がつて嬉んだのは品川宿の建具屋の平吉といふ若い男で、この百兩が平吉の手に落ちること定まると、當人も嬉ぶし、誰も彼も羨ましうに見えました。平さんは札を引替へに其の百兩を受取つていそ／＼とその場を出かけると、平吉を知つてゐる人が、あぶないものだ、平さんにあれを持たしては歸りがあぶな

いさ云つて眉をひそめたのは、其の幸運をそねんで云うものは思はれません。また歸りに泥棒や追刺おひばにつけられるといふ心配でもなく、それは、平さんといふ男の人柄を見てもわかる事で、持ちつけない大金を持った爲め、途中、出来心でどんな處へ引か、つてしまふかわからない。其をあぶながつてゐるものらしくあります。

果せる哉、この平さんは百兩の富が當つた嬉しまぎれに、友達を無暗に引はつて角の店へ上がった、景氣よく一杯やり出しました。

これは平さんが餘り宜しくないのです。斯ういふ時は、何を置いても一旦自宅へ歸つて女房の前へ其の百兩を見せて喜ばせた上に、近所の者呼んで一杯やるといふ事にしなければ本當ではないのだが、嬉しい時は、なかなかさうは思慮が廻らないもので、つい此處で百兩の封を切つて散財することになりました。

さうするに皆んなして此の平さんをチャホヤした上に、店の女中を初め、見知らぬお客まで、其の當り運にあやかりたいといふわけで、一杯いたゞきたがるものだから、平さんは斷りきれないで、つい、うか／＼呑んでゐるうちに腹のしまりがつかなくなりまりました。ドノ道、當にしない金である處へ、斯うして福の神の生れ代り見たやうに、あがめ奉られては平さんに限らず種ゆるむのは仕方のない事です。

丁度、この時に五六騎轡を並べて通りか、つた侍の遠乗があつた爲に大事が持ち上がりました。

いづれも然るべき身分でもあり年配でもあつて、軽からぬ役目をつとめてゐるらしい人品です。わざと多くの件をつれないで、儼行の體の遠乗であつたが、そのうちの一人が逞しい下郎に槍を立てさせてゐました。

その槍は九尺柄の十文字であります。それが丁度、この店の下へ通りか、つた時に運悪く二階の上からクル／＼と舞ひ下がつて、この十文字の槍の鞘に引か、つたのが鎖紐の煙草入たばこいりであります。根付ねづきさかますが、十文字の鞘で支へられるのだから、丁度いゝ鹽梅に引か、つたけれども、それが大事の槍であつたから槍持の奴は嚇おそしました。槍持の奴を面を見合せた馬上の侍はむつこして云はん方なき不快の色を示して通り過ぎたけれど、この槍持やっしだけは根の生えたやうに其處へ突立つて動きません。

仁王立に突立つた槍持奴は、槍の鞘に引か、つた煙草入を取らうともしないで、そのまゝ大地に突立て、頭から湯氣を立て、此の家の二階を睨み上げてゐます。

さしも騒がしかつた此の店が、その時に水を打つたやうに靜かになりました。店の者が一人も残らず面の色を青くしました。往來の人も歩みをさめてしまひました。

そこへ店の中から轉がり出したのが例の平さんでありました。實は平さん自身が飛び出さない方が宜かつたのだけれども、この男は正直者でもあり慌て者でもあつたから、店の者から何か云はれると、慌て、此處へ飛び出して來たものです。

さうして槍持奴の前へ土下座をきつて申譯をする、槍持奴は雷の割れるやうな聲で、

「此のかんぶくろは手めえのか」

平吉は縮み上がつて、

「はいく、手前のでございます」

「手前のなら持つて行け」

「はいく」

「早く持つて行け、何でえ、何で手なんぞを出しやがるんたい、此の槍へ上つて自分の手で取つて行きやがれ」

持つて行けと云ひながら、槍は其處へ突立てたまゝです。

この時に前の五六騎づれの侍達についてゐた仲間達が、ほさんと残らず取つて返して、メラリと平吉を取り巻きました。

人に揉まれて来た米友が、聞くともなしに聞いてゐる事事件の要領は斯うです。

百兩の富に當つた品川宿の平吉といふ建具屋が、嬉しまぎれに身近の人を招んで角の店の二階で飲んだ揚句、連の一人が、平さん大金持になつた上は、こんな安っぽい煙草入は廢してしまひねえと云つて、冗戯にボンと往來へ抛り出す真似をしたのが、さうしたハズミか本氣に手が江つて二階から往來へ飛び出してしまひました。飛び出した煙草入が運悪く通りかゝつた十文字の槍の鞘

へからみついてしまひました。事件の要領はたゞ其れだけです。事柄はたゞ其れだけだけれど、煙草入のからみついた相手が悪かつたから、全く始末の可けない事になつてしまひました。

「可けねえく、平さんは鈴喜の庭へ引張り込まれてしまつた、あそこにはお歴々の方がお微行で大勢休んでおゐるでなさるんだ、何でもお奉行のお方や與力のお方で、いづれも飛ぶ鳥を落す御威勢のお方なんださうだ、そのお槍へ平さんの煙草入がケチを附けてしまつたものだから納まりがつかねえ、何でも平さんは、あのお槍で殺られちまうんださうだ、あのお槍を持つた殿様が平さんを突殺して置いて、あとで五人の殿様が試し斬をなさるんだつて云つてましたぜ、もう助かりません、何しろ、彼方が飛ぶ鳥を落すお歴々のお揃ひだから、誰も口の出せるものが有りやしませんや、これはつかりはお庄屋様だつて不動院の御前だつて後へ引いておしまひなさる、あゝ平さんが可哀さうだ、平さんが可哀さうだ、こんな事だから早く、私達が連れて歸りさへすれば宜かつたんだが、つい此處で飲み出したのが悪かつた、平さん、友達甲斐が無えと恨んぢや可けねえよ、全く友達甲斐が無えんだから恨まれても仕方が無えけれど、災難にしても災難があんまり大き過ぎらあ、あれで皆さん、平さんには女房もあれは子供も二人まであるんですよ、おかみさんは今日の富を心待ちにして待つてゐるんですよ、まさか百兩の一番札が落ちようと思ひませんが、若し幾らでも當りさへすれば、子供にあゝしてやらう斯うしてやらうなんて、出がけに算當を組んで笑ひながら切火をきつて呉れたもんで、それが此んな事になつたと云つて、さう

して、私はおかみさんに合はす面がありませう、金さんお前が附いてながら早く連れて歸つて呉れさへすれば此んな事になりやしない云つて、おかみさんに泣かれたら、私しや何と云つて言譯をませう、私が友達甲斐が無えから平さんを、あんな事にしてしまった、皆さん、私しや平さんに濟まない、平さんのおかみさんに濟まない、何さかして下さいよう。

斯う云つておい／＼泣いてゐるのは、同じ品川から平吉と一緒に連れ立つて今日の富へ来た友達の一人であります。多分煙草入を手から江らしたのが此の男でせう。い、男が手放して泣くのだが、此の場合に限つて同情の至りで、ほさんと貰ひ泣きをしたがるものはかりです。併し、斯う云つて泣きつかれても今更誰が如何してやらうと云ふことも出来ません。

宇治山田の米友が呻り出したのは此の時です。

米友が鈴喜の家の裏手の竹藪の中を、うろついてゐたのは其れから間もない事でした。

庄屋様に行つても、龍泉寺の住職を煩はしても、お詫の叶はないと云はれるのを米友が救ひ出さうとするつもりが知らん。

例の不動尊の画像は刀でも差すやうに腰へ、しつかさ挿んで藪の中にある大木へ攀上りました。

その大木の上から見下ろすに鈴喜の家の庭から開放した間取までが手に取るやうです。

庭は思ひの外ひっそりとしてゐたが、その一方の隅の楓の木の下に後手に結かれてゐるのは建具屋の平吉といふ人らしい。座敷の上にはお歴々の遠乗の連中が食事の最中に見えて誰も平吉を

顧みる者が無い。槍持の奴の姿も見えなければ、仲間連中も一人として其の番をしてゐる者はありません。あゝして木の根へ括つて置けば敢て番人を附ける必要は無からうけれど、放心してゐるのは問題の十文字の九尺柄の槍です。あれはさ大事な槍が、こゝでは無難作に其の楓の木へ横の方から立てかけられてゐるだけです。大木の上から事の體を一通り見下した米友は、其の無難作に立てかけられた十文字の九尺柄の槍を見るに、むら／＼と悪戯心が起りました。

問題の中心はあの男でなくて、あの槍であると思ひました。それにからまつた鎖紐の煙草入などは元より物の數ではないが、槍はたしかにあの連中のうちの表道具である。この場合、中へ飛び込んであの男を助けて來るのは容易な事ではないが、あの槍を取り上げてしまふのは、さしたる難事ではないと氣のついたのが、米友の悪戯心をそつたわけです。それをするには、此處から物置の屋根へ飛びうつつて母屋の庇を渡りそこに腹這つて手を延ばしきへすれば、樂々槍を抜き上げる事が出来る——と氣がついて見るに、それは面白い／＼、早く捲き上げて下さいと槍の方で米友を手招きするやうに見え出したから堪まりません。極めて身輕に米友は大木の上から物置の屋根へ飛び下りて了りました。

飛び下りた途端に帯をゆすぶつて、腰に差してゐた不動尊の画像を脊中へ廻し、其まゝズル／＼と走つて母屋の庇へ出ました。庭では牡鶏が一羽、小首を傾けて物珍らしさうに米友の舉動をながめてゐるだけです。

そこで米友は庇の上へ腹這ひになつて、下をのぞいて見るに食事をつたお歴々の連中は頻りに比翼塚の噂をしてゐるらしい。結かれてゐる平吉はと見れば、死人のやうになつて、すゝり泣をしてゐるのが可哀相です。

米友は右の手を差しのべるご楓に立て掛けた槍をスル／＼と引き上げました。同じ木の根に結かれてゐた平吉すらも其れを知らない位だから、誰あつて感づいた者はありません。たゞ、屋根の上を歩いてゐたブチ猫が此の體を見て、急に兩足を揃へ脊骨を高くして威嚇の姿勢を示したのが

米友を苦笑ひさせたゞけのものでした。米友を苦笑ひさせたゞけのものでした。米友を苦笑ひさせたゞけのものでした。米友を苦笑ひさせたゞけのものでした。米友を苦笑ひさせたゞけのものでした。

仕済ましたりさいふ面をして米友は、その槍を小脇にかい込むや、また以前の物置の上へ舞ひ戻つて其處から塀を傳はつて屋敷の外へ出てしまひました。

其れから幾らも経たない後の事、いざと云ふ時に楓の木へ立てかけた槍がありません。槍持の奴は青くなり、誰にたづねても要領を得たのではない。平吉は打つても叩かれても知らう筈がない。

さうしても行方不明とあれば盗まれたのだ。盗まれたのは煙草入をからまれたよりは少し痛みが重い。殊に奉行であるか輿力であるか知らないが、そのお歴々が五六騎集まつてゐる眼の前で盗まれたとすれば、いよ／＼痛みが重い。

斯うして鈴喜の家の内外では槍の紛失から青くなつて騒いでゐる時分に、外から一つの報告がありました。

不動の境内で、見慣れない小男が、頻りに十文字の槍をおもちやにしてゐるさいふこです。槍をおもちやにしてゐるさいふ報告は穩かならぬ知らせです。鈴喜の家の内外を探しあぐねた連中が、ソレと云つて我先きに飛び出しました。

これより先き、槍を荷つた宇治山田の米友は、さういふ了見か知らないが、不動の境内の人混みの中へ取つて返しました。十文字の槍は肩にしてゐるが、不動の畫像は腰にたはさんでゐます。一體、この時分の米友の了見方さいふものは米友自身にもよくわかりません。近來の事は世間にも米友の周圍にも餘り變兆が多いから此の短氣な正直者は精神に異状と云はないまでも、多少自暴氣味になつてゐるかも知れませんが、槍を擔ぎ出して人目に觸れない方角はいくらもあるのに、好んで人出の多い不動の境内へ取つて返して、多くの人の注目に頓着せず悠々歩いて行くは餘りと云へは非常識です。

「おい、小僧待て！」

彼の槍持奴をはじめ仲間共、そのあそこには鈴喜の家の主人雇人までがくつついて、丁度三佛堂の前まで來た時その聲を聞いて米友が、屹と後を振り返りました。

すは、何事！と思つたのは前から事の成行を知つてゐる者ばかりではありません。

「待つてゐた！」と云はぬばかりに宇治山田の米友は、九尺柄の十文字の槍を地に突き立て三佛堂の前に蟻まりました。その體を見るに槍持の奴の疝癩が一時に破裂して、

「野郎、その槍は何處から持つてきた」

「鈴喜んちの庭から持つて来た」

米友は敢て驚かない。

「野郎、誰にこそわつて持つて来た」

「屋根の上の猫さ庭にゐた鶏にこそわつて持つて来た」

「野郎、野郎」

槍持の奴は握りこぶしを兩方から握り固めました。

「何が野郎だ」

米友は短い兩の足を程よく踏張りました。

「寄越しやがれ」

槍持の奴は米友をけし、飛ばさうとさかると。

「急たい！」

身體を心持反らせて、かゝつて来た槍持を左の手で、ひよいと横の方へ突きました。そこで槍持の奴が、はずみを食つて脆くも右の方へゴロ／＼と轉がつたから見てゐる者が驚きました。

「おや」

見てゐる者が面の色を變へた時に、宇治山田の米友が地面を踏んで、

「只は遣れねえやい、この槍が欲しけりや、代りの品を持つて来いやい」

斯う云つて米友は三佛堂の椽の前へ飛び上りました。

驚くべき事には、その途端に十文字の槍の鞘を拂つてしまつたものです。それはヘズミで鞘が取れたのではなく、米友自身が心得て鞘を拂つた上に、當人がその鞘を丁寧な懐中へ入れてしまつたから、間違ひといふ餘地はありません。槍の中身は、さすがによく手入れが届いて明晃々たる長劍五寸横四寸の業物です。

これは誰も氣狂ひたと思ひました。その氣狂ひが槍の鞘を拂つて兎も角も寄らは突かんと構へたのだから、命知らずでも、これは浮かりと近寄れません。

たさへヘズミにしる、槍持の奴を取つて投げた今の早業からして見るに、かりそめに構へた槍の姿勢といふものは、無茶に打つてかゝるの隙が見出せないことが不思議といへば不思議です。劍呑といへば劍呑です。

宇治山田の米友が今構へてゐる姿勢といふのは、心あつてか無くてか「大亂れ」といふ形になつてゐました。これは多數の太刀を相手に應對する時、十文字槍の人が好んで用ゆる姿勢で、槍を中取に持つのを米友は、もう少し突きつめてゐるだけ違ひます。この姿勢で充分に使はせるに、左右を薙ぎ立てることが出来ます。近寄るのを追拂つて寄せつけない事が出来ます。また薙刀をつかふと同じやうに使つて敵を左右へ廻退け突のけることも出来ます。面と腕と膝との三段を透

問もなく責立て、敵を惱ますことも出来ず。太刀を取つて向つて来るものを上段に突き出して脇架に大きく引き取ることも自在です。米友は心あつて寶藏院流の大亂れの型を用ゐるので無からうけれど、その構へが自からさうなつてゐることは争へません。争へない證據にはタヂタヂと後へ下がる者はあつても、米友の槍先に向つて行かうとする者が無いのであります。

米友が大亂れに取つてゐるこそが米友自らの氣取でない位だから、立つてゐる者も亦、本式に其れを受け取るこそが出来ないのは勿論です。たゞ精悍無比……といふよりは無茶な其の舉動が、すべての人の荒膽をひしぎました。氣狂の刃物には、浮つかり近寄らないがい、といふ聰明さが、

タヂ／＼と、さすがの命知らずをも後しざりさせたものと見えます。實際また龍之助に離れて以來、不動の夢を見つゞけに見てからの米友といふものは、氣狂ひにこそならないけれども、其の心理作用に異常な焦りがありました。建具屋の平吉なるもの、災難を聞いた處で、一種の義憤を含む例の短氣がむら／＼と萌したことは、この男としては寧ろ可愛い處であつて、いつも／＼其れが爲に得をしてはゐない。その度毎に命の綱渡りのやうな事はかりしてゐるのだが、幸ひに危ない處で一命だけは取り止めてゐるのだが、それにしても今日のは餘りに無茶です。

若し、取巻いてゐる奴等が突か、つて來たら縦横無盡に突き立てるつもりか知らん。いつか甲州道中の鶴川で川越人足を相手にやつた二の舞を其處でもやり出すつもりか知らん。あの時は幸に

駒井能登守といふ思ひがけない仲裁人が出て來て、両を坊主にされて納まつたけれども、今日はあの傳では行くまい。能登守のやうな物のわかつた押の利く仲裁人が滅多に出て來ようと思はれないのに、若し、一人でも負傷させたといふ事になると、今度は甲州の山の中の川越人足とは相手が違つて非常な面倒なものになる。その上に、またいくら米友が荒れて見た處で、楓の木に結ひつけられてゐる建具屋の平吉が赦さるべきものでもなく、却て米友が荒れ、は荒れるほど平吉の罪も重くなるといふものでせう。それですから此處で米友が力み出したのは全く無茶です。義憤としては意味をなすかも知れないが、義侠の振舞としては全然事壊しであります。

「皆んな聞いて呉れ、おいらは品川宿の平吉なんて人は知つてやしねえんだ、煙草入が引か、つたのも、おいらの知つた事じやねえや、たゞ、あんまり頼にさはるから、時候の加減で、此の槍を持ち出したくなつたんだ、鎌寶藏院の九尺柄の使ひごろの槍だが、蟲の居處で、今日は思ふ存分に使つて見たくなつたんだ、使つてしまつたら返してやるから、其れまでおいらに貸して呉れ、其う云つてクル／＼とさせた眼中が、氣のせいかな今日は殺氣を帯びてゐるやうです。

や、あつて宇治山田の米友は、九尺柄の十文字の槍を宙天高くハネ上げました。下まで落ちて來る間に手拍子を丁と一つ打つて其の手で受け止めるこ、右の手で水返しあたりを掴んで十文字を外輪にして、自分の身體を心棒に獨樂のやうにブン廻しをはじめました。これは鎌寶藏院流七十三手のうちには無い手です。かりに續つて見るさ槍が九尺、米友の手の長さが一尺五寸として、

直径二丈 尺の大獨樂が廻りはじめたものです。しかも其の獨樂の外輪は鎌になつてゐるのだから、當れば肉も骨も切れてしまひます。

見てゐる者が肝を冷して遠退いたのは無理ありません。縁目で齒磨きを賣る香具師が、その前腕をやる爲に、あまり見物を近くへ寄せまいとして地面へ筋を引いて廻るのを、こゝでは鞘を拂

つた真槍で無難作にブン廻しをはじめたのだから、その亂暴さ加減は格別です。

斯うして見物を程よく追拂つて置いた米友は、一方の角から一方の角へ向けて眞一文字に走り出しました。

これには見物は驚かされたが、其の走り方が尋常ではありません。さながら鳥が兩翼をひろげて低く飛んで行くやうな走り方です。眼前に可なり廣い沼があつて、其の沼の上を一文字に飛んではゐるが、岸に着くと、はたと翼を納めて休らはんとする氣合の飛び方でありました。これは正しく鎌寶藏院でいふ「飛亂」の型であります。

一方の見物が「あつー」と飛び退いた時には宇治山田の米友はクルリと脊を向けて、また前の方角へ眞一文字に走り出しました。前には中空を飛ぶ鳥のやうな姿勢であつたが、今度は形を下段に沈めて槍を一尺ほかに、つめて走るのが、さながら猛獸の進むが如き勢であります。

其れで一方の見物が、また「はつ」と飛び散つたけれども米友は素早く身を返して元の處に突立つて槍を中取に持ち、前へ突き出したかと思ふと、柄を返してはつた。物を打つやうな形をし

した。左から打ち込み右から打ち込み、さながら棒と槍とを併せて使ふやうに九尺の十文字を兩様に使ひました。

それが終ると十文字の長剣だけは遊ばせて、横手の鎌だけをヒラリノゝと胡蝶のやうに舞はしてゐます。十文字を逆手に持つて上から突き伏せる形をして見るのかと思へば、躍り上がつて空飛ぶ鳥を打て落すやうに變化しました。穂先を三様に使ひ分け、槍の柄を二様に使ひ分けるのみならず、石突を返して無二無三に突いて引くかと思へば、飛び違ひ様に敵の小手へ引鎌をかけて瀧落しの形が定まります。

斯うして宇治山田の米友は、たつた一人で無茶苦茶に十文字の九尺柄をおもちやにしてゐます。

おもちやにしてゐるわけではないが、見物の者にはさうさしか見えないのであります。併し、そのおもちやの扱ひぶりの熟練と輕妙とを極めた捌きは、無心で見えてゐる見物をも酔はせるほどの働きでありました。

自棄にしても氣狂ひにしても、これは面白い觀物だと思はないわけには行きません。たしかに面白いには面白いが、あぶないこともまたあぶない。だから浮かり、いよく近寄ることは出来ません。

怒氣紛々として掴みかゝらうとしてゐる下郎達も、さうにも斯うにも米友に近寄る隙さへ見出すことが出来ません。ひさりで無茶苦茶に使つてゐる槍が傍へ寄れば、きつと物を言ふにちがひな

い。物を云へは必ず田楽刺に刺されてしまひさうである。思ひがけない氣狂ひだと思ひました。誰もまた本當に米友が槍を心得てゐるのだと氣のついたものはありません。自棄に振り廻してゐる槍の間から本格と變則とが米友流に隨處にころがり出す、其の妙處を見て取つて呉れる人のないのが氣の毒です。氣の毒であるのみならず此の時に何處からともなく泥草鞋が片一方米友の面上を望んで降つて來ました。その泥草鞋は身を沈めて避けたけれども、其を合圖に石や木や竹切

れが雨霰と降つて來ました。

それと見るや米友は横つ飛に飛んで三佛堂の椽の上へ飛び上がったかと思ふと、扉を押して堂の中へ身を隠し、素早く中から扉を開きして門を締めました。

そこで、彼の槍持奴を始め、仲間共は扉の前まで押寄せたけれども、さて、それを踏み破つて一歩を堂の中へ踏み入れようといふ事には躊躇しなればなりません。踏み込んだが最後、中に待ち構へた氣狂ひの爲に田楽刺にされることは請合と思はなければなりません。その他の群衆は徒らに三佛堂のまはりを取り捲いてわい／＼と騒いでゐる許です。

稍あつて、高い欄間の間から面を現した宇治山田の米友が、群衆を見下ろして斯う云ひました。

「おいらは宇治山田の米友と云つて生れは伊勢の國の拜田村の者だが、わけがあつて江戸へ出て來たには出て來たが、江戸に來ても根つから詰まらねえや、時候のせいにか此の頃は氣がいららして堪まらねえ、右を向いても、左を向いても頼にさはる世の中だ、一體、おいらのやうな人間

は見る物聞くものが頼にさはるやうに出來てるんだと、此の頃つく／＼さう思つた、だから死んでしまつた方がいゝんたらう、命なんぞは惜しかあ無えや、此世の中に未練なんぞはありやしねえんだ、おいらは氣が短けえから忌になるさ自分の命までが忌になつて堪らねえ、親兄弟がある講じやなし、女房子供があるわけでも無えから、さうでもなる命だ、命の持て餘した、さうかさ云つて川へ飛んだり、首を絞つたりするのも氣が利かねえからな、丁度いゝ處だ、あの建具屋の若いのに身代りになつてやらうと思つて、こんな悪戯をやり出したんだ、さうたい、あの若いのはおかみさんもあれは子供もあるさいふ話だから、おいらは今いふ通り、そんな厄介者は一人も無え命の持て餘し者なんだから身代りにして呉れねえか、つまり、あの建具屋の繩を解いてやつて其の代りに、おいらを踏ん縛つて呉れ、あの若いのを助けてやつて呉れさへすりやあ、素直に此の槍を返してやるよ、それが承知が出來なけりや、當分此のお堂の中でお籠りた、無茶に踏込んで來る奴がありや、此十文字で一々ドテ腹へ穴を開けて冥途へ道連にしてやる迄の事だよ、斷つて置くが、斯う見えても、おいらは槍だけは一人前に遣へるんだぜ、見る人が見たらわかるんたらうが、おいらの槍は天然自然に會得してゐるんだぜ、それに木下流の磨きをかけてゐるんだぜ、槍は身に應じたもので、おいらの身體では二間三間の槍は柄に合はねえ、九尺の十文字でさへ、些さばかり長過ぎるんだが、さうやら此れなら使へねえ事は無からう、本氣に此の槍で、おいらが荒れ出した日には死人怪我人が山ほご出來るぜ、危ねえもんだが、おいらは其れをやらね

え、おさなしく此のお堂の中へ隠れてゐるから、誰か確かな人を證人にあの建具屋の若いのを、おいらの眼の前で許してやつて呉れ、さうすれば、この槍はちやんと返してやつた上に、おいらが身代りになつて、牢人中へブチ込まれようとも、見てゐる處で首をちよん斬られようとも不足は云はねえ、誰でもいゝから話のわかる人を出して、しつかりと挨拶をして呉れ、それから序に、お握飯に澤庵をつけて三つ四つ差入れてもらひてえ」

聞いてゐる者が其の言ひ分の不敵なのに呆れ返りました。呆れ返りながらも、聞いて見るに幾分の道理が無いでもない。殊に最後に握飯を差入れるといふ事は可なり蟲のいゝ注文だと思ひました。併し腹が減つてゐるたらうから其れも無理のない注文だ同情する者もありました。

この事件は遂に泰叡山の方丈を煩はして解決をつける事になつたのは幸です。

槍の主も斯うなつては事を好まないらしい。米友の云ふやうな條件で、建具屋の平吉を許してやる代りに米友が縛られることになりました。其證人は泰叡山の方丈です。十文字の槍は元の主へ歸つて、米友は繩をかけられて名主の家へ預けられました。

それで此の事件の當座の解決は出来たが、後難があるといへば其の後難は一に米友の身にかゝつて來る筈です。けれども其れは泰叡山の取扱でさうにかなることです。

二

「ナニ、水戸の山崎、山崎が此處へやつて來たのか」

さすがの南條方も何か呆れ面でありました。

「さきから、お屋敷の前を行つたり來たりしておゐてになりました」

「さうか、訪ねて來たものを會はないわけにも行くまい、こゝへ案内して呉れ給へ」

案内に立つたお松は再び玄關へ取つて返さうとするに南條はお松を呼び留めて、

「お松どの、ちよつと待つて呉れ、その山崎といふ男は直接に拙者の名を云つて尋ねて來たか、それとも最初に他の者の名を云うて訪ねて來たのではないか」

「いゝえ、外には誰方様のお名前も仰有りはなさいません。南條様にお目にかゝりたいと申しました」

「さうか、それならば宜しい、間違つても宇津木兵馬を訪ねて来たこと云ひはしまいな」

「左様なことは仰有いませぬ」

「ま、もう少し待つて呉れ、今訪ねて來た其の山崎讓といふ男はな、宇津木兵馬に會はせてはならない人だ、兵馬が此の家にあるといふことを知らせても悪い人だ、先方が何と云つても兵馬の名を出しては可けないぜ、それから兵馬の部屋をよく始末して、山崎に中を見られないやうにして置かなくては可かん。この後さても、その邊はよく心得て置いて呉れ給へよ」

南條は立つて行くお松を、わざ／＼呼び留めて、これだけの注意を與へました。

やがて案内を受けた山崎は南條の部屋へ入るぞ

「いづぞやは失禮」

と云つて挨拶しました。

「其の節は失禮」

南條も亦同じやうな事を云つて禮を返しました。

して見れば此の二人は、もう既に何處かで初對面が済んでゐるものと見えます。多分、中仙道筋から相前後して甲府の城下へ入つてから後、あの邊で相見るの機會があつたものと見なければなりません。

「南條殿は何時頃、こちらへお出でになりましたな」

「左様、あれから間もなく、此方へやつて参りましたよ」

「は、あ、左様でござるか」

「して山崎君、君は」

「拙者は、つい、この二三日前に出て來ました」

「左様でござるか、して、當分はこちらにおゐるか、或はまた甲州筋へお立歸りなさるか」

「早速、甲府へ歸り、それからまた上方へ出かけるつもりであつたが、江戸へ來て見ると、江戸にも存外、いたづら者が多いから、當分は歸らぬことになりましたわい」

「ハ、ハ、何處へ行つても當節はいたづら者が多くて困りますな」

「仰せの通り、上方のいたづら者は禁廷のお庭の前でいたづらをする、江戸のいたづら者は將軍の膝元を突いて巫山戯る、中には物ずきながあつて、拙者如きの首まで欲しがらる奴があるから、全くやり切れたものではない」

山崎は斯う云つて自分の首筋を撫で、見るに、南條は抜からぬ面をして、

「實際、あぶないものさねえ」

と云ひました。

「あぶない事此の上なし、今の江戸は將軍家がお留守で、お膝元の警備がゆるんでゐる處につけ込んで、たちの良くないいたづら者がウヨ／＼してゐる」

「それとても、多寡の知れた浮浪人の仕業故に大した事は、よう爲まい」

「處が、事體は意外に重大で、浮浪人の後には容易ならぬ巨根が張つてゐる、その根を斷つにあらざれば葉は枯れない、さうです南條君、その巨根を一つ掘り返して見たいものだが、手を貸して下さるまいか」

「拙者共でお役に立つならば、随分お手助けを致すまいものでもないが、一體、その巨根といふのは何者だ」

「それは三田の四國町あたりに菓を食つてゐる」

「成程」

「つまり、いたづら者の本家本元は薩摩だ、薩摩といふ奴は實に不埒千萬な奴だ、その薩摩を取つて押へて、ふかしたり焼いたりしてしまひたいものだ」

「成程」

南條は成程と云つて妙な笑ひ方をしました。

「薩摩を掘返して、ふかしたり焼いたりして食つてしまはなければ江戸の市中は鎮まらん」

山崎が今にもふかし立ての薯を食つてしまひさうな事を云うと南條は皮肉な面をして、

「併し、七十萬石の薩摩薯だから、ふかしても焼いても可なり食ひであるなあ、第一随分、あつちこつちへ薯が張つてゐるたらうから掘り返すだけでも中々骨の折れる仕事じゃ」

「我々の仕業は、たゞ薯を手繰つて見りやいゝのだ、手繰つて見ると思ひがけない處へ薯が張つてゐるから妙だ、本所の相生町あたりまで、その薯蔓が伸びてゐるからなあ」

山崎は胡坐をかき直して煙草盆を釣るし上げ鼻の先まで持つて來ました。

そこで話が、少し途切れてゐる處へ、廊下を渡つて來る人の足音がありました。南條の居間の前で、その足音が止まるまで、

「南條殿、おめでござりまするか」

障子を風と押し開いたものです。

「あ」

それで南條も、やゝあわてました。障子を押開いた人も面食つて、入りもやらず、さりこて立ち去りもならず、

「お客來でしたか、失禮」

その人は是非なく障子を締め直して立ち去らうとしたが、そのお客と面を見合せないわけには行きません。

「お」

その聲と共に障子を立て切つて、さながら、見るべからざるを見たとやうに、慌しく其の場を辭して行きました。こゝに來合せたのは不幸にして宇津木兵馬であります。山崎讓は南條に向つて

「南條殿、今のは貴殿のお知合ひか」

「うむ、知つてゐる」

この時の南條の返答ぶりを聞いて山崎は、

「南條君、君、少年をそのかしちや可けないぜ」

斯う云つて頗る冷淡に構へました。

「そりや如何いふ意味ぢや」

南條も空さぼけてゐるやうです。山崎は莞爾と笑ひました。

「一體、九州の人間は婦人よりも少年を愛する癖がある、君も亦九州人だらう」
 「以ての外、拙者が九州人でない證據は、拙者の音を聞いたら判るたらう、婦人や少年の事け與り知らん事ぢや」

「は、あ」

山崎は、なほ一しほ思案の體で、南條の辯解を、うつかり聞き流して居たが、また煙草盆を鼻の先へ吊るし上げて煙草の火をつけました。屈んで煙草盆の火をつけないで、火をつける度に煙草盆の方を鼻の先まで吊るし上げるのが此の男の癖と見えます。

南條が何かしら躍起の體に見えるのに、山崎は却て冷淡に落着いて煙草を一ふく吹かしてから、
 「其れは如何でも宜しいことだが、南條殿、今のあの少年は、ちよつと見處のありさうな少年でござるな」

「山崎君、見處があるか無いか君には一見して、そんな事が判るのか」

「判る」

と云ひながら山崎讓は吹殻をハタくさ、又しても煙草盆を持つて鼻の先へ吊るし上げました。

南條力は横の方を向いて壁にかけた山水畫をながめながめ頻りに頬ひけを撫で、ある。山崎は煙草吸ひだが、南條は煙草を喫まない。

「さいふのは」

山崎は煙草を一ふくしてから、お茶を取つて飲みました。

斯うして、また二人が奥齒に物のハサまつたやうな會談ぶりをつゞけようとする時分に、廊下を逃けるやうに立去つた宇津木兵馬はお松の部屋の前に来て立つてゐます。此處へ立ち寄るつもりで来たのではないが、こゝへ来なければならぬやうになつたらしい。

相生町の老女の家を辭して出でた山崎讓は兩國橋を渡りながら腕を組んで、獨合點をして相生町の方を振り返りました。

「は、あ、萬事讀めたわい、南條の奴が、宇津木兵馬を嚇してやらせたんだ、道理で小腕ながら、や、つこい斬り方ではないと思つた、併し、宇津木が彼處にゐたさいふことも意外だが、あの先生が南條に頼まれたからさて、餘人ならぬ拙者に斬つてかゝるさいふのは判らない、宇津木もおれも壬生にゐては一つ釜の飯を食つた仲じやないか、それに何を間違つておれに刃を向けるのたらう、判らん、事によつて彼の先生、南條あたりに説かれて我々に裏切をするつもりでやつたさすれば憎むべし、生意氣な奴だ、打捨つては置けないが、我々を敵とするほどに恨のある筈はないし、また敵にすれば損の行くことは判つてゐる、さういふ積りたらう、一つ會つて詰問してやらうか、返答次第によつては不憚ながら其の儘では置けん、併し、彼奴の腕は惜しい、寧ろ、これは裏を掻いて、此方があれを逆を利用してあの一味の動靜を探らせて見ようか、それが宜からう、まあ、併し、この邊まで當りがつけ仕事は面白くなる」

山崎は斯う云つて、ほ、笑をしながら、兩國橋を歩いて行きました。

山崎は、江戸を騒がす總ての巨根が薩摩に存することをよく知つて居ります。この南條や五十嵐等は薩摩の者ではないが、薩摩とは密接の脈絡を保つて、何か關東に於て事を起さうとしてゐる野心のほども、よく見抜いてゐました。甲府城乗取の陰謀は、此れが爲に一頓挫して、南條等は

一時氣を抜く爲に江戸へ退散したことも山崎は最初から知つてゐました。

江戸へ出て来ては、片手間に彼等の行先を突き止めてやらうと、半ばは好奇心でやつて來たのが大木戸の事件以來、こいつは一番眞剣で突つ込まなくてはならないと思ひました。

それで此の數日間、得意の炯眼を光らして見ると突き止めたのが本所の相生町の老婆の家です。南條や五十嵐が此の家に出入してゐること、時として其處を住居として逗留してゐることを知るのには、山崎の手腕では太した難事ではありませんでした。

それで、あらまし老女の家の内外の形勢の豫備智識を得て置いてから、その内狀を發きにかゝるべく、如何なる手段を取らうかと考へたが、これは拙な事をするよりは、いきなり南條にぶツツかつて、その度膽を抜いてやるのが面白からうと、結局、斯うして今日押しかけて見たわけです。押しかけて見るに南條以外に珍らしい獲物がありました。併し乍ら、南條も字津木も、それはまた末で、例の巨根はそこから蔓を張つてゐる薩州屋敷にある。將軍不在に乗じて江戸を騒がすこの根源は其處にある、と云ふこの見究めが大事であります。

山崎は其れを考へながら兩國の見世物小屋のある方へ知らず知らず足を引かれて來ました。處が、その中の一際大きな見世物小屋に「江戸の花女輕業」の看板が掛つてゐます。その着板の文字を山崎が眺めてゐると、筆蹟に見覚えがある。見世物小屋などに掲げるには惜しいほどの字だと思ひました。

「さうだ、神尾の字に似てゐるな、甲府詰になつた神尾主膳の筆によく似てゐるが、いかに落ぶれたとて、まさか神尾が看板書きにもなるまい、あの男は、今何處に何をしてゐるかなあ」

山崎は斯う思つて看板を見てゐると其次に白い布を長く垂れて全く變つた筆で、

「清澄の茂太郎事病氣の爲向ふ三日間相休み申候」

と認めてありました。

山崎が其の小屋の前を通り過ぎると、後ろから肩を叩く者があります。

「山崎先生」

「お、七兵衛か」

振り返へつて見ると、自分と同じやうな装ひをした七兵衛でありました。

「相生町へお出でになりましたか」

「うん、相生町へ乗込んで見た處だが、お前は何處にゐた」

「私は、此の女輕業の親方さいふのを知つて居ります故、ちよつと立寄つて參りました。して、

相生町の方の御首尾は如何でございますか」

「なかく面白かつた」

「これから何方へお出でになりますか」

「さうさな、お前と會つて相談をして見たい事もあるんだが……」

「それでは、この女輕業の小屋の中へお出でになりませんか、今も申上げる通り此の小屋の親方といふのが至極別懇なでございますから、樂屋で休みながらお話を伺はうではございませんか」

「其れも宜からう」

一旦通り過ぎた女輕業の小屋の前へ、二人は立ち戻つて来て、

「七兵衛、一體こりや何だ、この清澄の茂太郎と云ふのは」

「これに就ては、一通りの魂膽があるんでございます、清澄の茂太郎といふのは房州から仕込んで来た此の小屋の呼物で、随分客を呼んでゐたものですが、この頃、その呼物が逃げ出してしまつたんですな、逃けた頭末は、私がよく存じて居りますが、女同志の鞘當といふ處が可笑しいんで、兩方でイガミ合つてゐるうちに、肝腎の當人が行方知れずになつてしまつたんでございますよ、當人の茂太郎といふのが二人の女を出し抜いて、近所の馬を引張り出して何處へ行つてしまつたか、今たに行方がわかりません、何しろ呼物でございますから、こんな事をして三日の申譯をして置込んでございます」

七兵衛は山崎を案内して路次から樂屋の方へ廻りました。お角は留守でしたけれど、女共が取持をします。

二人はそこで一杯やりながら、

「さて、七兵衛、これからまた一つ、お前の手を借りたい仕事が出来たのだ、それは外ではない、芝の三田の俗に四國町といふ處をお前は知つてゐるか」

「エ、存じて居りますとも、赤羽根橋を渡れば真直に行つた處、金杉橋を渡るこ右へ曲つた處が、それでございます、あの邊には薩摩と阿波と有馬と伊豫の四ヶ國のお大名のお邸があるから、それで俗に四國町と申すことまで、ちやあんぞ存じて居りますよ」

「それだ、その四國町のうちでも一番大きな薩摩の屋敷をお前は知つてゐたらうな」

「それもよく存じて居りますよ、あのお屋敷の前を俗に御守殿前と申しましてね、門は黒塗の立派なものでございます、屋根は銅葺の破風作りで鬼瓦の代りに撞木のやうなものが置いてございます、正面三ヶ所に轡の紋がありますから、誰が見たつて、これが薩州鹿兒島で七十七萬石の島津のお屋敷たさわかります」

「成程」

そこで山崎は懐中から紙入を取り出して、懐けたのは美濃紙大の一枚の繪圖面でありました。

「あれがその薩摩屋敷だ」

今更のやうに其の圖面を、しけ／＼とながめます。

「その薩摩のお屋敷が、さうかなすつたのですか」

七兵衛も傍から覗き込みました。

「お前も知つてゐたらう、近頃、江戸の市中を騒がす悪い奴は大抵こゝから出てゐるのだ」

「成程」

「處で、この薩摩屋敷の中の模様を、すつかり調べ上げて見たいのだが、さうだ、お前に良い智慧はないか」

「左様でございますなあ……あのお屋敷が物騒だと云ふことは、今に初まつたことじやございませんなあ、大ぶ、眼をつけてお居でなさる方がございました筈ですよ、お隣が阿波の屋敷でございませう、その阿波様の屋敷の火の見櫓の上から、薩州のお屋敷の模様をこつそりと探つておいでになつたお方もありましたつけ」

「おや、さうして、お前は、そんな事まで知つてゐる」

「ちよつとした通りが、りの節に、そんな噂をお聞き申しました、上の山藩の金子と仰有る方などは、あれから薩摩の屋敷の中をのぞいて見ては頻りに繪圖を引いてお出でになつたことがあるさうでございますけれど、本音ですか嘘ですか」

「ナニ、上の山藩の金子、それでは上の山の金子與三郎の事たらう、あの男ならば、やりさうな

事だ」

「それで何ですか、山崎先生、あなたも、あの薩摩のお屋敷の容子を委しくお調べになりたいのですか」

「さうだ、それに就てお前の智慧を借りたいものだが、何さかしてあの屋敷の中へ入つて見る手段はないものかな」

斯う云はれて七兵衛は、篤くりと考へて見る氣になりました。暫らく考へてゐたが、やがて仔細らしく、

「先生が、あの屋敷へ入り込むといふのは容易な事じやござんすまい、私も少々勝手の悪いことがございますのです、こゝに一つ思ひ浮かんだのは外じやございませぬ、甲州の山の中から出て来た勝つ氣で勘定高い小伴が一人あの近處に住んでゐるんでございませぬ。こいつが田作の齒きしりで、ヒドク薩州のおさむらひを恨んでゐるんですから、あいつを突付いて當らして見たら如何かと思つてございませぬ……慾こそ深いが目から鼻へ抜けるやうな小伴でございませぬから、使ひやうによつては随分お役に立ちませう」

話半はの處へお角が歸つて來ました。

「七兵衛さん、お待たせ申しました」

「さうでした、子供は見つかりましたかね」

「いえ、見つかりません、何しろ、動物の言葉がよくわかる子供ですから、動物に好かれて仕方がありません、蛇でも鳥でも、あの子を見るに、皆んな友達気取になつて傍へ寄つて来るし、常人も亦動物が大好きなんですから、あぶなくて仕方がありません、さうく繫いで置いた馬を引張つて何處かへ行つてしまひました」

お角は斯う云つてゐるうちにも焦つたさうに、

「この間、千住の方から来た人の話に、下總の小金ヶ原に近い處で、たつた一人の子供が裸馬に乗つたり、馬から下りて手綱を引つはつたりして、遊びながら東の方へ歩いて行つたのを見た者があるといひましたから、それでは無いかと思ひます、それで、今日は、これから小金ヶ原まで人をやつて見ようかと思つてゐる處でした」

「成程」

「ですけれども、それは月夜の晩の事で、それを見た人も遠目の事ですから、茂太郎たか、さうたか判つたものじゃありません、土地のお百姓の草苅子供や何かであつたりしちやあ馬鹿々々しいと思ひますけれど、それでも諦めの爲ですから」

お角は、たゞ茂太郎に逃げられたといふ事の外に負けぬ氣の業腹があるやうです。けれども、こゝでは別段に、お絹の事も恨んでもゐないやうです。お絹が連れて行つた筈の茂太郎は、七兵衛の智慧で伯耆の安綱と交換して無事に取返したものと見えます。今度、その少年が馬を連れて逃げ

出したといふのは、それから後の事件で、お絹は丸つきり此の事件には拘はつてゐないやうです。若し、お絹があつたので、今たに茂太郎を誘拐して返さないやうな事があれば、それこそお角たつて、此れたけの焦れ方であらぬやう筈はない。お絹も亦、命がけて、そんないたづらを試みるほかに目先が見えない筈はありません。

あれはあれで解決がついて、別に、清澄の茂太郎は感ずる處あつて月明に乗じ、馴れた馬を引つれて、この見世物小屋を立つたものと見えます。

三

三田の薩州邸の附近の越後屋といふ店に奉公してゐた忠作が、その家を辭して、専ら薩州邸内の模様を探りにかゝつたのは、それから間もない時の事でありませぬ。

いろ／＼に變装した忠作の身體が薩州邸を中心に三田のあたりに出没してゐましたが、ある日、越後屋へ立寄つて中庭を通りかゝる一室のうちで聲高に話をしてゐるさむらひの言葉を聞きました。そのさむらひは何者であるか一向わからないが、酒を飲みつゝ威勢のよい話をしてゐるうちに、薩摩といふことが折々出るから、そこで何となく聞き捨てにならなくなつて、

「左様、何と云つても薩摩で第一の人物は西郷吉之助たらう、西郷につゞく者は……西郷につゞく者は、ちよつと誰たか見當がつかない」

「西郷はエライには違ひない、土佐の坂本龍馬が、西郷の度量測るべからず、これを叩くこと大なれば自から大に、これを叩くこと小なれば自から小なりと云つて舌を捲いてゐる處を見ること可なり的人物であることがわかる、中岡慎太郎の手紙でも、此の人學識あり膽略あり常に寡言にして最も思慮雄斷に長じ、偶ま一言を出せば確然人膽を貫く且徳高くして人を服し、屢艱難を経て頗る事に老練と讃め立て、ゝある處を見ても可なりの大豪傑であらうと思はれるが、併し、薩摩に於て西郷はかりが人物ではあるまい、小松帶刀や大久保市藏は西郷に優ることも劣ることなき豪傑たといふ評判じや」

「そりやあ西郷以外にも豪傑が無からう筈はない、まづ殿様の齊彬が非凡の人物で無ければ西郷を引立てる事が出来よう筈が無い、智慧と手腕に於ては小松帶刀や大久保市藏が西郷に優ることも、徳の一點に至つては、梯子をかけても及ぶまい、人物が大きくつて徳がある、英雄首をめぐらせは即ち神仙である、西郷は亂世には英雄になれる頭の振りよう一つでは聖人にも仙人にもなれる處が豪傑中の豪傑だ、恐らく、薩州だけではなく、今の日本を引くるめて第一等の大人物たらうと考へられる」

「エラク西郷に惚込んだものだな、處で、その徳といふものが問題になるのだ、聖人君子の徳といふものは施して求むる處なきもので、その徳天地に等しといふ廣大無邊になるものだが、英雄豪傑の徳といふものは一種の人心收攬術に過ぎんのだからな、西郷の其の徳といふのも要するに

薩摩一國に限られた徳で、大きいと云つた處で、大抵底もあれば裏もあるものだから、此の頃、江戸の市中へ壯士を入れて、いたづらをさせてゐるのも、一に西郷の方寸に出でることではないか、あの男が斯うして傾きかゝつた徳川の腹を立たせようとする策略は、なか／＼腹黒いものだ、西郷にした處で徳川が倒れたら、そのあそを島津に繼がせたからうさ、長州は長州で、また此の次の征夷大將軍は毛利から出さねばならぬと思つてゐるたらう、皆んな相當の芝居氣を持つてゐない奴は無からう、併しこの頃の薩摩屋敷が江戸の町家を荒すのは芝居の筋書が少し亂暴過ぎる」

「ありやあ、西郷がやつてゐるのではない益満がやつてゐるのだ」

「益満といふのは何者だ」

「人によつては西郷につゞく、薩摩での人物だと云つてゐる、益満が采配を振つて、あゝして江戸の市中を騒がしめるのだから、また／＼面白い芝居が見られるたらう」

立ち聞きをしてゐた忠作は此の言葉を聞いて太く興味に打たれました。それでは薩摩屋敷の荒れ者の采配を振つてゐるのは益満といふ男か、その益満といふ男は、どんな男であらうと、忠作は益満といふ名を、しつかりと頭の中へ刻みつけました。

そこを出てから忠作は、薩州屋敷の廻りを一廻りして芝濱へ向いた用心門の處まで來かゝるこ、丁度門内から、忠作よりは二つ三つも年上であらうと思はれる少年が出來ました。少年に似合